

平成 31 年度（2019 年度）

研究開発委員会指導資料集

国 語
社 会
数 学
理 科

保健体育

外国語

特別の教科 道徳

令 和 2 年 3 月

東京都教育委員会

中学校国語研究開発委員会

目 次

I	研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・	3
III	研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・	6
IV	実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・	7
V	成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・	16

〈中学校国語研究開発委員会〉

研究主題

**学習の見通しをもち、
自ら学びをつなぐことができる生徒を育成する指導方法の開発
～書くことの指導を通して～**

I 研究の目的

資質・能力をバランスよく育成するためには、生徒が学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることができるようにすることが重要である。中学校学習指導要領（平成 29 年告示）（以下、「学習指導要領」と表記。）には、「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること。」（第 1 章 総則 第 3 の 1 の（4））と示されており、生徒が自主的に学ぶ態度を育み、学習意欲の向上に資する観点から、各教科等の指導に当たり、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫することが求められている。

しかし、表 1 から、東京都では、学習の見通しをもったり振り返りを行ったりしている生徒の割合が、全国平均に比べて低い状況であることが分かる。

また、表 2 から、教師は目標を示したり学習を振り返らせたりしているつもりであっても、生徒が十分に自覚できていない実態がうかがえる。

表 1 「平成 29 年度全国学力・学習状況調査」（文部科学省）の生徒質問紙調査の結果

「1、2 年生のときに受けた授業の中で目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか」に「当てはまる」と回答した生徒の割合	東京都	44.4%
	全 国	53.1%
「1、2 年生のときに受けた授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」に「当てはまる」と回答した生徒の割合	東京都	19.7%
	全 国	25.3%

表 2 「平成 30 年度『児童・生徒の学力向上を図るための調査』」（東京都教育委員会）の質問紙調査の結果

生徒対象	授業の中で目標（めあて・ねらい）が示されていると思いますか。	そう思う	48.1%
教師対象	授業の中で目標（めあて・ねらい）を生徒に示す活動を計画的に取り入れている。	よく行っている	54.4%
生徒対象	授業では、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。	そう思う	23.4%
教師対象	授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れている。	よく行っている	33.7%

さらに、平成 26 年度から平成 30 年度までの 5 年間の「全国学力・学習状況調査」（「国語 A」及び「国語 B」）の結果における東京都の中学生の領域別の平均正答率から、「書くこと」において、資質・能力の定着に課題があることが分かった（表 3 参照）。

表 3 全国学力・学習状況調査（「国語 A」及び「国語 B」）における東京都（公立）の領域別平均正答率

		平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
国語 A	話すこと・聞くこと	73.5	81.8	81.0	78.2	77.0
	書くこと	84.8	<u>76.2</u>	<u>75.4</u>	87.0	<u>75.3</u>
	読むこと	85.4	87.4	80.8	76.3	78.4
国語 B	話すこと・聞くこと	-	72.7	-	73.9	78.0
	書くこと	<u>43.3</u>	<u>37.9</u>	<u>60.0</u>	<u>62.7</u>	<u>32.2</u>
	読むこと	51.6	64.1	68.6	73.0	56.1

そこで、本研究では研究主題を「学習の見通しをもち、自ら学びをつなぐことができる生徒を育成する指導方法の開発」とし、「書くこと」の領域での指導を通して、生徒が見通しをもって粘り強く学習に取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることができるようにすることで、資質・能力をバランスよく育成する指導方法の研究開発を行っていく。

Ⅱ 研究の仮説

本研究では、以下の二つの視点から指導方法の開発に取り組むことで、学習の見通しをもち、自ら学びをつなぐことができる生徒を育成することができると考える。

1 自らの学習を調整させる指導の工夫

生徒が単元の学習を通して、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするためには、単元の学習の目標に沿って自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど学習を調整しながら、学ぼうとすることが重要であると考えた。そこで、単元で身に付けるべき資質・能力を重点的に学習する場面（以下、「重点的な学習の場面」と表記。）で、自らの学習状況について自己評価・相互評価・教師による評価に基づいて振り返らせるとともに、次の学習への見通しをもたせ、学習の進め方をどのように改善したらよいかを考えさせるための「振り返りシート」（3頁図1参照）を開発し、授業で活用することとした。

この「振り返りシート」により、「重点的な学習の場面」で生徒に学習の進め方を客観的に捉えさせるとともに、他の生徒や教師からの助言を基に学習の進め方をどのように改善したらよいかを考えさせ、次の学習に生かすことができるようにする。また、教師は、「振り返りシート」から生徒の学習の進め方を確認し、それが単元で身に付けさせたい資質・能力の育成に結び付いていない場合には、生徒が適切に学習を調整できるよう、必要に応じて個別に指導する。

このように、「重点的な学習の場面」で、学習の目標に沿って自らの学習状況を振り返らせることで、次の学習への見通しをもたせ、学習の進め方を改善させることができると考えた。

2 身に付けた資質・能力を活用させる指導の工夫

生徒が単元の学習で学んだことを次の学習に生かすことができるようにするためには、単元の学習で身に付けた資質・能力を実際に活用させる場面を設定することが重要である。そこで、表4のように、単元の学習の最後に、その単元で重点的に身に付けさせた資質・能力を活用して解決することができる学習課題に取り組ませる「伸びるタイム」を設定することとした。

「伸びるタイム」では、単元の学習で重点的に身に付けさせる資質・能力の活用にポイントをしぼり、その単元で書かせる文種について、題材や相手、目的を変えた学習課題を設定して取り組ませる。その上で、生徒が自分の学習の状況に応じて効果的に学習を進められるよう、「振り返りシート」における自己評価・相互評価・教師による評価に基づき個別に指導したり、グループ学習の形態等を工夫したりする。

このように、単元の学習で重点的に身に付けさせる資質・能力を活用して解決する学習課題を設定して取り組ませることで、振り返りを生かして自らの学びを次に生かそうとする生徒を育成することができると考えた。

表4 「伸びるタイム」の学習課題等

単元で指導する主な指導事項 (書くこと)	言語活動例で 示されている活動	単元の学習	
		中心となる学習課題	「伸びるタイム」の学習課題
根拠を明確にしなが、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。(ウ)	図表などを引用して事実やそれを基に考えたことを書く活動	先生にすすめたいもののよさを説明する文章を書く。	残菜が少なくなる給食の献立を説明する文章を書く。
目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。(ア)	行事の案内の文章など、伝えるべきことを整理して書く活動	保護者宛てに音楽祭の案内文を書く。	小学生宛てに運動会の案内文を書く。
読み手の立場に立って、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えること。(エ)	随筆など、感じたことや考えたことを書く活動	心に残った出来事を同級生に伝える文章を書く。	合唱コンクールでの出来事を同級生に伝える文章を書く。

《振り返りシート》		1 年 組 番 氏名		
先生におすすめしたいもののよさを説明する文章を書こう ～根拠を明確にしながら自分の考えが伝わる文章を書く～				
時間	学習内容	自分自身による振り返り	他の生徒から	先生から
3	自分の考えのもととなる事実や事柄（根拠）を図表等で明確にする。	①学習目標		
		②自己評価 A よくできている B だいたいできている C あまりできていない	②相互評価 A よくできている B だいたいできている C あまりできていない 記入者（ ）	
		③A・B→どのような点ができているか。 B・C→どのような点を改善したらよいか。	③A・B→どのような点ができているか。 B・C→どのような点を改善したらよいか。	
4	自分の考えのもととなる事実や事柄（根拠）を明確にしながら自分の考えが伝わる文章を書く。	①学習目標		
		②自己評価 A よくできている B だいたいできている C あまりできていない	②相互評価 A よくできている B だいたいできている C あまりできていない 記入者（ ）	
		③A・B→どのような点ができているか。 B・C→どのような点を改善したらよいか。	③A・B→どのような点ができているか。 B・C→どのような点を改善したらよいか。	
5	自分の考えのもととなる事実や事柄（根拠）を明確にしながら自分の考えが伝わる文章を書く。	①学習目標		
		②自己評価 A よくできている B だいたいできている C あまりできていない	②相互評価 A よくできている B だいたいできている C あまりできていない 記入者（ ）	
		③A・B→どのような点ができているか。 B・C→どのような点を改善したらよいか。	③A・B→どのような点ができているか。 B・C→どのような点を改善したらよいか。	
この単元で身に付けた「根拠を明確にしながら自分の考えが伝わるように工夫して書く力」を、この後の国語の学習や他教科等の学習、日常生活等でどのように生かしたいですか。				
実際に生かせたら記録しておこう……				
いつ	何で	どのように		

図1 「振り返りシート」の例

なお、生徒が、ある単元で学習した内容を次の学習に生かせるようにするためには、1年間の学習の見通しをもたせ、その単元の学習が1年間の学習の中でどのような意味があるのかを理解して取り組ませることも重要である。そこで、1年間の「書くこと」の学習において、「いつ、どのような文章を書くのか」、「その学習を通してどのような資質・能力を身に付けるのか」が分かる「学習ロードマップ（書くこと）」（図2参照）を作成した。

「学習ロードマップ（書くこと）」は研究を進めながら作成したものであるため、本研究では年度当初から使用することはできていない。しかし、単元の学習の見通しをもたせたり振り返らせたりする際に活用することによって、単元ごとの学習のつながりを生徒に自覚させることができるものと考え、本研究では検証授業において適宜活用している。



図2 「学習ロードマップ（書くこと）」の例

3 研究の仮説

「書くこと」の領域において、上述の二つの視点に基づいた指導を継続していくことで、生徒は見通しをもって粘り強く学習に取り組み、自己の学習活動を振り返って次の学習につなげながら、書くことの資質・能力を確実に身に付けることができるようになるものと考えられる。

本研究では、以上のことを踏まえ、次のように研究の仮説を設定し、学習指導要領の第1学年「B 書くこと(2)」で示されている言語活動例を踏まえ、検証授業を行っていくこととする。

【研究の仮説】

単元で身に付けるべき資質・能力を重点的に学習する場面で、自らの学習の進め方を振り返り改善を図らせるとともに、単元の学習の最後に、身に付けた資質・能力を活用する学習活動に取り組ませることで、生徒の書く力を確実に育成することができるであろう。

Ⅲ 研究構想図

平成 31 年度（2019 年度）研究開発委員会 中学校国語部会 研究構想図

【研究の背景】

○ 学習指導要領

「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること。」（第 1 章 総則 第 3 の 1 の（4））

○ 「平成 29 年度全国学力・学習状況調査」（文部科学省）の生徒質問紙調査の結果

授業で見通しをもって学習に取り組んだり学習内容を振り返ったりして学習に取り組んでいる生徒の割合が、東京都は全国平均に比べて低い状況

○ 「平成 30 年度『児童・生徒の学力向上を図るための調査』」（東京都教育委員会）の結果

教師は目標を示したり学習を振り返らせたりしているつもりであっても、生徒が十分に自覚できていない実態

【目指す生徒像】

学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることができる生徒

【研究主題】

学習の見通しをもち、自ら学びをつなぐことができる生徒を育成する指導方法の開発
～書くことの指導を通して～

【仮説】

単元で身に付けるべき資質・能力を重点的に学習する場面で、自らの学習の進め方を振り返り改善を図らせるとともに、単元の学習の最後に、身に付けた資質・能力を活用する学習活動に取り組ませることで、生徒の書く力を確実に育成することができるであろう。

【研究の視点】

自らの学習を調整させる指導の工夫

- ・単元で身に付けるべき資質・能力を重点的に学習する場面で、自らの学習状況について自己評価・相互評価・教師による評価に基づいて振り返らせるとともに、次の学習への見通しをもたせ、学習の進め方を改善させる。
- ・「振り返りシート」によって生徒の学習の進め方を確認し、生徒が適切に学習を調整できるよう、必要に応じて個別に指導する。

身に付けた資質・能力を活用させる指導の工夫

- ・重点的に身に付けさせる資質・能力の活用にポイントをしぼり、その単元で書かせる文種について、題材や相手、目的を変えた学習課題を設定して取り組ませる場面を設定する。
- ・生徒が自分の学習の状況に応じて効果的に学習を進められるよう、「振り返りシート」に基づき個別に指導したり、グループ学習の形態等を工夫したりする。

※ 各単元において「学習ロードマップ（書くこと）」を活用し、1 年間の学習のつながりを生徒に自覚させる。

【研究の成果検証】

第 1 学年の生徒を対象として、研究の仮説に基づいて検証授業を行い、次の 2 点を分析して成果検証を行う。

- ・「振り返りシート」における自己評価・相互評価・教師による評価や生徒の記述等
- ・生徒作品やワークシート等

IV 実践事例

【指導事例1】図表などを引用して事実やそれを基に考えたことを書く活動における指導

1 単元名 「先生にすすめしたいもののよさを説明する文章を書こう～根拠を明確にしながら自分の考えが伝わる文章を書く～」

2 単元の指導目標

- (1) 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うことができる。〔知識及び技能〕(2)イ
- (2) 根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)ウ
- (3) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うことができる。((2)イ)	① 「書くこと」において、根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫して書いている。(B(1)エ)	① 粘り強く根拠を明確にしながら、学習課題に沿って説明する文章を書こうとしている。

4 単元の指導計画（7時間扱い）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ●評価規準〔評価方法〕 ◆研究主題に迫るための手だて
1	○ 単元の目標を理解し、学習の見通しをもつ。 ○ 何を先生にすすめするかについて、グループで話し合う。	・「学習ロードマップ（書くこと）」を用いて、これまでの学習を振り返らせるとともに、本単元の目標を理解させ、学習の見通しをもたせる。 ・すすめる理由や根拠を明確にするために、何を、どのように調べるかも考えさせる。
2	○ 自分たちがすすめるもののよさを読み取ることができるデータ等をインターネット等で調べる。	・調べたことをグラフや表にまとめて比べたり関連付けたりさせながら、自分たちの考えが確かな事実や事柄に基づいたものであるかを確かめさせる。 ●知識・技能①〔ワークシート〕
3	○ 自分の考えと、根拠となる事実や事柄との関係を整理する。 ○ 考えと根拠との関係をメモしたもののモデルを読み、考えと根拠との関係について考える。 ○ 考えと根拠との関係を互いに確認し合い、自分の考えの根拠が明確となっているかについて振り返る。	・自分の考え（すすめるもののよさ）と根拠（前時にまとめた図表等）との関係をワークシートにまとめさせる。 ・教師が作成したモデルを基に、根拠を明確にするとはどういうことかについて考えさせる。 ◆「振り返りシート」を基に、根拠を明確にできているかについて自己評価・相互評価をさせ、自分の考えや根拠をどのように修正したらよいかを考えさせる。 ●主体的に学習に取り組む態度①〔振り返りシート〕
4	○ 前時の振り返りを基に、自分がおすすめるもののよさを説明する文章を書く。	◆「振り返りシート」の教師からの助言も参考にさせ、自分の考えと根拠との関係を再考しながら文章を書かせる。 ・「振り返りシート」を基に、支援が必要な生徒には個別に指導する。

5	○ 自分がおすすめるもののよさを説明する文章のモデルを読み、どのように書くと、根拠を明確にしながら自分の考えが伝わるのかを考える。 ○ 根拠を明確にしながら自分の考えが伝わる文章になるように工夫できているかという観点から互いの文章を評価し合い、これまでの学習を振り返る。	・教師が作成したモデルを基に、どのような事実や事柄に基づいて自分の考えを説明しているかを確認させ、根拠を明確にしながら書くポイントを考えさせる。 ◆「振り返りシート」を活用して、これまでの学習を振り返らせる。 ●主体的に学習に取り組む態度① [振り返りシート] ●思考・判断・表現① [生徒作品]
6 【伸びるタイム】	○ 給食の献立表、月別残菜量調査のデータを基に、残菜が少なくなるメニューを考えて説明する文章を書く。	・前時までの学習で学んだことを想起させ、残菜が少なくなるメニューを考えるのに必要な情報を考えさせる。 ・4人程度のグループで、自分が説明するメニューの根拠が明確となっているかを互いに確認し合いながら文章を書かせる。 ・前時の振り返りを基に、支援が必要な生徒には個別に指導する。 ●思考・判断・表現① [生徒作品]
7 【伸びるタイム】	○ 生徒作品を基に教師が作成したモデルを読み、事実やそれを基に考えたことを書く文章の書き方について考える。 ○ 前時に書いた文章を互いに読み合い、自己評価・相互評価をする。 ○ 単元の学習を振り返る。	・どのような図表を用いると、残菜が少なくなるメニューの根拠が明確となるかを考えさせる。 ◆互いの文章の根拠が明確に書かれているかという観点から自己評価・相互評価をさせる。 ◆「振り返りシート」を活用して、根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章を書くために、どのように試行錯誤をしたのかを振り返らせ、本単元で学んだことを、今後の学習でどのように生かしたいかを考えさせる。 ●主体的に学習に取り組む態度① [振り返りシート]

※評価を行う場面は、記録に残す評価を行う場面のみを示している。

5 指導の結果と考察

(1) 自らの学習を調整させる指導の工夫

図3は、第3時に自分の考えと根拠との関係を、図表を用いてまとめたものの例である。ここでは、3種類のアイスと比較しているが、相互評価において他の生徒から「自分が食べて感じたおいしさを5段階で評価しているが、おいしさの感じ方は人それぞれだから、根拠にはならないのではないか」という指摘を受けた。そこで、図3のようにまとめた生徒に対して「おいしさではない観点で考えてみましょう。」と助言した。その結果、第4時では、図4のように「おいしさ」ではなく「健康への影響」について、脂質の数値を根拠として示しながら文章を書くことができた。また、ここでの学習を生かし、第6時では図5のような文章を書いた。このように、多くの生徒が、第3時までの学習では根拠を明確にすることに課題が見られたが、相互評価や教師からの助言によって、第4時や第7時には根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫して書くことができた。このことから、学習を調整する場面を設定して、相互評価や教師からの助言を基に振り返らせる指導は、生徒の書く力を確実に育成する上で有効であったと言える。

一方で、相互評価で適切な助言をできない場合も見られた。しかし、このような場合でも、教師による助言を参考にして、第4時に適切に助言できるようになった生徒もいた。このことから、相互評価だけではなく、教師による適切な助言のモデルを示していくことが必要であると考えられる。

根拠				自分の考え
商品名	価格 (税抜き)	内容量	1ml当たりの 価格	
A	184 円	68 ml	約 2.7 円	→ Bが1個当たりの価格も安く、1ml当たりの価格も安いので、Bが最もお買い得
B	162 円	130 ml	約 1.3 円	
C	276 円	90 ml	約 3.1 円	

商品名	おいしさ
A	★★★★☆
B	★★★★★
C	★★★★☆

→ 5段階の評価ではBが五つ星なので、Bが最もおいしい。

図3 第3時に生徒がまとめたものの例（一部抜粋）

(2) 健康への影響

お買い得だとしても、健康に悪い影響があるアイスを先生にすすめることはできない。

「食生活指針」（農林水産省）では脂質のとり過ぎに注意することが示されている。そこで、それぞれのパッケージに表示されているカロリーと脂質を調べて、表2にまとめた。脂質は、成人では1日50g程度の摂取が目安とされている（X製薬ホームページ）ので、Aだと、脂質のとり過ぎになる可能性がある。このことから、健康への影響を考えると、BかCのアイスをおすすめするのがよいといえる。

表2 脂質の比較

商品名	脂質
A	17.5g
B	5.7g
C	5.2g

図4 第5時に生徒が書いた文章の例（一部抜粋）

A中学校第1学年の残菜を減らす献立について 1 はじめに 最近、コンビニやレストランなどで食品ロスを減らす取り組みが増えている。私たちも、給食の残菜をできるだけ減らしたいと考え、A中学校第1学年を対象に行った残菜調査の結果を基に、残菜を減らす献立を考えたい。 2 残菜調査の結果の分析 (1) 月別種類別残菜の比較 まず、献立を考えるために、表1のように種類別で何月の残菜量が少なかったかを比べてみた。 すると、サラダ類は4月、汁物は7月、主食は6月が残菜量が一番少ないことが分かった。 では、残菜量が一番少ない月は、どのような献立となっていたのだろうか。 (2) 残菜が少ない月の献立 まずはサラダ類を比べて。表2のように、和え物よりもサラダやおひたしの方が多かったことが分かった。サラダとおひたしではサラダの方が野菜の種類が多いので、サラダの方が健康面からもよいと考えた。		次に、汁物を比べて。表3のように、シチューやスープなどのスープ類は少ないけれど、みそ汁や豚汁などの「～汁」の方が給食に出た回数が多いことが分かる。このことから、スープ類ではなく、みそ汁などの「～汁」の方が、給食の献立にするのによいと考えた。 最後に、主食を比べて。 図1のように、主食で給食に出た回数が最も多いのは、カレー、丼物、混ぜご飯などの混ぜご飯類で、パンやめん類よりも、給食に出てきた回数が多いことが分かる。このことから、主食の中で献立にするのは、カレー、丼物、混ぜご飯などの混ぜご飯類が最もよいと考えた。 3 結論 以上の分析から、私は、残菜を減らす献立として、混ぜご飯類と「～汁」、野菜がたくさん入ったサラダを提案する。この献立なら、A中学校第1学年のみんなが給食をおいしくたくさん食べられて、残菜が少なくなると考える。	
---	--	---	--

図5 第6時に生徒が書いた文章の例

(2) 身に付けた資質・能力を活用させる指導の工夫

「伸びるタイム」の学習に入る際には、生徒から「今までの学習で身に付けてきた力を試したい」、「もっとよい文章を書くことに挑戦できるのがうれしい。」という声上がり、意欲的に学習に取り組もうとする姿が見られた。第6時は、第5時の教師による評価に基づき、様々な習熟度の生徒が互いに学び合えるよう編成したグループでの学習を行った。この学習では、互いに助言し合う過程で、根拠を明確にしながらかく際のポイントを言語化し定着させている様子が見られた。その結果、第7時の教師による評価では、約9割の生徒が目標を達成することができた。このことから、それまでの学習とは異なる題材で、身に付けた資質・能力を活用させる場面を設定し、意図的なグループ編成による学習に取り組ませることで、生徒の書く力を確実に育成することができたと言える。

表5 「振り返りシート」の結果（対象157名）

	自己評価			相互評価			教師による評価		
	よくできている (A)	だいたいできている (B)	あまりできていない (C)	よくできている (A)	だいたいできている (B)	あまりできていない (C)	十分満足できる (A)	おほむく満足できる (B)	努力を要する (C)
①(第3時)自分の考えの根拠を明確にすることができているか。	3.2%	73.9%	22.9%	15.3%	74.5%	10.2%	13.4%	44.6%	42.0%
②(第5時)根拠を明確にしながらかく自分の考えが伝わる文章を書くことができているか。	14.0%	70.7%	15.3%	36.9%	58.6%	4.5%	34.4%	54.1%	11.5%
③(第6時)根拠を明確にしながらかく自分の考えが伝わる文章を書くことができているか。	20.4%	69.4%	10.2%	38.9%	56.1%	5.1%	29.9%	57.3%	12.7%

【指導事例2】行事の案内の文章など、伝えるべきことを整理して書く活動における指導

1 単元名 「音楽祭の案内文を書こう～集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にする～」

2 単元の指導目標

(1) 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くことができる。

〔知識及び技能〕(3)エ(ア)

(2) 目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕(1)Bア

(3) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

〔学びに向かう力、人間性等〕

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書いている。(3)エ(ア))	① 書くことにおいて、目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にしている。(1)Bア)	① 進んで集めた材料を整理し、学習の見通しをもって行事の案内の文章を書こうとしている。

4 単元の指導計画（5時間扱い）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ●評価規準〔評価方法〕 ◆研究主題に迫るための手だて
1	○ 単元の目標を理解し、学習の見通しをもつ。 ○ 保護者宛ての案内の文章に必要な情報を、音楽祭の実施要項等から集める。	・「学習ロードマップ（書くこと）」を用いて、これまでの学習を振り返らせるとともに、本単元の目標を理解させ、学習の見通しをもたせる。 ・実施要項等を見ながら、保護者宛ての案内に必要なだと思う情報を付箋紙に書き出させ、どの順序で示すとよいかを考えさせる。
2	○ モデルとなる文章（地域の方に宛てた別の行事の案内の文章）を読み、案内の文章に必要な情報について考える。 ○ 自分が文章に掲載しようとした情報の適切さを互いに確認し合い、材料の集め方について振り返る。	・行事の案内の文章では、相手が必要とする情報のうち、重要度の高いものから掲載すると読みやすくなることを理解させる。 ◆「振り返りシート」を基に、自己評価・相互評価を行わせる。 ◆自己評価・相互評価を踏まえ、自分が案内の文章に掲載しようとした情報の必要性や記載する順序について、再考させる。 ●主体的に学習に取り組む態度①〔振り返りシート〕
3	○ 前時の振り返りを踏まえ、案内の文章を書く。 ○ 保護者宛ての案内の文章に必要な情報が明確に書かれているかという観点から互いの文章を評価し合い、これまでの学習を振り返る。	・「振り返りシート」の教師からの助言も参考にさせる。 ・「振り返りシート」を基に、支援が必要な生徒には個別に指導する。 ●知識・技能①〔ワークシート〕 ●思考・判断・表現①〔生徒作品〕 ◆「振り返りシート」を活用して、これまでの学習を振り返らせる。 ●主体的に学習に取り組む態度①〔振り返りシート〕

4 【伸びるタイム】	○ 小学生宛ての運動会の案内の文章に必要な情報を整理する。 ○ 整理した情報を基に、案内の文章を書く。	・ 前時までの学習で学んだことを想起させ、相手や目的に必要な情報を考えさせる。 ・ 4人程度のグループで、案内の文章に記載する情報の必要性や記載する順序を互いに確認し合いながら書かせる。 ・ 前時の振り返りを基に、支援が必要な生徒には個別に助言する。 ●思考・判断・表現① [生徒作品]
5 【伸びるタイム】	○ 生徒が書いた文章を基に教師が作成したモデルを読み、案内の文章の書き方について考える。 ○ 前時に書いた文章を互いに読み合い、自己評価・相互評価をする。 ○ 単元の学習を振り返る。	・ どのような情報が、小学生宛ての運動会の案内の文章に必要なかを考えさせる。 ◆互いの文章に必要な情報が明確に書かれているかという観点から自己評価・相互評価をさせる。 ◆「振り返りシート」を活用して、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にするために、どのように試行錯誤をしたのかを振り返らせ、本単元で学んだことを、今後の学習でどのように生かしたいかを考えさせる。 ●主体的に学習に取り組む態度① [振り返りシート]

※評価を行う場面は、記録に残す評価を行う場面のみを示している。

5 指導の結果と考察

(1) 自らの学習を調整させる指導の工夫

第1時では、図6のように、保護者が音楽祭に来るという点からは必要のない「目的」を付箋紙に書き出し、実施要項どおりに優先順位を高くしているのが見られた。しかし、そのような場合であっても、第2時に振り返りを行った際に、相互評価による客観的な意見や教師からの助言をもらうことで、自らの学習の状況を的確に把握し、案内の文章に書く情報を見直して図7のような文章を書くことができた。

一方で、生徒による自己評価が、相互評価や教師による評価よりも高い傾向が見られた。これは、

目的 ①全校生徒の文化的・音楽的体験を通じて知性・教養を高め豊かな情操を養うとともに、生徒一人一人の個性の伸長を図る。 ②合唱の活動を通じて、合唱の楽しさを感じ得させるとともに、まとまりのある学級集団作りの一助とする。	記 1 日時 令和元年 10月30日(水) 2 場所 A芸術劇場 Bホール C線D駅から徒歩約20分 地図(省略) 3 時程 10:00 開会式 10:10 1・2年生の部 12:50 3年生の部 14:15 吹奏楽部・PTA合唱 14:50 閉会式 4 お願い ・車での御来場は御遠慮ください。ただし、電車や徒歩での御来場が難しい場合は、御相談ください。 ・ホール内は飲食禁止です。 ・カメラ等による撮影は可能ですが、フラッシュの使用は御遠慮ください。
日時 10月30日(水)	
場所 A芸術劇場 Bホール C線D駅から徒歩約20分	
時程 7:50 一般生徒 D駅集合 10:00 開会式 10:10 1・2年生の部 11:50 昼食	

図6 第1時に記入したワークシートの例(一部抜粋)

図7 第3時に書いた文章の例(一部抜粋)

案内の文章にとって必要な情報とは何かということを十分に理解しないまま自己の学習状況を振り返ったことで、不要な情報を書いたり必要な情報を書いていなかったりしていることに気が付かずに自己評価を行ったためと考えられる。

これらのことから、「重点的な学習の場面」において、自己評価を行わせるだけでなく、相互評価や教師による評価を迅速にフィードバックするとともに、必要な助言を与えることで、生徒自身の学習の調整の質を高めていくことが重要であると言える。

(2) 身に付けた資質・能力を活用させる指導の工夫

第4時・第5時の「伸びるタイム」では、多くの生徒が、案内の文章を書くという学習活動に再度挑戦できることで、音楽祭の案内の文章よりもよい文章を書こうと試行錯誤しながら取り組む様子が見られた。図8は、読み手として小学校1年生を設定し、小学生が参加できる「A中ぼんおどり」についての情報を書いたり、小学生には分かりにくい「西門」の場所を図で示したりするなど、第3時までの学習を生かし、読み手に必要な情報を整理して書くことができた文章の例である。このように、第4時では、第3時までの学習を生かして、約9割の生徒が運動会の案内の文章に必要な情報を整理し、伝えたいことを明確にして書くことができた(表6参照)。これらのことから、本検証授業では、身に付けた資質・能力を活用させる場面を設定して意欲的に学習に取り組ませることで、生徒の書く力を確実に育成することができたと言える。

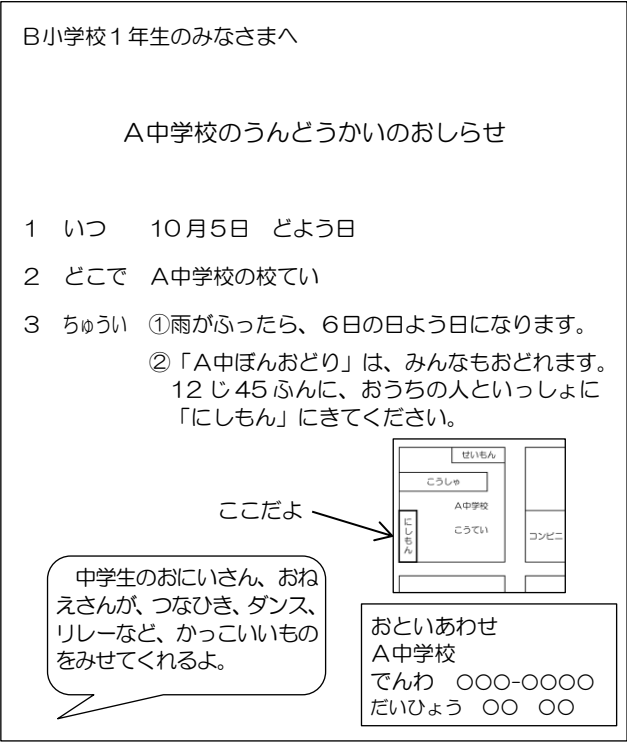


図8 第4時に書いた案内の文章の例

表6 「振り返りシート」の結果(対象154名)

	自己評価			相互評価			教師による評価		
	よくできている (A)	だいたいできている (B)	あまりできていない (C)	よくできている (A)	だいたいできている (B)	あまりできていない (C)	十分満足できる (A)	おおよそ満足できる (B)	努力を要する (C)
①(第2時)保護者に向けた音楽祭の案内の文章に必要な情報を整理できているか。	55.8%	31.8%	12.3%	29.2%	59.7%	11.0%	14.9%	69.5%	15.6%
②(第3時)保護者宛ての案内の文章に必要な情報を整理して書くことができているか。	41.6%	38.3%	20.1%	20.8%	53.9%	25.3%	32.5%	53.2%	14.3%
③(第4時)小学生宛ての案内の文章に必要な情報を整理して書くことができているか。	44.8%	42.2%	13.0%	38.3%	51.3%	10.4%	19.5%	67.5%	13.0%

【指導事例3】詩を書いたり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動における指導

1 単元名

「心に残った出来事を文章で伝えよう～読み手の立場に立って文章を整える～」

2 単元の指導目標

(1) 比喩、反復、倒置、体言止めなどの表現の技法を理解し使うことができる。

〔知識及び技能〕(1)オ

(2) 読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕(1)Bエ

(3) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

〔学びに向かう力、人間性等〕

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 比喩、反復、倒置、体言止めなどの表現の技法を理解し使っている。(1)オ	① 「書くこと」において、読み手の立場に立って、語句の用法叙述の仕方などを確かめて、文章を整えている。(1)Bエ)	① 積極的に文章を整え、今までの学習を生かして心に残った出来事を伝える文章を書こうとしている。

4 単元の指導計画（5時間扱い）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ●評価規準・評価方法 ◆研究主題に迫るための手だて
1	○ 単元の目標を理解し、学習の見通しをもつ。 ○ 最近の出来事等から、同級生に伝えたい「心に残った出来事」を決める。 ○ 心に残った出来事を300字程度の文章として書く。	・「学習ロードマップ（書くこと）」を用いて、これまでの学習を振り返らせるとともに、本単元の目標を理解させ、学習の見通しをもたせる。 ・最近の出来事をマッピング等で想起させ、同級生に伝えたい出来事を決めさせる。 ・文章の前半は「心に残った出来事」、後半は「その出来事を通して感じたことや考えたこと」という構成を例示し、文章構成や表現の仕方などにこだわらずに、ひとまとまりの文章として書き上げさせる。
2	○ グループで互いの下書きを読み合い、分かりにくい部分について確認し合う。 ○ 教師が作成したモデルの文章を読み、心に残った出来事を伝えるのにふさわしい語句の用法、叙述の仕方について考える。 ○ 自分が書いた下書きを読み手の立場に立って読み返し、語句の用法、叙述の仕方などを確かめ、気が付いたことや考えたことを下書き用紙に書き込む。	・他の生徒が書いた下書きを読ませ、読みにくいと感じたり分かりにくいと思ったりした部分に色ペンでコメントを書かせる。 ・表現の技法等に注目させ、心に残った出来事を伝えるのにふさわしい語句の用法、叙述の仕方について考えさせる。 ●知識・技能①〔ワークシート〕 ・心に残った出来事を伝えるのにふさわしい語句の用法、叙述の仕方や既習の表現の技法を踏まえ、自分の下書きの表現について確かめさせる。 ・確かめて気が付いたことを基に、どのように文章を整えたいかを考えて付箋紙に書き込み、下書き用紙に貼らせる。

3	○ 教師が作成した推敲のモデルを基に推敲の仕方について考える。 ○ 自分の推敲の仕方を振り返る。	・「読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて文章を整える」という学習の目標に沿って推敲したり、目標と関係なく推敲しているモデルを示し、今回の学習ではどのような観点で推敲したらよいかを考えさせる。 ◆「振り返りシート」を基に、自己評価・相互評価を行わせる。 ◆自己評価・相互評価を踏まえて、自分の推敲の仕方をどのように改善するかを考えさせる。 ●主体的に取り組む態度① [振り返りシート]
4	○ 前時の振り返りを踏まえ、再度推敲しながら文章を清書する。 ○ 読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかという観点から互いの文章を評価し合い、これまでの学習を振り返る。	・「振り返りシート」の教師からのコメントも参考にさせる。 ・支援が必要な生徒には個別に指導する。 ●思考・判断・表現① [生徒作品] ◆「振り返りシート」を活用して、これまでの学習を振り返らせる。 ●主体的に取り組む態度① [振り返りシート]
5 【伸びるタイム】	○ 以前、自分が書いた「合唱コンクール」についての文章を推敲する。 ○ 推敲した文章を互いに読み合い、自己評価・相互評価をする。 ○ 単元の学習を振り返る。	・これまでの学習を生かし、読み手の立場に立って語句の用法、叙述の仕方など確かめさせ、加筆・修正する内容を、付箋紙等を用いて書き込ませる。 ・4人程度のグループで、互いの推敲の仕方について助言させる。 ●思考・判断・表現① [生徒作品] ・読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて文章を整えているかという観点から、自己評価・相互評価をさせる。 ◆「振り返りシート」を活用して、どのように試行錯誤をしたのかを振り返らせ、本単元で学んだことを、今後の学習でどのように生かしたいかを考えさせる。 ●主体的に取り組む態度① [振り返りシート]

※評価を行う場面は、記録に残す評価を行う場面のみを示している。

5 指導の結果と考察

(1) 自らの学習を調整させる指導の工夫

図9は、第1時に下書きとして書いた文章の例である。この生徒は第3時に、本単元の目標に沿って自らの推敲の仕方を振り返り、「振り返りシート」に「表現の技法を効果的に使おうとして推敲したが、今のままだと自分が伝えたい『悔しかったこと』が読み手に伝わらないと気付いた。勝った試合よりも引き分けた試合を中心に書きたい。」と記入している。これは、第3時にモデルを用いて推敲の仕方を考えさせたことで、具体的に自らの推敲の仕方について振り返ることができたためだと考えられる。その結果、第4時に図10のように清書することができた。このように、自らの学習の状況を捉えることで、約8割の生徒が第4時に適切に推敲することができるようになった(表7参照)。

一方で、振り返りを行った際の自己評価では、自分の取組を高く評価することや相手の取組を厳しく評価することへの抵抗感から、自己評価を低く、相互評価を高くする傾向が見られた。このような

場合、「振り返りシート」で教師による評価を伝えることで、客観的に自らの学習の状況を捉えることができるようにするとともに、個別に支援が必要な生徒には、丁寧に指導する必要がある。

(2) 身に付けた資質・能力を活用させる指導の工夫

図 11 は、本単元よりも前に書いていた「合唱コンクール」についての文章の例である。この生徒は、第4時の振り返りシートに「読み手に自分の感じたことをしっかりと伝えるためには、うれしかったことを『うれしかった』という言葉を使わずに表現するような工夫が必要だと分かった」と記入していた。そして、第5時の振り返りシートには「緊張していることを伝えるために、『緊張』という言葉を使わずに表現することができた」と書いているとおり、図 12 のように、自分の緊張している様子が読み手に伝わるよう整えて書くことができている。このように、多くの生徒が第4時までの学習の振り返りを生かして、「伸びるタイム」の学習に取り組み、約8割の生徒が目標を達成することができた（表7参照）。このことから、身に付けた資質・能力を活用させる場面を設定して、それまでの学習の振り返りを踏まえて学習に取り組ませることは、生徒の書く力を確実に育成することに有効であると言える。

私が最近印象に残ったのは、八月に行われたバレーボール大会の出来事だ。六月に三年生が引退し、新チームで行う初めての試合が八月に行われた大会だった。私が大会でがんばったことは、四試合のうち一勝できたことだ。最初はとても緊張していたが、先輩の力バもあり、たくさんスパイクを決めることができた。また、この一勝は私たちが試合の日まであきらめずに練習してきたからこその一勝だったと思うから、これからの練習に生かしていきたいと思う。

悔しかったことは、一試合引き分けたことだ。あともう少しスパイクを決められたら勝てたかもしれない。本当に悔しかった。この悔しさをばねにこれからの練習に励んでいきたいと思う。

図9 第1時に書いた下書きの例

八月に行われたバレーボール大会。三年生が引退してから、新チームで初めて出場した大会だ。私は、最初、とても緊張していたが、先輩の力バもあり、たくさんスパイクを決めることができた。そして一勝することができた。しかし、勝てるはずの試合で、私たちは引き分けになってしまった。私たちは、ボールを上げるころまではできていた。でも、相手の高い壁は、私の打ったスパイクをことごとくはじかえた。

自分ももっとスパイクを決めることができれば、勝てたはずだ。そう思うと、本当に悔しい。この悔しさを力に変えられるように、これからの練習に励んでいきたい。

図10 第4時に清書した文章の例

一組の出番が来た。深呼吸して気を楽にしようと思ったけれど、それとは逆に緊張は増すばかり。前からどんどん舞台上に向かっていった。私は緊張しながら歩いて行った。緊張したままマイクの前に立つと、私の緊張は最高潮に達した。でも、最初の一言を話すと、あとは練習どおりですらすらと言葉が出てきた。

図11 以前に書いていた文章の例(一部抜粋)

一組の出番が来た。深呼吸をして落ち着こうと思ったけれど、うまく深呼吸できなかつた。前の人からどんどん舞台上がっていく。私はクラス紹介の紙を強く握りしめ、歩いて行った。ドッ、ドッ、ドッ……。マイクの前に立つと、シーンと静まり返った会場で、自分の心臓の音だけが鳴り響いているように感じた。でも、最初の一言を話すと、自分の声はつきりと聞こえ、あとは練習どおりですらすらと言葉が出てきた。

図12 第5時に推敲した文章の例(一部抜粋)

表7 「振り返りシート」の結果(対象122名)

	自己評価			相互評価			教師による評価		
	よくできている (A)	だいたいできている (B)	あまりできていない (C)	よくできている (A)	だいたいできている (B)	あまりできていない (C)	十分満足できる (A)	おほむね満足できる (B)	努力を要する (C)
①(第3時)読み手の立場に立って叙述の仕方などを確かめることができているか。	0.0%	59.0%	41.0%	35.2%	46.7%	18.0%	9.8%	62.3%	27.9%
②(第4時)読み手の立場に立って叙述の仕方などを確かめられて文章を整えることができているか。	8.2%	77.9%	13.9%	60.7%	28.7%	10.7%	19.7%	59.8%	20.5%
③(第5時)読み手の立場に立って叙述の仕方などを確かめられて文章を整えることができているか。	8.4%	74.8%	16.8%	55.5%	38.7%	5.9%	26.2%	57.4%	16.4%

V 成果と課題

1 成果

(1) 自らの学習を調整させる指導の工夫の有効性

本研究では、単元の最後だけでなく、「重点的な学習の場面」において、自己評価・相互評価・教師による評価に基づいて生徒に自らの学習状況を客観的に把握させ、学習の進め方を考えさせた。このことにより、生徒が自らの学習を調整し、単元の目標を達成できるようになっていく姿を見ることができた。また、学習の調整が適切でない場合には、教師がコメント等で助言することで、個に応じて学習の進め方を改善させることができた。その結果、どの検証授業でも、単元の最後では約8～9割の生徒が目標とする資質・能力を身に付けることができた。このことから、「重点的な学習の場面」において、自らの学習を調整させる指導を工夫することで、生徒の書く力を確実に育成することができたと言える。

(2) 身に付けた資質・能力を活用させる指導の工夫の有効性

本研究では、単元の学習の最後に、その単元で重点的に身に付けさせた資質・能力を活用して解決することができる学習課題に取り組ませる「伸びるタイム」を設定した。このことにより、どの検証授業でも、それまでの学習活動を振り返って気が付いたことを生かそうとする生徒の姿が見られた。また、それまでの学習における教師の評価を基に、様々な習熟度の生徒で学び合うことができるよう意図的なグループ編成を行った。このことにより、それまでに学習したポイントを、生徒がそれぞれ言語化して助言し合うことで、単元で育成を目指す資質・能力をより定着させている様子が見られた。これらのことから、振り返りを生かすことができる学習の場면을意図的・計画的に設定し、身に付けた資質・能力を活用させる指導を工夫することは、生徒の書く力の確実な育成に有効であると考えられる。

2 課題

(1) 振り返らせる際の観点を明確にするためのモデルの提示

検証授業の過程では、学習を調整させる場面で生徒が自己評価や相互評価を適切に行うことが難しい場合も見られた。この要因は、教師が、その単元で身に付けさせたい資質・能力に沿って振り返らせる観点をしぼり切れなかったり、ポイントが明確でないモデルの文章を示したりしたことによるものと考えられる。そのため、何を基準に、どのように評価すればよいのかを生徒が十分に理解することができず、全体的な印象で評価を行ってしまい、適切な評価とならなかったものと考えられる。

学習を調整させる場面では、生徒が自らの学習を振り返るための観点を具体的に理解することが必要である。したがって、教師が単元の目標に沿った観点を設定し、どのような文章を書けていれば目標を達成したことになるのかということが分かる具体的なモデルを示すことが重要である。その上で、観点ごとに「よくできている点」や「改善が必要な点」を考えさせることが大切である。

(2) 身に付けさせたい資質・能力を活用させる学習課題の設定

「伸びるタイム」では、その単元で身に付けさせたい資質・能力の活用にしぼった学習課題を設定した。本研究では、残菜調査のデータを与えたり、小学生に向けた運動会の案内文を題材にしたり、既に一度書いた文章を用いたりすることで、身に付けさせたい資質・能力の活用を生徒が注力できるような学習課題を設定した。研究の過程では、このような学習課題を設定するまでに多くの議論を必要とした。身に付けさせたい資質・能力を生徒が活用できるよう、他教科等での学習や学校行事、地域の行事等や生徒の実態を踏まえ、ねらいに沿った学習課題を吟味する必要がある。そのためにも、学校や地区の教科部会など複数の教師で教材研究に取り組む機会をもつことが大切である。

中学校社会研究開発委員会

目 次

I	研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・	2
III	研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・	4
IV	研究の成果と課題・・・・・・・・	15

〈中学校社会研究開発委員会〉

研究主題

単元の問いを活用した社会参画意識の高まりをもたせる
学習活動の工夫
～単元の問いへの学習の見通しを振り返る活動の習慣化～

I 研究の目的

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、人工知能をはじめとする様々な技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく、急速に変化しており、予測困難な時代となっている。こうした社会の中で、社会を所与のものとして受動的に捉えるのではなく、社会の形成者の一人としての自覚をもたせ、持続可能な社会への参画意識を高めさせることが必要である。

このような時代を背景に、中学校学習指導要領解説社会編（平成 29 年 7 月）では、「単元など内容や時間のまとまりを見通した『問い』を設定し、『社会的な見方・考え方』を働かせることで、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする学習を一層充実させることが求められている」としている。また、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（文部科学省 平成 31 年 1 月 21 日）では指導と評価の一体化による資質・能力のバランスがとれた学習評価を行うことが求められており、評価の観点が 3 観点となる中で主体的に学習に取り組む態度の評価方法の研究・開発についても、一定の社会的な要請があると考えられる。

これらのことから、本研究では、平成 29、30 年度の研究成果を生かしつつ、単元の学習を展開する中で生徒自身が「単元を見通した問い」（以下、「問い」と表記。）を設定した上で、「問い」に対する「学習の見通し」を設定させ、授業ごとにその学習の見通しへの振り返り活動を行う。そして、このことで、主体的に学習に取り組む態度を育むことにつながり、社会参画意識の高まりにもつながることを明らかにする。

II 研究の方法

研究仮説

「単元を見通した問い」を生徒に作成させ、その「問いを振り返る活動」を本時の学習内容の振り返りとは別活動として毎行わせて習慣化すれば、学習への主体的な取組や学習の有用性を生徒が実感することができ、社会参画意識の高まりにつながるだろう。

平成 29 年度は「学びに向かう力を高める指導の工夫」として、「問い」を基に、学習した内容を踏まえた単元のまとめを行い、新たな「問い」を生徒自身に設定させた。結果として、「問い」は生徒にも授業者にも見通しをもって学習に取り組み、学ぶ意義を感じさせることに効果的であることが示された。課題として、単元で捉えさせるべき事は何かを授業者が確実に把握し、必要な学習内容を焦点化することが挙げられた。平成 30 年度は単元における学習内容の焦点化を図るとともに、生徒自身が現代的な諸課題に結び付くような学習課題の設定を行い、追究させる学習活動を展開した。結果として「問いをつくる焦点」を設定することや生徒自身による学習課題の設定が生徒の主体的な学習に効果的であることが示された。

本研究では、「問い」を生徒に作成させた上で、その「問いを振り返る活動」を毎回行い、単元の学習内容のつながりを生徒自身が意識して学習活動に取り組める指導内容と指導方法の開発を目指した。具体的には、「問い」を振り返るワークシート教材（以下、「振り返りシート」と表記。）を開発し、「問い」に対して生徒自身が考えた学習の見通しを、授業ごとの内容を踏まえた上で、修正したり、加筆したりする作業を習慣化させた。「問い」に対する自分の考えの変容を明示化するシートを用いた振り返りの習慣化は、生徒に「問い」を意識させ、毎回の授業の単元における位置付けを捉えさせ、学習への主体的な取組や学習の有用性を実感させる。このことは、時間軸や空間軸、社会的な見方・考え方を働かせて社会を捉えることにつながり、社会参画意識の高まりをもたせることにもつながると考える。

資料 2 研究概念図



Ⅲ 研究の内容

1 指導事例 1

指導事例 中学校学習指導要領 歴史的分野 大項目 B 近世までの日本とアジア
第1学年 単元名 歴史的分野 律令国家の形成～飛鳥時代

(1) 単元の目標

- ア 律令国家の確立に至るまでの過程を基に、東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられていったことを理解する。
- イ 東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化に着目して、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する。
- ウ 律令国家の確立に至るまでの過程について、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う。

(2) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・律令国家の確立に至るまでの過程などを基に、東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられたことを理解している。	・東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化に着目して、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	・律令国家の確立に至るまでの過程について、見通しをもって学習に取り組もうとし、学習を振り返りながら課題を追究しようとしている。

(3) 研究主題との関わり

本単元のねらいは、律令国家の確立に至るまでの過程を基に、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する中で、東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられていったことを理解することにある。

また、本研究では、中学校学習指導要領や平成30年度研究開発委員会の先行研究から、「問い」を生徒に作成させた上で、その「問いを振り返る活動」を毎回行わせて習慣化し、単元の学習内容のつながりを生徒自身が意識して学習活動に取り組める指導内容と指導方法の開発を目指した。

そこで本単元でも、単元の学習の始めに生徒自身に「問い」を作成させ、それぞれの時間で学習内容の振り返りとは別に「振り返りシート」を活用した「問いを振り返る活動」を取り入れ、生徒の学習への主体的な取組や学習の有用性を生徒が実感して社会参画意識の高まりをもたせることを目指した。

(4) 単元の指導計画と評価規準（5時間扱い）

時	学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価規準（評価の観点、評価方法）
1	単元を通しての問いづくり	・単元を見通した問いを自ら考え、見通しをもって学習に取り組もうとしている。（ウ 授業用プリント）
2	聖徳太子の国づくり	・聖徳太子の政治や外交について調べ、聖徳太子がどのような国

2 (本時)		を目指していたか考察している。(イ 授業用プリント) ・聖徳太子が中国とどのような関係を結ぼうとしたかを資料を基に考察している。(イ 授業用プリント)
3	大化の改新と東アジア	・大化の改新や壬申の乱を経て天皇を中心とする国づくりが進んでいったことを理解している。(ア 授業用プリント) ・白村江の戦いに敗れた後、危機感をもって国家体制を固めていったことを理解している。(ア 授業用プリント)
4	飛鳥文化と白鳳文化	・飛鳥・白鳳文化の建築物や仏像を概観し、その特色を理解している。(ア 授業用プリント) ・遣唐使が派遣された目的やその影響について、多面的・多角的に考察している。(イ 授業用プリント)
5	単元のまとめ	・各時の振り返りを踏まえ、自己の学習について振り返り、調整しようとしている。(ウ 振り返りシート)

(5) 本時の指導

ア 本時の目標

(ア) 聖徳太子の行った政治について調べて理解し、聖徳太子がどのような国を目指していたかを考察する。

(イ) 聖徳太子が中国とどのような関係を結ぼうとしたかについて、資料を基に考察する。

イ 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（観点、方法）
導入①	・単元を見通した問いを確認する。	・前時につくった問いを確認させる。	
導入②	・聖徳太子について知っていることを挙げる。	・小学校での既習事項を活用させる。	
展開	・聖徳太子の立場を系図から読み取る。 ・冠位十二階の目的や十七条の憲法から目指した国を考察する。 ・遣隋使の手紙から日本の立場をどのようにしたかったかを考察する。	・聖徳太子が天皇家、蘇我氏ともに深い関係であることに気付かせる。 ・冠位十二階が能力制という画期的なものであったこと、十七条の憲法が仏教や和を重んじ、天皇中心の国を目指していたことに着目させる。 ・それまでとは異なり、中国と対等な関係を求めていったことに気付かせる。	・資料から、聖徳太子の行った政治のねらいや目指した国の姿を理解している。(ア 授業用プリント) ・資料から中国と日本の立場の変化を読み取っている。(イ 授業用プリント)

まとめ①	・聖徳太子が目指した国家はどのようなものであったか考察する。	・本時の学習内容を踏まえ、授業用プリントに記述させる。	・本時の学習内容から聖徳太子が目指した国家像を考察している。 (イ 授業用プリント)
まとめ②	・「問い」に対して本時の学習内容から考えたことをまとめ、発表する。	・「問い」に対して、どのような点が本時から分かったか、記入させ、発表させる。	・本時の学習と関連付けて「問い」を解決しようとしている。(ア 振り返りシート)

(6) 研究の考察

ア 成果

(ア) 毎時間の振り返りによる学習の深まり

ある生徒の「振り返りシート」には、次のような記述があった。

単元を見通した問い：飛鳥時代にはどんな人が活躍し、どのようなことを行ったのだろうか？

- ◆学習の見通し：聖徳太子が主で、憲法や位まで決めた。
- ◆第2時終了時点での振り返り：聖徳太子は全て一人ではなく、仲間と共にやったからうまくいったと思う。
- ◆第3時終了時点での振り返り：やはり聖徳太子の政治(天皇中心の政治)を引き継ぐ者が現れた。
- ◆第4時終了時点での振り返り：(中略)薬師寺とか天皇がやはり中心となっている。
- ◆単元を終えて：聖徳太子だけではなく、みんなが国のために頑張っていた。

この生徒は小学校で学習する聖徳太子が飛鳥時代の全てだと思っていたが、自分の予想に対して毎時間に答えを出していく中で、飛鳥時代に活躍した人物や天皇中心の国づくりという点に着目できるようになっていった。

このように毎時間、単元の第1時に記した学習の見通しに正対する答えを出していく中で、「問い」に対する答えを見つけ出し、理解が深まったと言える。

(イ) 時間軸としてのつながりと社会参画意識

生徒の「振り返りシート」の「単元を終えて」の欄(単元の最後に記入するまとめ)に次のような内容が見られた。

- ・こんな時代から天皇がいて、政治をしていたなんてすごい。
- ・今も日本にある仏教がこんなに昔から続いていることに驚いた。
- ・他国からいろいろな文化ももらったから、今の日本の文化があるんだと思った。

これは当時の一つ一つの歴史的事象が直接現代につながっているわけではないが、当時があるから今があるという、時間軸としてのつながりを感じることができている。このことは学習した歴史的事象を自分のこととして捉えられており、それは社会参画意識の高まりにつながるものと考えられる。

イ 課題

(ア) 「問い」の設定の工夫とその答えに対する働きかけ

今回、「飛鳥時代の人物や文化はどのような人やものがあるだろうか」という「問い」を設定した学級もあった。その学級の生徒の「振り返りシート」の中に、次のような記述が見られた。

- ・聖徳太子が冠位十二階や十七条の憲法を定めた。
- ・中大兄皇子が中臣鎌足と力を合わせて天皇中心の政治を目指した。
- ・飛鳥時代には法隆寺や薬師寺が建てられた。

これらは教科書で学ぶ内容ではあるが、それぞれの関係性や連続性、学習の深まりは見られない。そもそも単元を見通した問い自体がそのような答えを導いてしまう問いであったといえる。「問い」をつくる際に、教科書の語句を書き出させ、分からない語句を疑問にしていた生徒も多く、そのような「問い」を設定してしまうと毎時間の「振り返りシート」の振り返りが深みのないものになってしまう。

そのため、「問い」の設定にも更なる工夫が必要であるとともに、毎時間の「振り返りシート」の生徒の記述に対して授業者からの働きかけや修正が必要であることが分かった。

(イ) 社会参画意識の高まり

成果として、時間軸としてのつながりを捉えることで社会参画意識の高まりにつながると述べたが、実際に生徒の振り返りシートの記述から直接的に社会参画意識の高まりと読み取れるものは決して多くはなかった。歴史的分野、特に中世以前となると現代に直接結び付く事象は少なく、これらの学習の中でいかに社会参画意識を高めていくかは、更なる課題と考える。

(ウ) 習慣化と発達段階

今回、この単元に取り組んだのは第1学年であり、「問い」づくりも「振り返りシート」への記入も、まだ数回という状況であった。生徒が毎時間「振り返りシート」を記入していれば、それが習慣となり、授業の一連の流れの中で取り組むことができるようになるであろう。また、どのような「問い」をつくっていけばより学習が深まるかということも、学年が上がるにつれて見えてくるものもあると考える。そう考えると、この取組を短期間だけの取組とせず、継続して行い、習慣化していくことが発達の段階に応じた「問い」の作成や振り返り、さらには社会参画意識の高まりをもたせる学習活動につながっていくと考える。

2 指導事例 2

指導事例	中学校学習指導要領	地理的分野	大項目	C	日本の様々な地域
第2学年	単元名	地理的分野	関東地方		

(1) 単元の目標

- ア 関東地方の気候・自然や地域的特色や地域のもつ課題を理解し、併せてそこで暮らす人々の姿について理解する。人口や都市・村落を中核とした考察の仕方を取り上げた特色ある事象や生ずる課題を理解する。
- イ 関東地方の人口の集中と交通網の広がりや産業の発展などの事象を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して多面的・多角的に考察し、表現する。
- ウ 関東地方に見られる地域の課題について、よりよい社会の実現を目指し、課題を主体的に追究する。

(2) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に 学習に取り組む態度
・ 関東地方についての地域的特色や地域の課題を理解している。 ・ 人口や都市・村落を中核とした考察の仕方を取り上げた特色ある事象と、それに関連する他の事象や、そこで生ずる課題を理解している。	・ 関東地方において、人口や都市・村落を中核に設定した事象の成立条件を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現している。	・ 関東地方について、よりよい社会の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

(3) 研究主題との関わり

本単元のねらいは、「(3) 日本の諸地域」の「関東地方」について、「人口や都市・村落を中核とした考察の仕方」を中心にその成立条件を事象や生じる課題と結び付け、多面的・多角的に考察・表現しながら、地域的特色や地域の課題を理解するというものである。この2回目の検証授業は、1回目の授業実施の中で表れた、「生徒が、学習課題を立てる際、単元の目標を達成できる、適切な学習課題を立てられていない。」「単元を通して授業ごとに振り返る価値のある学習課題を生徒自身が立てづらい傾向がある。」といった課題を受けての取組となった。

本単元「関東地方」の学習では、まず、単元の始めに教科書・地図帳等を参考にしながら、学習内容の概要を生徒に把握させた。次に、既存の学習や生活経験を基に、現時点での答えの予測や仮説を立てさせ、単元を通じての学習課題として「問い」を設定させた。さらに毎時間、この課題を振り返る作業を習慣化し、授業を重ねるごとに自身の学習内容の理解の深まりや考えの変化を自覚させようとした。

そして、本単元前半の最後の授業である、「人口や施設、交通等の集中により発生している大都市の課題」について生徒に学習させた後、この授業を受け、「自分たちが住んで

いる区の課題は何だろう。」という「問い」を、単元後半の新たな発展的な学習課題として設定し、前半の授業で理解した関東地方の学習内容を基に調査・発表させた。このことにより大都市における都市問題についての理解を更に深め、よりよい社会の実現を求めて課題を主体的に追究するものとした。なお、この単元後半の学習は、「C 日本の様々な地域」「(4) 地域の在り方」と結び付けて扱うこととした。

(4) 単元の指導計画と評価計画（9時間扱い）

時	学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価規準 (評価の観点、評価方法)
1	・ 関東地方を眺めて → 学習の見通し「問い」の設定 関東地方の生活の舞台 自然環境・そこで暮らす人々の姿	・ 関東地方の学習について概要を把握し、既存の学習や生活経験を基に、現時点での仮説や予測を立て、学習課題を設定しようとしている。(ウ 授業用プリント) ・ 関東地方の都県の名称や位置、地形や気候、地域的特色について理解している。(ア 授業用プリント)
2	・ 関東地方を眺めて 関東地方の人々の営み 人口の集中と交通・産業の発達	・ 東京大都市圏の形成と、関東地方への交通網の広がりについて理解している。(ア 授業用プリント) ・ 関東地方は人口が集中しており、そのため産業が発達していることを理解している。(ア 授業用プリント)
3	・ 各地と結び付く関東地方の人々の暮らし 政治・経済・文化の一極集中と人口の集中を支える周辺県	・ 東京の様々な政治・経済・文化の中心施設の存在から、東京大都市圏へ人口が集中する理由を考察している。(イ、 授業用プリント)
4	・ 各地と結び付く関東地方の人々の暮らし 工業地帯の形成 周辺都道府県に広がる近郊・輸送式の園芸農業	・ 関東地方の代表的な工業地帯や輸送園芸の広まり等産業の発展の様子を理解している。(ア、授業用プリント) ・ 東京大都市圏での交通網の広がりや人口の集中が、関東地方の産業の発展に結び付き、互いに支えあって機能していることを考察している。(イ 授業用プリント)
	人口の集中・産業の発達・交通網の発達 世界と結び付く関東地方	・ 関東地方への人口の集中・産業の発展が貿易港や国際空港の発達を促し、世界と密接なつながりをもつようになっていることに着目している。(イ 授業用プリント)
5	・ 大都市を例にした「集中」による課題の考察 → 「自分たちが住んでいる区の人口・施設・交通等の集中による課題は何だろう。」	・ 大都市を例に、「集中」から発生する課題を理解している。(ア、授業用プリント) ・ 自分たちが住んでいる区の「集中」による課題について、課題意識をもっている。(ウ 授業用プリント)

発展的内容 計4時間・・・自分たちが住んでいる区を事例に考える。

6	・ 区の「集中」による課題の把握 自分が調べたいと思った課題についての調査	・ 自分の生活経験も踏まえ、区の「集中」による課題について考察している。(イ 授業用プリント) ・ よりよい社会の実現を目指し、課題を主体的に追究しようとする。(ウ 授業用プリント)
---	--	--

7	・自分が調べてきた内容についての課題の共有と理解	・それぞれが調べてきた内容を共有し、課題に対する理解を深めている。(ア 授業用プリント)
8	・各グループの発表(発表前半)	・身近な地域の課題について、様々な情報を効果的に調べまとめている。(ア 発表・授業用プリント) ・身近な地域の課題について考察している。(イ 授業用プリント)
9 (本時)	・各グループの発表(発表後半)	

(5) 本時の指導

ア 本時の目標

- (ア) 自分が関心をもった、区の人口・施設・交通等の「集中」により発生する課題について地域の広がりや結び付き、その他の事象と関連付けて考察する。
- (イ) 単元の始めに立てた学習課題とその答えの予測を振り返り、学習の始めと終わりの自分の考えや思考の変容について明らかにする中で、よりよい社会の実現を目指して課題を主体的に追究する。

イ 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準(観点、方法)
導入	・今までの学習・発表前半(前回)の内容の再確認をする。 ・投げ掛け・小発問 「前回までの発表から、区にどのような『集中による課題』が見られていたか発表する。」	・前回までの学習内容の復習と発問を通じ、前回までの内容の把握と「集中」による課題について、もう一度確認させる。	
展開	・区における「集中による課題」の中から、関心をもった課題について調査した結果の発表を行う。 ・今までの発表・学習を基に、発表の中で、自分が一番関心をもった区の「集中」の課題とそれに対する提案や解決策をまとめる。 ・各自の意見を発表する。	・個人ごとに調査してきた課題について発表させる。 ・今まで学んだ事を根拠に、発表させる。	・身近な地域の課題について、様々な情報を効果的に調べまとめている。(ア 発表用資料・授業用プリント) ・身近な地域の課題について考察している。(イ 発表用資料・授業用プリント)
まとめ	・「振り返りシート」をまとめる。	・「問い」を振り返り、学習内容の理解の深まりや、思考の変化に気付かせる。 ・様々な情報から自分の意見を整理させる。	・よりよい社会の実現を目指し、課題を主体的に追究しようとしている。(ウ 授業用プリント 振り返りシート)

(6) 研究の考察

ア 成果

(ｱ) 適切な学習課題の設定

学習課題を立てる際、単元の目標を達成できる適切な学習課題を立てさせるために、単元の始めに教科書・地図帳等を参考にしながら、学習内容の概要を生徒に把握させた。次に、既存の学習や生活経験を基に「問い」を作らせ、その答えについて予測や仮説を立てさせ、これを単元を通じての学習課題として設定した。このことにより、生徒自身により単元の目標に向かう適切な学習課題の設定ができるようになることが検証できた。

(ｲ) 学習内容の理解の深まり

毎時間、学習課題を振り返る作業を習慣化し、授業を重ねるごとに自身の学習内容とそれに対する考えの変化を自覚させ、学習の終わりに生徒に記入させる「振り返りシート」を工夫・改善することで、作業の習慣化と学習内容の定着について効果が見られた。授業後にその授業の振り返りを行う取組(自己評価表)を以前から行っていたため、振り返りを記入する習慣は生徒に無理なく定着した。改善前は授業に対する感想、意見、質問を書かせ、教師が返事をするというだけのものではあったが、単元の始めに「問い」を作らせ、毎回「問い」を振り返ることで、授業を重ねるごとに学習内容の理解の深まりや考えの変化を自覚させることができることが分かった。

イ 課題

(ｱ) 学習計画への反映

単元を通して毎回の授業で振り返る意義のある学習課題を生徒自身に立てさせ、それが「単元を見通した問い」となるようにするために、どのように学習計画に反映するかが課題である。

(ｲ) 単元と社会参画意識の高まり

今回単元とした「関東地方」の学習は、「人口や都市・村落を中核とした考察」を行わせ、「都市問題」という課題に着目させる中で、社会参画意識の高まりをもたせることにつながるのではないかという見通しは、計画の段階からあった。教科書・地図帳等を参考にしながら、学習内容の概要を生徒に把握させ、既存の学習や生活経験を基に、答えの予測や仮説を立て、単元を通じての学習課題の設定に役立てた後、関東地方にある「自分たちが住んでいる区ではどうなのだろう。」という疑問は、生徒の間から自然に発生した。しかしながら、学習する単元の内容により、生徒の社会参画意識の高まりの状況は異なっており、「問い」の活用が、どの単元でも効果を生じるようにするにはどうすればよいのかということが課題となった。

3 指導事例 3

指導事例	中学校学習指導要領	公民的分野	大項目	C 私たちと政治
第3学年	単元名	公民的分野	民主政治と政治参加	

(1) 単元の目標

対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配、民主主義などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して

ア 国会を中心とする我が国の民主主義の仕組みのあらましや政党の役割、議会制民主主義、多数決の原理とその運用の在り方、国民の権利を守り社会の秩序を維持するために、法に基づく公正な裁判の保障があること、地方自治の基本的な考え方について理解させる。

イ 民主主義の推進と、公正な世論の形成や選挙など国民の政治参加との関連について多面的・多角的に考察、構想し、表現することができるようにする。

ウ 民主主義と政治参加について、現代社会に見られる課題の解決を視野に、主体的に社会に関わろうとする態度を養う。

(2) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・国会を中心とする我が国の民主主義の仕組みのあらましや政党の役割を理解している。 ・議会制民主主義の意義、多数決の原理とその運用の在り方について理解している。 ・地方自治の基本的な考え方について理解している。その際、地方公共団体の政治の仕組み、住民の権利や義務について理解している。	・対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配、民主主義などに着目して、民主政治の推進と、公正な世論の形成や選挙など国民の政治参加との関連について多面的・多角的に考察、構想し、表現している。	・民主政治と政治参加について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。

(3) 研究主題との関わり

本単元のねらいは、国会を中心とする我が国の民主政治の仕組みのあらましや政党の役割、議会制民主主義の意義や多数決の原理とその運用の在り方について理解を深め、将来の主権者として持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識を涵養することにある。

今回の研究では、「問い」を生徒に作成させ、その「問い」を毎時間振り返る活動を習慣化することで、学習への主体的な取組や学習の有用性を生徒が実感し、生徒の社会参画意識が高まっていくという仮説を立てた。そこで、「問い」に対して主体的に考察し判断、表現することを繰り返していく「振り返りシート」を毎回用いた「問いを振り返る活動」を行うことで、学習活動が進むごとに生徒の学びの主体性が段階的に養われていくことを目指した。

(4) 単元の指導計画と評価計画（4時間扱い）

時	学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価規準 (評価の観点、評価方法)
1	議会制民主主義と多数決 ・単元を見通した問いを設定する。 ・議会制民主主義の仕組みを理解する。	・できるだけ多くの疑問を挙げて、単元を見通した問いをつくらうとしている。(ウ 授業用プリント) ・議会制民主主義の仕組みを正しく理解するとともに、多数決の原理と少数意見の尊重について考察する。(ア 授業用プリント)
2	選挙の意義と課題 ・選挙の意義としくみを理解し、日本の選挙制度の課題を考察する。	・日本の選挙制度の仕組みや課題を、将来の主権者として主体的にまとめ、考察している。(イ 授業用プリント) ・問いに正対した振り返りをしている。(ウ 授業用プリント)
3 (本時)	政党の役割 ・政党の意義と働きを理解し、政党政治の役割について考察する。	・政治的課題を解決しようとする公約を、効率と公正の見方・考え方を基に考察している。(イ 授業用プリント) ・問いに正対した振り返りをしている。(ウ 振り返りシート)
4	世論とマスメディアの役割 ・世論の形成とマスメディアの機能を理解し、政治との関わりについて考察する。 ・単元全体の振り返りを行う。	・複数のマスメディアの情報を比較しながら、自分の意見を効率と公正の見方・考え方を基に形成している。(イ 授業用プリント) ・「問いを振り返る活動」をしながら、見通しに対する調整をしている。(ウ 振り返りシート)

(5) 本時の指導

ア 本時の目標

- (ア) 「問い」に着目しながら、政党政治成立の歴史と今日の政党政治の役割について理解する。
- (イ) 政治的課題を解決する公約の例を比較し、効率と公正の見方・考え方を基に自分の意見を形成する。
- (ウ) 「問い」への「学習の振り返り活動」を行い、見通しに対する調整を行う。

イ 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（観点、方法）
導入	「問い」の確認と定着 ・「振り返りシート」でこれまでの単元の「問い」を確認し、見通しをもたせる。		

展開①	・政党の成立の歴史と役割を、授業プリントの問題に答えながら理解する。	・歴史の授業で扱った政党や人物を紹介しながら、国会が内閣の法律案を議決する機関であるという関係性についても理解させる。	・政党について正しく理解している。(ア 授業用プリント)
展開②	・少子高齢化という課題に対して、仮の党の公約例を比較して自分が支持する公約を決める。その際、理由も記述させる。 ・班ごとに自分の意見を交換し、最終的にどの党の公約を支持するかを決め、クラスで集計する。	・公約が現代社会の見方・考え方とどのように関連しているのか考えさせる。 ・少数意見のグループの生徒には、その考えをもしも社会に反映させたい場合にはどうしたらよいか、考えさせる。	・資料を基に効率、公正な視点を用いて考察し、判断している。(イ 授業用プリント)
まとめ	・「振り返りシート」で本時の学習内容から「問い」の答えを導く。	・記述が「問い」に正対しているか自己評価しながら活動させる。	・主体的に振り返り活動を行っている。(ウ 振り返りシート)

(6) 研究の考察

ア 成果

(ア) 見方・考え方を自在に働かせるための「主体的・対話的で深い学び」への期待

本授業は単元の第3時に当たる授業であったが、「振り返りシート」で、「問い」への振り返りを習慣化したことで、事象の関連性や影響を見いだしながら「問いを振り返る活動」を行える生徒が増加した。

また、「問い」に対する概念や理論を、授業ごとに、多面的・多角的に学習していき、毎時間「問い」へと振り返りをすることで、「問い」を多様な視点で捉えやすくなり、現代社会への見方・考え方を自在に働かせることができることを目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現につながることを期待できる。

ある生徒の「振り返りシート」には、次のような記述があった。

単元を見通した問い：選挙で、誰に、どのように投票すれば良いのか。その方法とは？

◆学習の見通し

18歳以上の有権者が、候補者の演説などを参考にして、良いと思った人に投票する。また政党に投票して、その中から偉い人が選ばれる。

↓

◆第1時終了時点での振り返り

衆議院と参議院は任期が異なっており、解散もある。小選挙区と比例代表制度を並立することで、より民意を反映しやすくしており、よく出来た投票システムだと考える。

↓

◆第3時終了時点での振り返り

今回の授業で、三つの党の公約を読み、投票する党を一つ選んだが、それぞれの立場や状況によって判断するための視点が違うことに気付けた。国全体の問題を解決に向かわせる公約で選ぶのか、個人の家計を優先させる公約で選ぶのかで迷う。支持率の上下によって、政党同士の駆け引きもあるだろう。

この生徒は、第1時終了時点では、投票システムの内容と理論を端的にまとめるだけで終わっていた。第1時終了後の「振り返りシート」の評価において、「自分の生活に置き換えて考えてみよう」という形成的評価をしたところ、第3時終了時点では、「問い」への振り返りにおいて、政党の公約を自身で判断し投票する際に「国全体の問題解決を優先すべきか、個人の家計を優先すべきか迷う」と捉えており、政治や経済という多様な視点に着目して「問い」を捉えられるようになったと判断できる。「振り返りシート」の活用によって、現代社会の見方・考え方を自在に働かせることができる「主体的・対話的で深い学び」への授業改善につながったと言える。

イ 課題

(7) 生徒の振り返り時間の確保と形成的評価をする時間の確保

授業内で生徒に「振り返りシート」を記入させるには、最低でも3分間は必要である。そのための時間を授業内でどう確保するのが課題である。また、宿題にすると次の授業までに全生徒の「振り返りシート」の形成的評価が必要になるので、評価する生徒が多くなればなるほど、評価時間の確保が課題である。

IV 研究の成果と課題

1 成果

(1) 「問い」への学習の見通しを振り返る活動の習慣化を図る授業用プリントの開発

単元を見通した問いを設定し、その「問い」に対する「見通し」及びその「見通し」に対する修正や付け加えを行うシートを用意することで、社会参画意識の高まりを可視化する。

るだけでなく、生徒自身が「問い」を別活動として意識して授業を受けられるようになることが明らかになった。この意識は、社会参画意識の高まりという主体的に学びに向かう態度の観点だけでなく、事象の関連性や影響を見いだす活動とも関係する部分があるため、知識・技能及び思考・判断・表現の2観点の学習にも良い影響があると予想される。生徒自身が「問い」を設定する学習活動とともに、生徒自身が「問い」を意識して学習を進められる可能性がある方法を提案できたと捉えている。また、このシートは三分野で活用でき、また学校の実態に応じた変更も容易であり、一定の汎用性があることも明らかになった。

(2) 単元を見通した問いを活用した社会参画意識の高まりをもたせる学習活動の工夫

社会参画意識の高まりについては、学習内容とともに生徒の発達の段階や学習経験を踏まえて総合的に評価する必要がある。第1学年の4月と第3学年の12月では、同じ生徒が同じ記述をした場合の評価は異なってくるためである。今回は授業用プリントの開発とともに評価を考えていく過程において、3年間を見通して生徒の発達の段階や学習経験を踏まえた評価を行うためには下記のような評価の連続性をもつことの必要性が見えてきた。こうした視点は、主体的に学習に取り組む態度とも関連をもつ可能性が高いと捉えており、新たな仮説の生成に寄与するものと考えられる。

3年	2年	1年	評価基準	形成的評価にあたって
A	A+	A++	下記に加え、ある事象に対してこだわりをもった深い追究がある。	より学問的な学びに近づくように働きかける。
B	A	A+	各時間の振り返りができ、さらに事象の関連性や影響を見いだしている。	本人のこだわりに気付かせ、認識できるような働きかけを行う。
C	B	A	単元の問いやその見通しに対して、振り返りをし、見通しに対する調整を行うことができている。	見通しに対する調整で使っている見方・考え方を示し、考え方の道筋をつけさせる。
C-	C	B	単元の問いやその見通しに対して、振り返りを行うことができている。	調整しやすい箇所を明示し、振り返りの中で見方・考え方が活用しやすくさせる。
C--	C-	C	各時間の学習内容に対する振り返りができている。	授業内での記述場面や形成的評価を適切に行い、振り返り方法を習得させる。

2 課題

(1) 習慣化による学習への主体的な取組や学習の有用性を生徒が実感することの検証

習慣化による効果を仮説として設定したが、習慣化というには生徒の学習の蓄積が少ないため、継続して検証していく必要がある。検証授業では、いずれも生徒自身が「問い」を意識して一つ一つの授業をつなぐ作業を行おうとしていたことや学習の有用性の実感は上がっている様子は読み取れる。短期間の取組とならないような工夫が必要である。

(2) 持続可能な評価活動とすること

今回の研究を通して、「問い」づくり、そのための教材研究及び教材開発、授業内での「振り返りシート」の記入時間の設定や形成的評価を行っていくための教師側の時間確保などが課題となった。学習効果が見込まれても実践されないものとならないように、様々な効率化や工夫の在り方を今後も継続して追究し、持続可能な取組としていく必要があると考える。

中学校数学研究開発委員会

目 次

I	研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・	3
III	研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・	6
IV	研究の成果と課題・・・・・・・・	16

〈中学校数学研究開発委員会〉

研究主題

生徒が事象から問題を見だし、目的意識をもって
解決するための指導方法の工夫
～日常生活や社会、数学の事象の教材開発を基に～

I 研究の目的

平成 10 年に告示された学習指導要領から、中学校数学科では、数学的活動を教科の目標の中に位置付け、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けること、数学的な思考力・表現力等を育てること、学ぶ意欲を高めることなどに重点を置いて、その充実が図られてきた。平成 29 年告示の学習指導要領では、数学的に考える資質・能力を育成する観点から、現実の世界と数学の世界における問題発見・解決の過程を学習過程に反映させることを意図して数学的活動の一層の充実が図られている。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、生徒に生きる力を育むことを目指しており、「指導計画の作成と内容の取扱い」には、主体的・対話的で深い学びについて、次のように示されている。

単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、数学的活動を通して、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、数学的な見方・考え方を働かせながら、日常の事象や社会の事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決し、学習の過程を振り返り、概念を形成するなどの学習の充実を図ること。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、各学校では、問題を少人数グループで解決する活動や全体で話し合う活動等の協働的な学習の実現が図られている。一方、日常生活や社会の事象等から問題を見だし、自立的に解決する指導方法については課題があると捉えている。生徒自身が問題を見出すことで目的意識を高め、解決する必要性や必然性を感じて学習することで、主体的・対話的で深い学びの実現により近づくと考え、研究主題を「生徒が事象から問題を見だし、目的意識をもって解決するための指導方法の工夫」と設定した。

改善が必要な授業として、生徒が目的意識をもちにくい授業展開の一例を挙げると、教師が教科書に掲載されている問題等を示すことだけで学習が始まる授業があると考えられる。このような授業では、問題に対する生徒の主体的な関わりが少なく、何が課題で、何が分かり、何ができるようになったのかを理解できず、生徒の意識が高まらないため、毎時の学習での内容を関連付け、統合的・発展的に考えることも難しくなる。既習事項や前時の学習内容や生徒の興味・関心等を踏まえて、様々な事象を示し、その事象から生徒が本時に解決する問題を見出すことができるようにする必要があることから、副主題を「日常生活や社会、数学の事象の教材開発を基に」とし、そのための授業改善を本研究の目的とした。

Ⅱ 研究の方法

1 研究の視点

本研究では、基礎研究として「『中学校学習指導要領（平成 29 年 3 月）』（以下、「学習指導要領」と表記。）」、「『中学校学習指導要領解説数学編（平成 29 年 7 月）』（以下、「解説数学編」と表記。）」、及び平成 30 年度全国学力・学習状況調査の報告書を読み、生徒の実態や課題を分析し目指す生徒像を確認した。そして、設定した研究主題に迫るため、以下の視点で研究を進めていくこととした。

(1) 生徒自らが問題を見いだすための事象の提示

生徒が様々な事象の中から自ら問題を見いだしていくことは、生徒の問題に対する関わりを高める。その結果、何が分かり、何ができるようになったのかが明確になり、実生活で数学を活用したり、他の知識及び技能と関連付けながら統合的・発展的に考えたりすることに結び付いていくと考えた。そこで本研究では、与えられた事象から、生徒が自ら「何が知りたいか」、「そのために何が問題となるか」を考え、問題解決の条件等を見付け出していけるような事象の教材を工夫し、研究授業・検証を行った。

(2) 日常生活や社会の事象、数学の事象の教材開発

学習指導要領では、生徒が問題を見だし、問題を解決していくための事象が大きく二つ示されている。一つは日常生活や社会に関わる事象、そしてもう一つが数学の事象である。本研究では主題に迫り、主体的・対話的で深い学びを実現していくため、日常生活や社会、数学の事象について効果的な教材を開発すること、さらにそれらの事象から数学的に表現した問題や焦点化した問題を生徒自身が見だし、解決していけるような指導方法を開発していくことを主眼に置いて研究を進めていった。

なお、「Ⅲ 研究の内容」の「1 指導事例」の学習指導案には、日常生活や社会の事象又は数学の事象、事象について働かせる数学的な見方・考え方、そして、数学的に表現した問題や焦点化した問題を表に整理した。

(3) 問題発見・解決の学習過程イメージに沿った指導方法

検証授業の実施に当たっては、解説数学編に示されている次ページの図 1 のイメージを基に、次の二つの過程が相互に関連して展開し、生徒が目的意識をもって問題発見・解決を遂行する学習を組み立てた。

ア 日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察する過程（イメージ図【現実の世界】の部分を含む展開）

イ 数学の事象から問題を見だし、数学的な推論などによって問題を解決し、解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察する過程（イメージ図【数学の世界】の部分を含む展開）

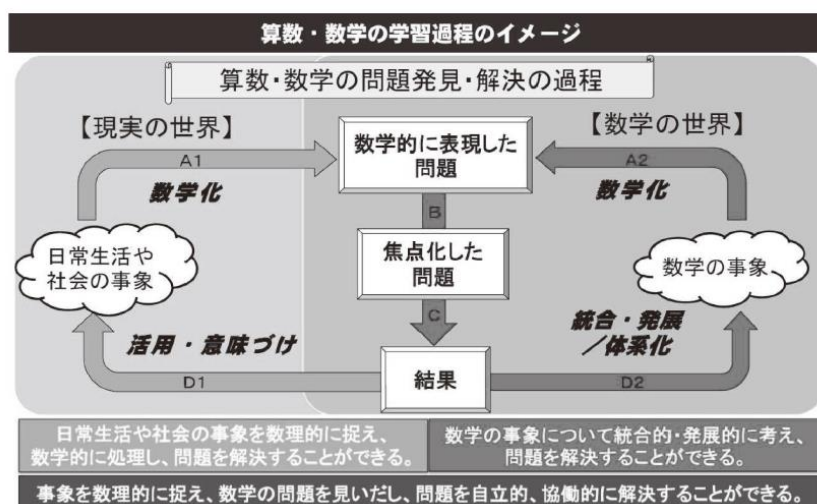


図 1 算数・数学の学習過程のイメージ

2 研究仮説

本研究では研究仮説を次のように設定した。

日常生活や社会の事象及び数学の事象から、生徒自らが問題を見だし、解決していく学習活動に取り組むことにより、問題に対する目的意識が高まることにつながり、問題を解決する必要性・必然性や、数学の楽しさやよさを感じながら学習することで、主体的・対話的で深い学びの実現に迫ることができるだろう。

3 研究の手順

(1) 課題の把握と整理、研究主題設定と手だての検討

学習指導要領及び解説数学編で示されている数学科における主体的・対話的で深い学びの在り方と委員所属校の実態等から、共通テーマである主体的・対話的で深い学びの実現に向けた課題を把握・整理した。その課題と目指す生徒の姿から研究主題を設定し、手だてを検討した。

(2) 検証授業の実施

日常生活や社会、数学の事象の教材を工夫すること、学習過程のイメージ図を基に授業を展開し、数学的に表現した問題から、さらに焦点化した問題を生徒が見いだすような授業を展開していくことを共通理解して、検証授業を行った。

(3) 教材及び指導方法の改善

学習過程のイメージに沿って、事象から生徒が問題を見だし、解決できていたかを検証の視点として協議を行い、教材と指導方法の改善について検討した。

(4) 研究の成果と課題の整理

研究の総括を行い、成果と課題をまとめた。

4 本研究で作成する説明資料

- (1) 単元の 1 単位時間ごとの事象の教材一覧（本時を含む 3 時間のみ掲載）
- (2) 事象から生徒が見いだす問題一覧（本時を含む 3 時間のみ掲載）
- (3) 事象から問題を見だし、解決する 1 単位時間の指導案

5 研究構想図

＜学習指導要領改訂の趣旨＞

数学的に考える資質・能力を育成する観点から、現実の世界と数学の世界における問題発見・解決の過程を学習過程に反映させることを意図して数学的活動の充実が図られている。

＜学習指導要領に示された数学科における「主体的・対話的で深い学び」＞

「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、数学的な活動を通して、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、数学的な見方・考え方を働かせながら、日常の事象や社会の事象を数理的に捉え、数学の問題を自立的、協動的に解決し、学習の過程を振り返り、概念を形成するなどの学習の充実を図ること。」

＜課題＞

教師が教科書に掲載されている問題等を示すことだけで学習が始まり、生徒が目的意識をもちにくい授業が行われることもあり、日常生活や社会、又は数学の事象から問題を見いだし、自立的に解決する学習が十分に実現されていない。

＜研究仮説＞

日常生活や社会の事象及び数学の事象から、生徒自らが問題を見いだし、解決していく学習活動に取り組むことにより、問題に対する目的意識が高まり、問題を解決する必要性・必然性や、数学の楽しさやよさを感じながら学習することで、主体的・対話的で深い学びの実現に迫ることができるだろう。

＜研究主題＞

生徒が事象から問題を見いだし、目的意識をもって解決するための指導方法の工夫
～日常生活や社会、数学の事象の教材開発を基に～

＜研究内容＞

- ・単元の1単位時間ごとの事象の教材一覧を作成する。
- ・日常生活や社会、又は数学の事象から生徒が見いだす問題一覧を作成する。
- ・事象から問題を見いだし、解決する1単位時間の指導案を作成し、研究授業を実施する。
- ・教材及び指導方法の改善を図るとともに、成果と課題をまとめる。

Ⅲ 研究の内容

1 指導事例 A 数と式

(1) 単元名 「文字を用いた式」(第1学年)

(2) 単元の目標

ア 文字を用いることの必要性和意味を理解し、簡単な一次式の計算をするとともに、数量関係や法則を文字を用いた式に表す技能を身に付ける。(知識及び技能)

イ 具体的な場面と関連付けて、一次式の加減の計算の方法を考察し、表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)

ウ 文字式の原理を日常の場面と関連付けて考察し、表現することに関心を持ち、課題に対して進んで文字式を活用しようとする態度を身に付ける。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①文字式の表し方を理解し、指示された数量を文字式で表すことができる。 ②代入、式の値の意味を理解し、式の値を求めることができる。	①与えられた文字式の状況から、その式の意味を的確に言い表すことができる。 ②文字式の文字には、いろいろな数値が代入できることを、文字式の意味と関連付けて捉えることができる。	①数量関係を簡潔かつ一般的に表現できる文字のよさに気付く、進んで文字式を利用しようとしている。 ②文字式に代入することで、知りたい数値が得られることに関心を示し、自ら活用しようとしている。

(4) 単元の指導計画(本時を含む3時間のみ)

時	目標	学習内容・学習活動
第6時	具体的な場面で、文字式を読み取ることができる。	日常の具体的な場面・事象と結び付けて、文字式の意味を読み取る。
第7時	文字に数を代入することの意味を理解し、式の値を求めることができる。	文字にいろいろな数値を代入して、式の値を求める。音の速さから花火までの距離を求める。
第8時(本時)	日常の事象に代入と式の値を利用することができる。	デンマーク派遣の際に持っていく費用を、代入を利用して調べる。

(5) 扱う事象(教材)と生徒が見いだす問題

時	事象(教材)	働かせる見方・考え方	生徒が見いだす問題
第6時	動物園の入園料は大人1人 x 円、子供1人 y 円。これについて文字式 $2x + 7y$ がある。	- たしているから合計だ。 - 式の単位は何だろう。 $2x$や$7y$をそれぞれ言葉で表せば意味が分かりそう。	「文字式が何を表しているか考えてみよう。」 「文字式に言葉で意味を付けてみよう。」
第7時	家から花火を見たとき、花火の音が2秒後に聞こえてきた。	- 光と音が進む速さは違う。 - 音の速さは公式から分かる。 $331.5 + 0.6t$のtの代わりに気温の数を入れればよい。	「音の速さを求めよう。」 「文字が数字に変わったときの式を考えよう。」
第8時(本時)	日本とデンマークの水を表示 海外派遣でよく買うものリスト	- 比較するには通貨をそろえる必要がある。 - そのためには1クローネが何円か知る必要がある。 - 必要な情報は何だろう。 - 得られた情報から自分に必要なものが何か。	「どちらが高いのか調べてみよう。」 「来年行くとしたらどれだけお金が必要か調べてみよう。」

(6) 本時の事象（教材）について

国際交流派遣事業で本校の生徒に関係の深い、デンマークを扱うことで興味・関心を高めようとした。提示された日常の事象からどのようなことが知りたくなるかという観点の下、生徒に問題を見いださせるため、そして問題解決のためどのような情報が必要なのかを生徒から引き出すようにした。

(7) 本時（全 17 時間中の第 8 時）

ア 本時の目標

実生活で代入が用いられていることを実感し、文字の必要性を理解し、課題解決に積極的に利用しようとする。

イ 本時の展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ◆評価規準（方法）
導入	1 日本（円）の水とデンマーク（クローネ）の水（ペットボトル）の絵と値段を見て問題を見いだす。 ・どちらが安いのだろう。 ・通貨単位が違うから分からない。	◇自身にも関わることで、今日の事象に関心をもたせる。
	日本とデンマークの物の値段を比較しよう。	
	・デンマークの水 1 本 3 クローネなので $16 \times 3 = 48$ (円) ・自分が出かける時は、何円くらい必要か。	◇「 x クローネは $16x$ 円である」と提示し、代入すればよいことに気付かせる。
	代入を利用して、デンマークの物の値段を知り、いくら持っていけばよいか調べよう。	
展開	2 問題解決に必要な情報を考える。 ・現地で何にお金を使うのか。 ・水以外の値段はいくらか。 ・何日間分なのか。 ・現地で何にお金を使うのか。 ＜条件＞現地での生活は 5 日間、必要なのは飲み物、軽食、お土産、ホームステイ中（2 日間）のレジャー費	
	3 各品物の値段の条件を知る。	◇水以外の品物の値段は、例えば、水 1 本 y クローネ（ $y = 3$ ）というように、情報から代入して求めるための一覧表を配布する。
	4 各自で一覧表を参考に、持っていく金額を考える。（電卓を使用）	
	5 近くの友達と、必要に応じて考えたことを確認し合う。	◆文字式に代入することで、知りたい数値が得られることに関心を示し、自ら活用しようとしている。（ワークシート）
	6 根拠を示しながら、全体に自分の考えを発表する。質問や別の意見を出し合い、意見交換する。	
まとめ	7 振り返りシートで、意見交換を通して、改善した自身の結論を記入する。	◇日常生活に数学が活用されていることを実感できたか、発表や意見交流から自身の考えを改善したか確認する。

2 指導事例 A 数と式

(1) 単元名 「文字を用いた式」(第1学年)

(2) 単元の目標

ア 文字を用いることの必要性和意味を理解し、簡単な一次式の計算をするとともに、数量関係や法則を文字を用いた式に表す技能を身に付ける。(知識及び技能)

イ 具体的な場面と関連付けて、一次式の加減の計算の方法を考察し、表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)

ウ 文字式の原理を日常の場面と関連付けて考察し、表現することに関心をもち、課題に対して進んで文字式を活用しようとする態度を身に付ける。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①等式及び不等式の意味を理解し、数量の関係を等式で表すことができる。	①数量の関係や法則の中から関係を見付け、それを複数の方法で表現することができる。 ②等式や不等式で表されたものの意味を考え、説明することができる。	①生活の様々な場面を等式や不等式で表そうとしている。 ②表現した等式や不等式を見直し、他の方法でも表現しようとしている。

(4) 単元の指導計画(本時を含む3時間のみ)

時	目標	学習内容・学習活動
第16時	等式の性質を理解するとともに、等式を使って二つの数量の等しい関係を表すことができる。	日常の生活の中にある二つの数量の等しい関係を、等式を使って表す。
第17時 (本時)	不等式の意味を理解するとともに、不等式を使って二つの数量の大小関係を表すことができる。	日常の生活の中にある二つの数量の大小関係を、不等式を使って表す。
第18時	等式、不等式を使って、二つの数量の関係を表すことができる。	日常の生活の中にある二つの数量の関係を、等式及び不等式を使って表す。

(5) 扱う事象(教材)と生徒が見いだす問題

時	事象(教材)	働かせる見方・考え方	生徒が見いだす問題
第16時	1本 x 円の鉛筆4本と y 円の消しゴム1個を買ったら、代金の合計は300円だった。	• $4x + y$ で表せる。 • $4x + y$ と300は等しい。 • $=$ でつなぐことができる。	「いろいろな場面で、2つの数量が等しい関係を式に表そう。」
第17時 (本時)	1本 x 円の鉛筆4本と y 円の消しゴム1個を買ったら、代金の合計は300円 。	• 合計は300円でした。 • ぴったり300円ではない時もある。 • 数量には等しくない関係もある。	「1本 x 円の鉛筆4本と y 円の消しゴム1個を買ったら、代金の合計は300円より高くなった。」 「2つの数量の大小関係を式に表そう。」
第18時	1枚80円の切手を a 枚買って1,000円出したときのおつりは b 円だった。	• 代金は1,000円より小さいから、不等式で表せる。 • おつりも含めれば等式で表せるのではないか。	「等式、不等式を使って、いろいろな場面で2つの数量の関係を表そう。」

(6) 本時の事象（教材）について

前時に等式の意味や表し方について学習している。本時では、前時に学習した問題の二つの数量の関係を表す部分のみを隠すことによって、生徒が目的意識をもちやすくなり、問題解決に向けて主体的に取り組めるだろうと考えた。

(7) 本時（全 18 時間中の第 17 時）

ア 本時の目標

二つの数量の関係を、不等号を使った式で表すことができる。

イ 本時の展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ◆評価規準（方法）
導入	1 買い物の場面から、問題を見いだす。 「1 本 x 円の鉛筆 4 本と y 円の消しゴム 1 個を買ったら、代金の合計は 300 円 。」 ・昨日は「300 円だった」だ。 ・この買い物は 300 円ぴったりとは限らない。	◇前時に学習した問題だと気付かせ、前時との違いに着目させる。
	1 本 x 円の鉛筆 4 本と y 円の消しゴム 1 個を買ったら、代金の合計は 300 円より高かった。 ・高い場合があるなら、安い場合もある。 ・二つの数量には等しいときだけではなくて大小関係もある。	
	2 つの数量の大小関係を式に表そう。	
展開	2 300 円より高い場合、安い場合の式の表し方について考える。 ・等しいときは $=$ を使った。 ・高いときは $>$ かな。向きはくかな。 ・不等号は式をつなぐときも使えるのか。 3 式に表したことを発表する。 ・ $4x + y > 300$ ・ $4x + y < 300$ 4 不等号 $\geq \leq$ について知る。 5 適用問題に取り組む。 「a 個のアメを 13 人に b 個ずつ配ったら、3 個余りました。」について (1) 「3 個以上余りました」に変える。 (2) 「2 個以上足りませんでした」に変える。	◇数の大小関係を表すときには、$=$ の他に何を使ったか問い、支援する。 ◆大小関係を式に表そうとしている。（ノートの記述） ◇既習の用語「以上」「以下」と関連させて理解を深める。 ◆不等号の意味について理解している。（ノートの記述）
まとめ	6 本時のまとめをする。 ・大小関係を式に表すときは、不等号 $> < \geq \leq$ を使う。 ・不等号を使って数量の大小関係を表した式を不等式という。	◇これまでは数と数の大小関係を不等号で表していたが、数量を表す式をつなぐときにも使えるようになったことを価値付ける。

3 指導事例 B 図形

(1) 単元名 「三角形と四角形」(第2学年)

(2) 単元の目標

ア 平面図形の合同の意味及び三角形の合同条件、証明の必要性和意味及びその方法について理解する。(知識及び技能)

イ 三角形の合同条件などを基にして三角形や平行四辺形の基本的な性質を論理的に確かめたり、証明を読んで新たな性質を見いだしたりするとともに、三角形や平行四辺形の基本的な性質などを具体的な場面で活用することができる。(思考力、判断力、表現力等)

ウ 三角形や四角形に関心をもち、それらに関する性質を考察しようとしたり、考察したことを根拠を基に説明したりしようとする態度を身に付ける。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①三角形と四角形についての性質を理解している。 ②数学の用語や記号を用いて簡潔に表現することができる。	①三角形と四角形についての性質の知識や技能を活用して、論理的に考察し表現することができる。	①様々な事象を三角形と四角形の性質を基に捉え、平面図形の性質や関係を見いだそうとしている。

(4) 単元の指導計画(本時を含む3時間のみ)

時	目標	学習内容・学習活動
第1時 (本時)	ある事象の証明において、根拠として使う事柄を考える。	与えられた事象において、直角ができることを確認するとき、根拠として使う事柄を整理する。
第2時	二等辺三角形の底角の性質の証明について考察する。	二等辺三角形の定義を確認し、二等辺三角形の二つの角は等しいことを証明する。
第3時	二等辺三角形の頂角の二等分線の性質の証明について考察する。	二等辺三角形の底角の性質の証明を振り返って、頂角の二等分線の性質を見だし、証明する。

(5) 扱う事象(教材)と生徒が見いだす問題

時	事象(教材)	働かせる見方・考え方	生徒が見いだす問題
第1時 (本時)	二等辺三角形 $\triangle ABC$ と $\triangle DEF$ の辺を重ねて並べると、別の三角形ができる。	- 長さが等しい辺を重ねると直角三角形ができる。 - 直角三角形だと説明するためには何が必要だろう。	「$\triangle EFC$が直角三角形になることを説明しよう。」 「ある事象の証明において、根拠として使うことがらを考えよう。」
第2時	「二等辺三角形の2つの角は等しい。」は小学校でどのように確かめたか。	- 紙を折ったり、分度器で角度を測ったりした。 - 証明はできていない。	「二等辺三角形の2つの角は等しいことを証明しよう。」
第3時	二等辺三角形 ABC の頂角の二等分線を底辺までひく。	- 底辺の長さが二等分されているように見える。 - 二等分線と底辺がつくる角は直角に見える。	「二等辺三角形 ABC において、 $BD=CD$ 、 $AD\perp BC$ となることを証明しよう。」

(6) 本時の事象（教材）について

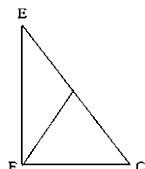
画用紙でできた二つの二等辺三角形を生徒に配布し、並べて別の三角形をつくるという具体的な操作をさせることで、生徒の興味・関心を引き出し、直角三角形ができることに問いをもてるようにした。ただし、全ての二等辺三角形で成り立つものでないことを説明する。

(7) 本時（全 20 時間中の第 1 時）

ア 本時の目標

ある事象の証明において、根拠として使う事柄を考える。

イ 本時の展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ◆評価規準（方法）
導入	1 二つの二等辺三角形を並べて別の三角形をつくることから、問題を見いだす。 ・長さが等しい辺を重ねると、直角三角形ができる。 ・本当に直角三角形かな。	◇斜辺が直線になり、つくった図形が三角形であることは、前提として教師が認める。
	△EFC が直角三角形になることを説明しよう。 ・直角三角形であることを説明するためには、$\angle EFC$ が 90° であることを証明すればよい。 ・これまで学んだことで何が証明に使えるかな。	
	ある事象の証明において、根拠として使うことがらを考えよう。	
展開	2 $\angle EFC$ が 90° であることを証明する。 ・二つの三角形を並べたので、角の和は $180^\circ \times 2 = 360^\circ$ ・斜辺は直線なので 180° ・二等辺三角形の二つの角は等しいから内角の和は、$\bigcirc\bigcirc + \square\square = 180^\circ$ ・$\bigcirc + \square = 90^\circ$ 3 少人数で自分の考えを発表し、グループの考えをまとめる。 4 グループの発表から、証明に使った事柄を整理する。 ・三角形の内角の和は 180° ・直線の角度は 180° ・二等辺三角形の二つの角は等しい。 ・証明したこととそうでないことがある。	◇抽象的に考えることが難しい生徒には、角度を数値で示し、ヒントを与える。 ◆$\angle EFC$ が 90° であることを、根拠を示しながら証明しようとしている。（ワークシート） ◇「平行線と角」の学習を想起させる。 ◇全ての二等辺三角形で成り立つわけではないことを伝える。
まとめ	5 本時のまとめをする。 ・証明の根拠は、それも確かだと証明された事柄である必要がある。 6 次時の見通しをもつ。 ・他の図形でも証明をしてみたい。 ・二等辺三角形の角の大きさの証明をしたい。	◇本時に使った事柄を振り返り、証明していない事柄に着目し、次時への目的意識をもてるようにする。

4 指導事例 C 関数

(1) 単元名 「比例と反比例」(第1学年)

(2) 単元の目標

ア 関数関係の意味、比例、反比例、座標の意味を理解するとともに、比例、反比例を表、式、グラフなどに表す技能を身に付ける。(知識及び技能)

イ 比例、反比例として捉えられる二つの数量について、表、式、グラフなどを用いて調べ、それらの変化や対応の特徴を見いだしたり、比例、反比例を用いて具体的な事象を捉え考察し表現したりすることができる。(思考力、判断力、表現力等)

ウ 身近な事象を数理的に比例、反比例として捉え、数学の問題を見だし、自立的、協働的に解決して分かったことを生活や学習に生かそうとする態度を身に付ける。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①比例や反比例の意味、比例や反比例の関係を表す表、式、グラフの特徴などを理解している。 ②比例、反比例などの関数関係を、表、式、グラフなどを用いて、数学的に処理することができる。	①比例、反比例などの関数関係を、表、式、グラフなどを用いて的確に表現することができる。 ②比例、反比例などについての知識及び技能を活用しながら、事象を、見通しをもって論理的に考察し表現することができる。	①様々な事象を比例、反比例などで捉えたり、表、式、グラフなどで表したりするなど、数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。

(4) 単元の指導計画(本時を含む3時間のみ)

時	目標	学習内容・学習活動
第17時 (本時)	具体的な問題で、比例のグラフを読み取って、問題を解決する。	2本の比例のグラフで表された日常的な事象において、表、式を用いて表し、比較、考察する。
第18時	具体的な問題を、比例の見方や考え方を利用して解決する。	表、式、グラフのどれかで表された三つの日常的な事象において、表、式、グラフを用いて表し、比較、考察する。
第19時	比例、反比例のグラフを読み取って、具体的な問題を解決することができる。	同一座標上に比例と反比例が表れる日常的な事象において、表、式、グラフを用いて表し、比較、考察する。

(5) 扱う事象(教材)と生徒が見いだす問題

時	事象(教材)	働かせる見方・考え方	生徒が見いだす問題
第17時 (本時)	兄と弟が自転車で同じ道を同時に出発したときの、走った時間と道のりを表したグラフ	・道のりは時間に比例している。 ・兄弟で速さが違うかな。 ・どのくらい違うか知りたい。	「比例のグラフを読み取って、兄と弟の進み方についての問題をつくろう。」
第18時	表、式、グラフのいずれかで表されたプールの吸水口A、B、C	・どのくらいの水が入れるのか、違いがあると思う。 ・それぞれどのくらいの水が入れるのか比べにくい。	「水を早く入れるには、どの吸水口を使うとよいだろうか。」 「それぞれを表、式、グラフで表して比べよう。」
第19時	面積が 18 cm^2 、横の長さが縦の長さの2倍の長方形の花壇をつくる。	・長さが決まっていないから、いろいろつくれそうだ。 ・横が2倍になれば面積も2倍だ。 ・縦は横に反比例するかな。	「どのような長方形の花壇ができるだろうか。」 「比例や反比例を使って、縦と横の長さを決めよう。」

(6) 本時の事象（教材）について

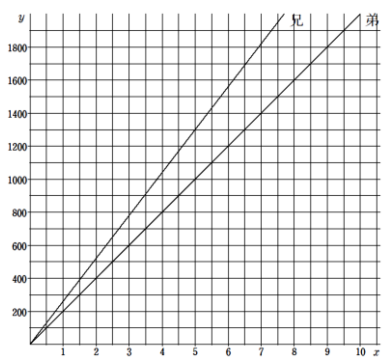
道のりが時間に比例するという関係だけではなく、兄と弟の進み方の関係にも着目し、グラフを読み取り、読み取ったことを問題にする学習とした。友達が作った問題を解決するためには、表や式で考えるとよい場合があり、グラフと表や式を相互に関連付けて考えられるようにした。

(7) 本時（全 20 時間中の第 17 時）

ア 本時の目標

具体的な問題で、比例のグラフを読み取って、問題を解決する。

イ 本時の展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ◆評価規準（方法）
導入	1 兄と弟が自転車で同じ道を同時に出発したときの場面グラフを見て、問題を見いだす。 ・道のりは時間に比例している。 ・兄弟で速さがどのくらい違うか知りたい。 ・グラフから分かることはたくさんありそう。 比例のグラフを読み取って、兄と弟の進み方についての問題をつくろう。	
展開	2 グラフから読み取れることを書き出す。 ・進み方が速いのは兄だ。 ・兄と弟が○m離れるのは、□分後だ。 ・○mのところに着くのに□分差がある。 3 読み取ったことを少人数で説明し合い、問題をつくる。 ・「兄と弟では、進み方が速いのはどちらでしょう。」 ・「兄と弟が○m離れるのは、出発してから何分後でしょう。」 4 全体で問題を発表し、問題を解き合う。 ・ある時間の y 軸の値を比べると… ・3分ごとの表を作って道のりを比べると… ・式に表してそれぞれ時間を代入すると…	◇なぜそのように言えるのか、グラフに書き込み説明できるようにすることを伝える。 ◆2本の比例のグラフを読み取り、問題をつくっている。（ワークシート） ◆グラフ、表、式を使って問題を解決している。（ワークシート）
まとめ	5 本時のまとめをする。 ・問題をつくる目標があったから、グラフをよく読み取ることができた。 ・問題を解くためには、グラフや表や式を使ったいろいろな考え方あることが分かった。 ・反比例でもやってみたい。	◇グラフ、表、式それぞれの分かりやすさを価値付ける。

5 指導事例 D データの活用

(1) 単元名 「資料の分析と活用」(第1学年)

(2) 単元の目標

ア ヒストグラムや相対度数などの必要性和意味を理解するとともに、コンピュータなどの情報手段を用いるなどしてデータを表やグラフに整理する技能を身に付ける。(知識及び技能)

イ 目的に応じてデータを収集して分析し、そのデータの分布の傾向を読み取り、批判的に考察し判断したり、不確定な事象の起こりやすさの傾向を読み取り表現したりすることができる。(思考力、判断力、表現力等)

ウ 身近な事象統計的に捉え、数学の問題を見だし、自立的、協働的に解決して分かったことを生活や学習に生かそうとする態度を身に付ける。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①ヒストグラムや相対度数などの必要性和意味を理解している。 ②コンピュータなどの情報手段を用いるなどしてデータを表やグラフに整理することができる。	①目的に応じてデータを収集して分析し、そのデータの分布の傾向を読み取り、批判的に考察し判断することができる。	①学んだことを生活や学習に生かそうとしている。 ②問題解決の過程を振り返って検討したり、多面的に捉え考えたりしようとしている。

(4) 単元の指導計画(本時を含む3時間のみ)

時	目標	学習内容・学習活動
第1時	資料をヒストグラムで表すと、分布の様子を捉えやすくなることを理解する。	度数分布表やヒストグラムの必要性和意味を理解し、資料の傾向を読み取る。
第9時 (本時)	資料を度数分布表やヒストグラムに表したり、資料の相対度数や範囲、代表値を求めたりすることで、資料の傾向を捉え説明する。	問題を解決するために、資料を収集して整理し、資料の傾向を捉える。
第10時		前時を振り返り、資料の傾向を捉え、レポートにまとめ、発表する。

(5) 扱う事象(教材)と生徒が見いだす問題

時	事象(教材)	働かせる見方・考え方	生徒が見いだす問題
第1時	出発地と目的地が同じ、バスルートA、Bがあり、どちらも平均所要時間は同じである。	- 平均が同じならどちらに乗っても時間は同じだろう。 - 天気によって短いときと長いときがある。 - 過去の記録を調べればよい。	「A、Bどちらのルートを選ぶとよいだろうか。」 「AとBの所要時間の分布の様子を調べよう。」
第9時 (本時) ・第10時	来年度の運動会の学年種目「大縄跳び」に優勝するためにはどのように跳ぶとよいか。	- 時間は一定だから、速く回すか、つかえて止まる時間が短くなればよい。 2列と3列のどちらが速く回せて、つかえにくいかな。 - 過去の運動会の記録を調べれば分かりそうだ。	「大縄跳びの記録を伸ばすにはどのように跳べばよいだろうか。」 「2列、3列の並び方の記録の傾向を調べ、どちらの並び方にするとういかに決めよう。」

(6) 本時の事象（教材）について

本時では、運動会の学年種目「大縄跳び」を扱い、学習したことが生活に活用できることを実感できるようにした。過去に優勝した学級の並び方だけではなく、その他の学級の記録も含めて整理することで、どちらが有効かをより深く考察できるようにした。

(7) 本時（全 10 時間中の第 9 時）

ア 本時の目標

資料を度数分布表やヒストグラムに表したり、資料の相対度数や範囲、代表値を求めたりすることで、資料の傾向を捉える。

イ 本時の展開

	・学習活動	◇指導上の留意点 ◆評価規準（方法）
導入	1 来年度の運動会の学年種目「大縄跳び」に優勝することを考え、問題を見いだす。 ・ 昨年の優勝クラスに情報を聞きたい。 ・ 時間は一定だから、速く回すか、つかえて止まる時間が短くなればよい。	◇運動会の場面を数理的に捉えるため、時間と回数の関係に着目させる。
	大縄跳びの記録を伸ばすにはどのように跳べばよいだろうか。	
	・ 2 列と 3 列のどちらがよいかな。 ・ 過去の運動会の記録を調べれば分かりそうだ。 ・ 昨年の優勝は 2 列だったから、その方がよい。 ・ 3 列の方が跳びやすそうだ。	◇解決にデータが必要であることに気付かせ、何が必要なのかを引き出す。 ◇予想させることで、結論を出すことへの興味を高め、主体的に考えられるようにする。
	2 列、3 列の並び方の記録には、どのような傾向があるかを調べ、それを基にどちらの並び方にするとよいかを決めよう。	
展開	2 過去の記録を整理・分析し、自分の意見をもつ。 ・ 度数分布表に整理する。 ・ ヒストグラムに表す。 ・ 範囲を求める。 ・ 代表値を求める。 ・ 最大の値に注目する。 ・ 相対度数、累積度数で考える。 3 根拠を明らかにし、自分の意見を少人数で説明する。 ・ ヒストグラムの形を見ると… ・ 範囲が 2 列の方が大きいから… ・ 平均の回数が 3 列の方が大きいから… 4 根拠を明らかにし、自分の意見を全体で発表する。 ・ 範囲が小さい方が失敗しにくいとも言える。 ・ 平均は 3 列の方がよいけれど、ヒストグラムを見ると…	◇度数分布表の枠と記録の大きさ順に並べ直した資料を配る。 ◆問題を解決するために、資料を収集して整理し、資料の傾向を捉え、説明しようとしている。（発言、ノートの記述） ◇意見をまとめるのではなく、何に着目したのかを伝え合わせるようにする。 ◇生徒それぞれが判断した理由に着目して、共通点や相違点を押さえる。
まとめ	5 本時のまとめをする。 ・ 学習したことが使えて楽しかった。 ・ 資料の見方によって結論が変わることが分かった。 6 次時への見通しをもつ。 ・ 友達の発表も踏まえて、改めて資料を捉え直して、発表したい。	◇資料は多様な見方ができることを実感させる。

Ⅳ 研究の成果と課題

1 成果

(1) 生徒が問題を見いだすことについて

生徒の実態や興味・関心、既習事項を踏まえた上で、日常生活や社会、数学の事象の教材の工夫をしたため、生徒の意欲が高まった。特に、日常生活や社会の事象については、数学に苦手意識をもっている生徒にとって、より目的意識をもって取り組むことにつながった。

既習事項を踏まえて、事象に対して働かせる数学的な見方・考え方を想定して授業を行い、意図した問題につながる発言を引き出すことができた。数学的な事象についても、統合的・発展的に考えられるよう発問の仕方を工夫することによって、問題を見いだすことにつながった。

(2) 生徒が目的意識をもって問題を解決することについて

教師がすぐに問題を伝えるのではなく、日常生活や社会、数学の事象から問題を見いださせることで、何が課題であるのか、何を目指して問題を解決するのか、生徒から発言を引き出すことができた。

数値等の答えを求めることだけを目的とせず、数学的な価値付けをして問題を焦点化してから解決に取り組んだため、解決したことと既習事項を関連付けることにつながり、生徒が根拠を示しながら思考の過程を説明する姿が多く見られた。また、学習のまとめでは、学習したことやその価値をより多くの生徒が書いたり発言したりする姿が見られた。

2 課題

(1) 生徒が問題を見いだすことについて

事象に対して数学的な見方・考え方を働かせることを想定していたが、既習事項の定着が十分ではない生徒にとって、見方や考え方を働かせて問題を見いだしたり、数学的に価値付けて焦点化したりすることは難しいことがある。生徒の習熟度に応じて、意図する見方・考え方を働かせることができるような教材の提示や発問の仕方をさらに工夫する必要がある。

生徒が問題を見いだすことをねらいの一つとしたが、ともすると、導入の段階で多くの時間を使ってしまったり、想定しない方向に生徒の発言が進んでしまったりすることもある。生徒から問題の文言まで全て引き出そうとせず、発言を拾って教師が問題にまとめたり、生徒の反応に応じて、発言を引き出すための補助的な発問をしたりするなどの柔軟な対応が必要である。

(2) 生徒が目的意識をもって問題を解決することについて

目的意識が高まることで、問題解決が容易になるとは限らない。自力解決に取り組む際の生徒の反応も想定し、特に習熟度の低い生徒に対しては、個別の声掛け、支援が必要である。次時の学習への目的意識をもたせ、1単位時間ずつがつながる学習をねらったが、1単位時間の授業だけでは見取ることが難しい。単元を見通して、継続的に取り組んでいくことが大切である。

中学校理科学研究開発委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	研究の視点	3
III	研究仮説	3
IV	研究方法（研究構想図）	4
V	研究内容	4
IV	研究の成果と課題	15

< 中学校理科研究開発委員会 >

研究主題

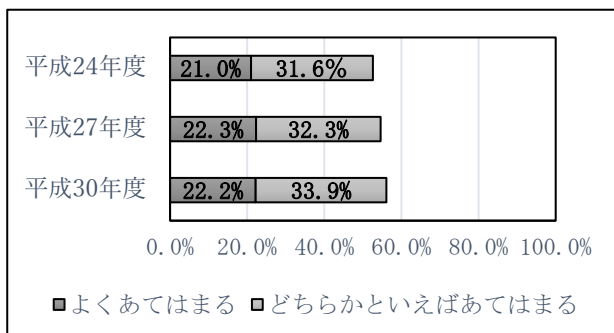
深い学びを実現させるための指導方法の開発 ～科学を学ぶことの有用性を実感させる学習活動を通して～

I 研究主題設定の理由

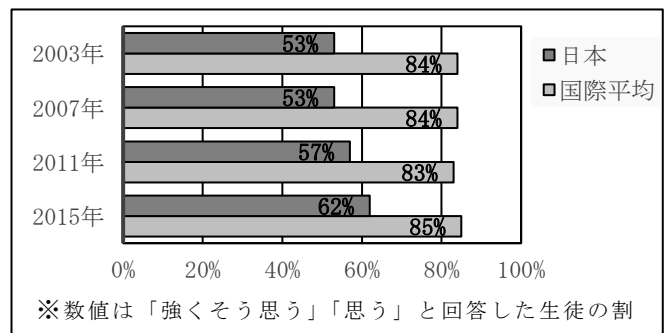
「中学校学習指導要領解説理科編（平成 29 年 7 月）」（以下、「中学校学習指導要領解説理科編」と表記）第 2 章第 1 節教科の目標に、「学びに向かう力、人間性等を育成するに当たっては、生徒の学習意欲を喚起し、生徒が自然の事物・現象に進んで関わり、主体的に探究しようとする態度を育てることが重要である。その際、自然体験の大切さや日常生活や社会における科学の有用性を実感できるような場面を設定することが大切である。」とあるように、日常生活や社会における科学を学ぶ有用性を実感できる授業を行うことが求められている。

しかし、「全国学力・学習状況調査（文部科学省）」（以下、「全国学力・学習状況調査」と表記）では、「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という問いに対する生徒の肯定的な回答が過去 3 回とも 50% 台であった。（図 1 参照）

また、国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）でも、「理科を勉強すると、日常生活に役立つ」における日本の中学生の肯定的な回答が過去 4 回とも 50～62% を推移し、中学生国際平均の 80～85% を大きく下回った。（図 2 参照）



「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」（図 1）



「理科を勉強すると、日常生活に役立つ」（図 2）

このことから、生徒が授業で科学を学ぶ有用性を十分に実感できていないことが分かり、科学を学ぶことの有用性を実感させる授業改善が課題として浮かび上がった。

さらに、中学校学習指導要領解説理科編第 3 章では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて『深い学び』については、例えば、『理科の見方・考え方』を働かせながら探究の過程を通して学ぶことにより、（中略）次の学習や日常生活などにおける問題発見・解決の場面で働かせているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。」とある。

そこで本研究では、このような状況に鑑み、日常生活や社会における科学を学ぶ有用性を実感させる指導方法を開発し、深い学びを実現させることにした。

Ⅱ 研究の視点

1 教員と生徒の意識

研究主題に迫るため、まず、教員と生徒の意識のずれに注目をした。(図3)が全国学力・学習状況調査における教員の意識調査の結果、(図2)が全国学力・学習状況調査にお

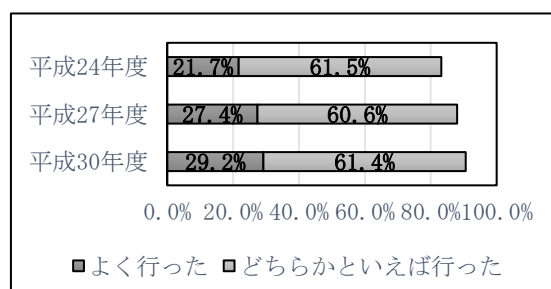
ける生徒の意識調査の結果、(図4)が研究開発委員の所属する学校における生徒の実態調査である。

(図3)と(図2)を比較すると、教員は、実生活における事象との関連を図った授業を行っているにも関わらず、生徒は授業で科学を学ぶ有用性を十分に実感できておらず、指導者側と学習者側の授業に対する意識にずれがあることが分かる。

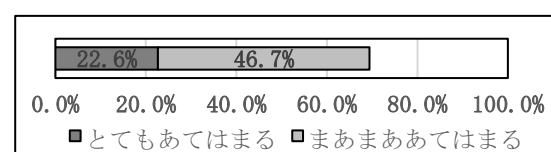
また、(図4)からも研究開発委員の所属する学校の生徒も授業で科学を学ぶ有用性を十分に実感できていないことが分かる。

その要因として、生徒の自然体験や日常的な体験が不足しており、日常生活に関連付いているこ

とを意識しにくいことや授業の中で学習した内容が日常生活に関連付いていることを考える時間を十分に確保できていないことなどが考えられる。



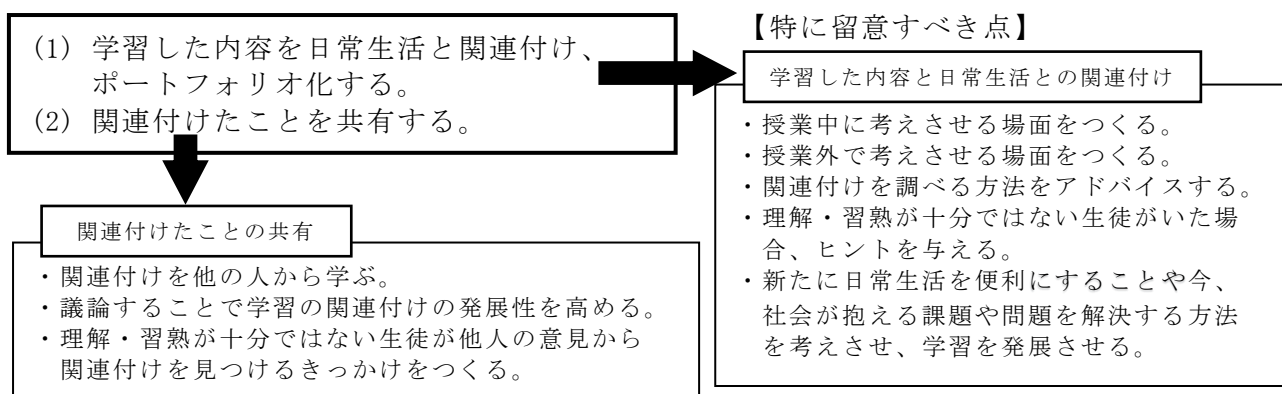
「理科の指導に関して、実生活における事象との関連を図った授業を行いましたか。」(図3)



「理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活かすことができないか考えるときがありますか。」(図4)

2 日常生活と関連付けた学習活動

このような状況に鑑み、本研究では、日常生活や社会における科学を学ぶ有用性を実感させるために、効果的な学習活動を検討することとし、以下の活動を考えた。(図5)



「日常生活と関連付けた学習活動の流れ」(図5)

Ⅲ 研究仮説

本研究では、研究の視点から、以下に示した生徒が日常生活と関連付けた学習活動を多く取り入れ、積み重ねることで、科学を学ぶ有用性を実感し、深い学びにつながるという仮説を立てた。

学習した内容と日常生活や社会との関連付け

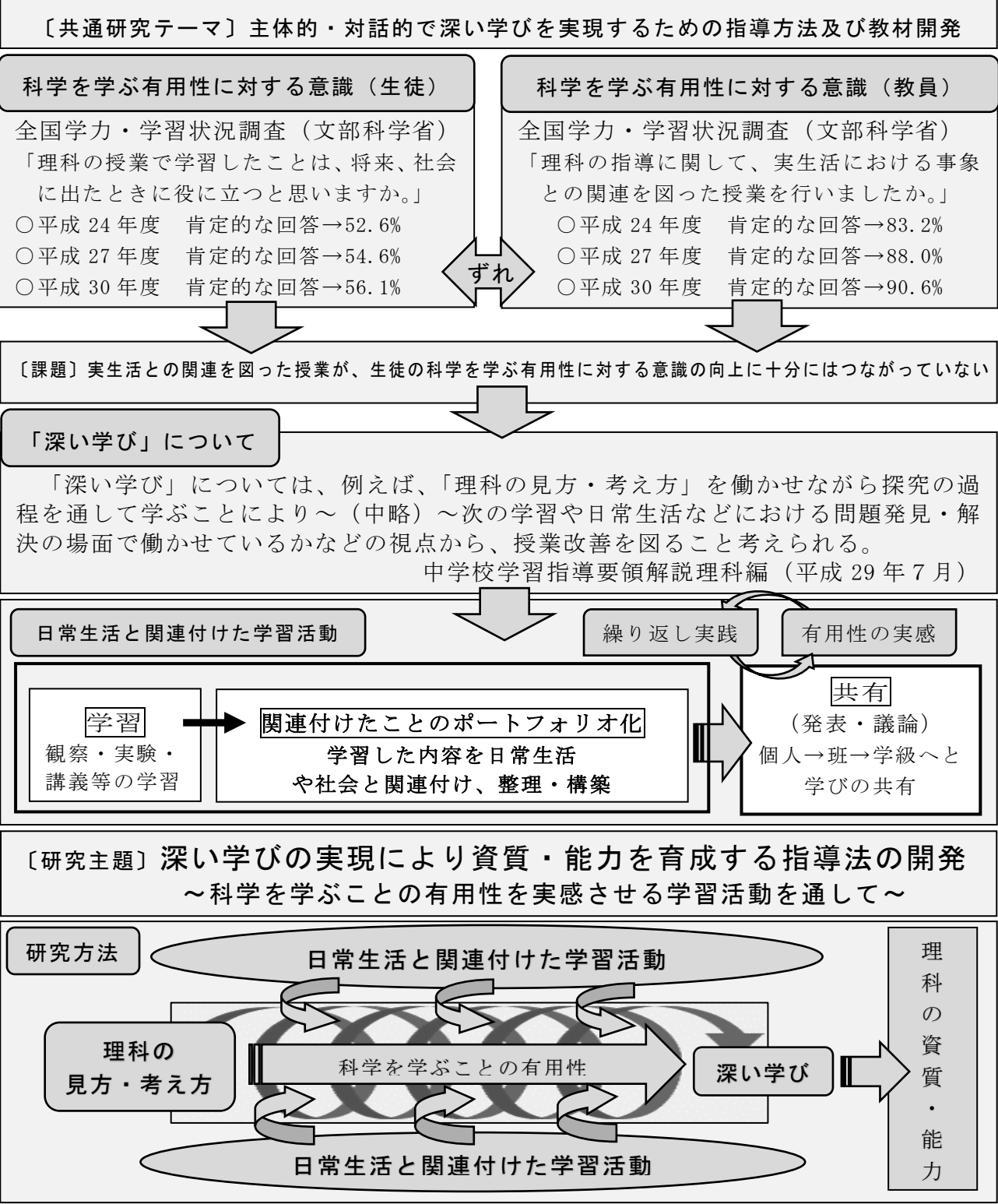
学習した内容が日常生活や社会の中でどのように活かされているか、自分が体験したこと

や自分で調べたことを用いてポートフォリオシートにまとめ、整理・構築することで、科学を学ぶ有用性を実感し、深い学びをもたらす。

学習した内容を日常生活や社会と関連付けたことの共有

他者がまとめ、整理・構築した、学習した内容と日常生活や社会との関連付けを意見として聞き、様々な意見をグループ化し、議論を通して知り得た様々な意見をもとに自分の考えを再構成することで、科学を学ぶ有用性を実感し、深い学びをもたらす。

IV 研究方法（研究構想図）



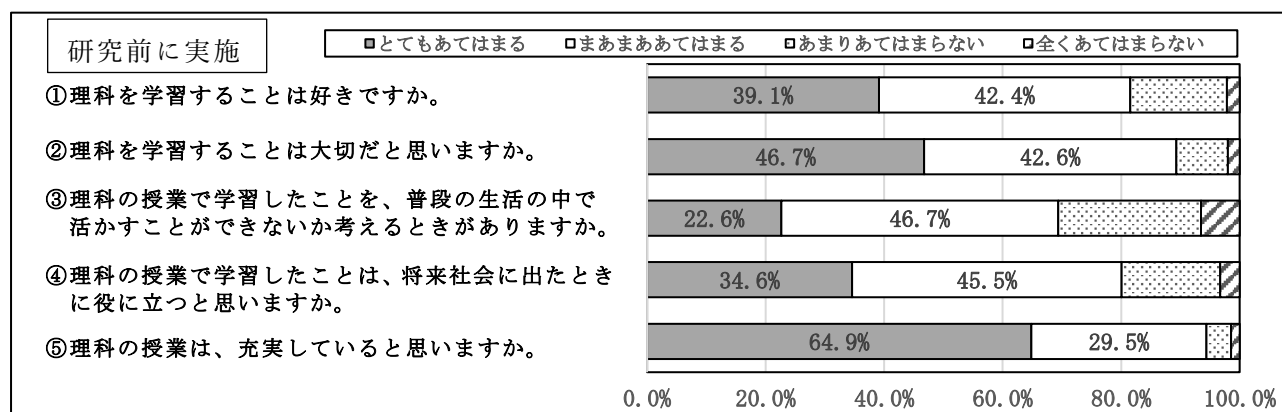
V 研究内容

1 実態調査

本研究を進めるにあたって、研究開発委員が所属する学校において生徒の実態調査を実施した。本研究による生徒の変容を見るために、同様の調査をと研究前後で行った。(図6)

研究前の調査は、下図のとおりであり、以下のことが分かった。

- (1) 9割以上の生徒が、⑤「理科の授業は、充実している」と感じている。
- (2) 8割以上の生徒が、①「理科を学習することが好き」、②「理科を学習することは大切」、④「理科の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つ」と感じている。
- (3) 7割程度の生徒が、③「理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活かすことができないか考えるときがありますか」。



生徒の実態調査 (図6)

2 指導方法

(1) ワークシートについて

学習した内容と日常生活との関連付けを主体的に整理・構築するために、ポートフォリオシート「L.U.M.P. (深い学びへの灯り) ※Learning Useful (役に立つ学習) by Map(日常・社会の見取り図) and Portfolio (ポートフォリオ)」(以下、「L.U.M.P. シート」と表記)を作成した。(図7)、(図8)

L.U.M.P. (深い学びへの灯り) ※Learning Useful (役に立つ学習) by Map(日常・社会の見取り図) and Portfolio (ポートフォリオ)

Portfolio (ポートフォリオ)

学習した内容と日常生活との関連付けを主体的に整理・構築するために、ポートフォリオシート「L.U.M.P. (深い学びへの灯り) ※Learning Useful (役に立つ学習) by Map(日常・社会の見取り図) and Portfolio (ポートフォリオ)」(以下、「L.U.M.P. シート」と表記)を作成した。(図7)、(図8)

Map(日常・社会の見取り図)

生活	①衣服	②食品	③住まい	④衛生	⑤子育て保育	⑥介護福祉
産業	⑦農業・林業	⑧漁業・養殖業	⑨機械・工業	⑩電気	⑪情報通信業	⑫建設業
健康	⑬医療	⑭歯科	⑮接骨整骨	⑯薬	⑰スポーツ	⑱フィットネス
交通	⑲車・バイク	⑳自転車	㉑鉄道	㉒航空	㉓船舶	㉔交通安全
社会	㉕政治	㉖法律	㉗経済	㉘環境問題	㉙教育	㉚国防軍事
自然	㉛動物	㉜植物	㉝宇宙	㉞地形	㉟気象	㊱災害
芸術	㊲彫刻・絵画	㊳写真	㊴伝統工芸	㊵伝統芸能	㊶音楽	㊷演劇・ダンス
その他	㊸その他					

L.U.M.P. シート表面 (図7)

L.U.M.P. シート裏面 (図8)

以下に示す、「日常・社会で発見したことが学習した内容とどのように関連付いているか調べる項目」(以下、「日常・社会で発見したこと」と表記)を9カ所設けた。9カ所では足りない生徒には2枚目を配布した。

日常・社会で発見したこと	関連のある学び	どうつながる？ ・ どう役立っている？
日時： 年 月 日 Map 番号： 日常・社会のできごと：		

「どうつながる？」「どう役立っている？」のどちらかに丸を付けさせた。

「どうつながる？」は、町などで自分が実際に見て確認したもの、「どう役に立っている？」は、ニュース、インターネット、テレビ、ラジオ、本などで知り得た情報とした。

イ 以下に示す、「新たに日常生活を便利にし、今社会が抱える課題や問題を解決する方法を考える発展学習の項目」（以下、「やってみよう」と表記）を設けた。

やってみよう！

「あなたなら、今回学んだ学習内容をどんな風に日常生活や社会に役立たせられると思いますか？」

※新たに日常生活を便利にし、今社会が抱える課題や問題を解決する方法などのアイデアを考え、学習をさらに発展させ、どう役立たせられるかできるだけ分かりやすく表現しましょう。

中学校学習指導要領解説理科編第1章総説1節改訂の経緯及び基本方針②育成を目指す資質・能力の明確化に「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」とある。

「やってみよう」を生徒が取り組むことにより、未知なる課題を解決する力（資質・能力）を獲得できると考えた。

ウ 「日常・社会で発見したこと」や「やってみよう」に取り組みやすくするために、右図に示す、「Map（日常・社会の見取り図）」（以下、「Map」と表記）をL.U.M.P.シートの裏面に印刷した。

「日常・社会で発見したこと」のMap番号は、下図の番号を表記させた。

Map(日常・社会の見取り図)						
生活	①衣服	②食品	③住まい	④衛生	⑤子育て保育	⑥介護福祉
産業	⑦農業・林業	⑧漁・養殖業	⑨機械・工業	⑩電気	⑪情報通信業	⑫建設業
健康	⑬医療	⑭歯科	⑮接骨整骨	⑯薬	⑰スポーツ	⑱ダイエット
交通	⑲車・バイク	⑳自転車	㉑鉄道	㉒航空	㉓船	㉔交通安全
社会	㉕政治	㉖法律	㉗経済	㉘環境問題	㉙教育	㉚国防軍事
自然	㉛動物	㉜植物	㉝宇宙	㉞地形	㉟気象	㊱災害
芸術	㊲彫刻・絵画	㊳写真	㊴伝統工芸	㊵伝統芸能	㊶音楽	㊷演劇・ダンス
その他	㊸その他					

(2) 指導方法の工夫

本研究では、科学を学ぶ有用性を実感し、深い学びにつながるために、日常生活と関連付けた学習活動を繰り返し実践することが重要であると確認した。

活動の中で、「学習した内容と日常生活との関連付け」と「関連付けたことの共有」の指導方法を工夫した。

〔指導の流れ〕

授業	授業外
①L. U. M. P. シートの配布・説明	L. U. M. P. シートの記入 学習した内容と日常生活との関連付け
②大単元・小単元の学習（観察・実験・講義等）	
③発表会（個人・班・学級） 関連付けたことの共有	

ア 学習した内容と日常生活との関連付けを主体的に整理・構築する工夫

- (ア) L. U. M. P. シートを配布し、常に関連付けを考えられるようにした。
- (イ) 授業で学習した内容の振り返りを次時に行い、学習した内容を意識付けした。
- (ウ) 授業で関連付けのヒントを出し、関連付けを考えやすくした。
- (エ) 大単元・小単元の学習で区切り、関連付けを考える時間を十分に確保した。
- (オ) 休み時間・昼休み・放課後に生徒が関連付けについて質問できる時間を確保した。
- (カ) 理解・習熟が十分ではない生徒に対して、声掛けをするとともに、ヒントを与えた。

イ 関連付けたことの共有を他者と対話的に行う工夫

- (ア) 他者が考えた関連付けを理解するために、評価シートを作り、評価や意見を記録できるようにした。
- (イ) 4～6人班で発表することで、L. U. M. P. シートに調べてきたことや考えてきたことを一人一人が全て発表できる時間を確保した。
- (ウ) 学級内を自由に移動し、個人どうしで共有をすることで L. U. M. P. シートに取り組めなかった生徒が他者の意見をきっかけに関連付けを考えることができるようにした。
- (エ) 新たに日常生活を便利にし、今社会が抱える課題や問題を解決したりする方法を考える発展学習では、班の発表から選ばれた代表者が発表をよりよくするために、班内で議論をさせた。
- (オ) 新たに日常生活を便利にし、今社会が抱える課題や問題を解決したりする方法を考える発展学習の発表では、発表後の質疑応答をしやすくするために学級を三つのグループに分け、ホワイトボードを使ったポスターセッションを行った。

3 指導事例

(1) 第2学年 第1分野「化学変化と原子・分子」における事例

ア 単元名 「化学変化とその利用」

イ 目標

- ・私たちの暮らしの中で熱の出入りが伴う化学変化がどのように生かされているか具体例を挙げて説明することができる。

- ・既習事項を活用し、熱の出入りが伴う化学変化を、これからの社会の中でどのように活用していくか、具体例を挙げて考察することができる。

ウ 単元の指導計画

5時間中4時間で「化学変化とその利用」を学習する。

最後の1時間（本時）でL.U.M.P.シートを活用し、熱の出入りを伴う化学変化が日常生活の中でどのように生かされているか列挙する。また既習事項を活用してこれからの社会の中で実現可能な実用例等を考察する。

エ 展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項 (○；留意点)	評価 方法
導入 5分	□前時の復習（発熱反応・吸熱反応）の実験の映像を視聴し、既習事項を確認する。	○デジタル教科書の映像コンテンツを利用し、既習事項の振り返りを行う。	
本時の目標を提示			
	□本時の目標を確認する。 目標 熱の出入りを伴う化学変化を、これからの社会の中でどのように活用していくか、具体を挙げて考える。		
共有「日常・社会での発見したこと」の発表（4人班）			
展開 40分	□L.U.M.P.シートに書き溜めてきた日常・社会での発見したことを班単位で一人ずつ発表する。 □一人の発表後、発表評価シートの「参考になる内容」、「感想」などを記入し、5段階評価で自己評価する。	○発表には、発表評価シートを活用する。事前に発表の仕方、評価シートの記入の仕方は説明しているが、再度、重要箇所について注意を促す。 ○調べてきたものの中からよいものを二つ選択し発表する。より多くの意見を共有するために、重複した場合には後で発表する生徒は他のものを発表するように指示する。 ○司会を決め、必ず全員が発表するように配慮する。 ○発表の際、班員への説明用に写真や書籍を持参することを許可する。	【人】 発表 ワーク シート
共有「やってみよう」の発表（4人班）			
	□新たに日常生活を便利にし、今社会が抱えている課題や問題を解決する方法などのアイデアを発表する。		【思】 発表 ワーク シート

「やってみよう」の発表準備（４人班）		
	☐ 代表者を一人決め、代表者の発表をより良いものに改良できるか班で考えさせる。 ☐ 記入例を参考に大型ホワイトボードを作成する。	☐ 大型ホワイトボードに図等を記入し、班員にその内容が伝わりやすいように配慮する。
共有「やってみよう」の発表（学級全体）		
	☐ １グループ、２分程度で代表者が発表を行う。	☐ 大型ホワイトボードに図等を記入し、学級全体にその内容が伝わりやすいように配慮する。 ☐ 発表終了後に質疑応答を行う。
まとめ 発表の総括（教員）		
まとめ ５分	☐ 教員による講評と総括を聞く。	☐ 発表後、吸熱反応における誤概念を訂正する。化学変化ではない吸熱反応を取り上げている班が数多くいることが予想されるため、生徒への投げ掛けを行い、生徒自身からの気づきを促す。

カ ホワイトボード（WB）の記入例

■熱の出入りを伴う化学変化の活用

１班：（名前）（名前）
（名前）（名前）

図などを
記入

説明文などを記入

ホワイトボード（WB）の記入例（図 9）

(2) 第 1 学年 第 1 分野「物質のすがた」における事例

ア 単元名「いろいろな物質」「気体の発生と性質」

イ 目標

- ・私たちの暮らしの中で身の回りの物質の性質がどのように生かされているか具体例を挙げて説明することができる。
- ・既習事項を活用し、身の回りの物質の性質がこれからの社会の中でのどのように生かされていくか実用例等を挙げて考察することができる。

ウ 単元の指導計画

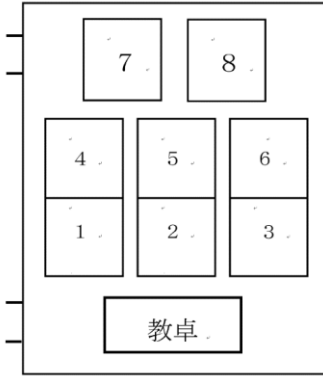
12 時間中 7 時間で「いろいろな物質」を学習する。

12 時間中 4 時間で「気体の発生と性質」を学習する。

最後の 1 時間（本時）で L. U. M. P. シートを活用し、私たちの暮らしの中で身の回りの物

質の性質がどのように利用されているか列挙する。また、既習事項を活用してこれからの社会の中で実現可能な実用例等を考察する。

エ 展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項 (○；留意点)	評価方法
導入 5分		○話し合いは以下のような班で行う。  班の構成：3～4名で男女混合の班	
本時の目標を提示 と 発表の流れの説明			
	☐ 黒板に注目し、板書の本時の目標を確認する。 目標 身の回りの物質を、これからの社会の中でどのように活用していくか、具体例を挙げて考える。 ☐ 発表の流れを確認する。	○「発表評価シート」を見ながら確認させる。	
共有 「日常・社会での発見したこと」の発表			
展開1 10分	☐ L.U.M.P.シートに書き溜めてきた「日常・社会で発見したこと」を発表し合う。 ☐ 発表評価シートの「評価シート」を記入し、5段階評価で評価する。	○教室内を自由に移動してよいこととし、歩き回り、3人以上と記入済みのL.U.M.P.シートを発表させる。 ○言葉で交わしたことをメモするように指導する。 ○記入は、箇条書きにさせる。 ○発表し合う人が見つからず一人である生徒がいた場合、他の生徒に共有を促す。 ○自分の発表と異なる内容を見付けて、書くように指導する。	【人】 ワークシート 発表
「やってみよう」の発表（4人班）			
展開2 20分	☐ L.U.M.P.シートに考えてきた「新たに日常生活を便利にし、今社会が抱えている課題や問題を解決する方法」に当てはまるMap番号を白紙に書き、クラス全体に見えるように、それぞれ示す。		

	☐ 班内の「関連のある学び」がなるべく同じになるように他班と調整する。 ☐ 考えてきた「新たに日常生活を便利にし、今社会が抱えている課題や問題を解決する方法」などのアイデアを発表する。	☐ 4人班の中で「関連の学び」がちがうようであれば、他の班の生徒と入れ替えさせる。	【思】 ワークシート 発表
「やってみよう」 代表者の発表準備（4人班）			
	☐ 代表者を一人決め、代表者の発表をよりよいものにできるか班で考える。 ☐ 説明用ホワイトボードを班で作成する。	☐ 説明用ホワイトボードは、簡条書きや図にさせ、時間短縮を促す。 ☐ 作業が進まない班に指導をする。	
「やってみよう」 代表者の発表（三つの班）			
展開 3 10 分	☐ L. U. M. P. シートに考えてきた「新たに日常生活を便利にし、今社会が抱えている課題や問題を解決する方法」などのアイデアを班ごとに代表者を中心に発表する。 ☐ 三つの班を班の机に常駐し、他班の生徒と意見交換をする。（2分30秒×3） ☐ 聞き手は、発表評価シートに発表内容のメモをとり、5段階評価をする。	☐ 発表後は、聞き手に疑問点など質問させ、アイデアがよりよくなるように指導する。 ☐ 疑問点などの質問が出ない場合、教員側で質問をする。	【人】 【思】 ワークシート 発表
発表のまとめ			
まとめ 5 分	☐ 黒板に各班のホワイトボードを貼る。 ☐ 評価シートをまとめる。		

エ ホワイトボードの記入例

⑳環境問題 学び：吸熱反応 1 班 発表者

図・説明文などを記入

ホワイトボード（WB）の記入例（図 10）

(3) 第1学年 第2分野「天気とその変化」における事例

ア 単元名「天気とその変化」

イ 目標

- ・私たちの暮らしの中で天気の変化がどのようにつながるか、生かされているか具体例を

挙げて説明することができる。

- ・既習事項を活用し、これからの社会の中でのどのように生かされていくか実用例等を挙げて考察することができる。
- ・私たちの暮らしの中で身の回りの物質の性質がどのように生かされているか具体例を挙げて説明することができる。
- ・既習事項を活用し、身の回りの物質の性質がこれからの社会の中でのどのように生かされていくか実用例等を挙げて考察することができる。

ウ 単元の指導計画

31 時間中 14 時間で「気象観測と雲のでき方」を学習する。

31 時間中 6 時間で「前線とそのまわりの天気の変化」を学習する。

31 時間中 9 時間で「大気の動きと日本の天気」を学習する。

最後の 2 時間で L.U.M.P. シートを活用し、天気の変化が日常生活の中でどのように生かされているか列挙する。また、既習事項を活用してこれからの社会の中で実現可能な実用例等を考察する。第 1 時は、班で発表して代表者を選び、第 2 時（本時）は、代表者が発表する。

エ 展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項 (○；留意点)	評価 方法
本時の目標を提示 と 発表の流れの説明			
導入 3 分	☐ 評価の仕方について説明する。 ☐ 本時の目標を確認する。 目標 天気の変化を、こらからの社会の中でどのように活用していくか、具体例を挙げて考える。	☐ 審査用紙を配布し、すべての発表者名、発表テーマ名、Map 番号を黒板にあらかじめ書いておく。 ☐ 公正、公平な審査となるよう評価基準や評価方法を理解させる。	
共有 「日常・社会での発見したこと」「やってみよう」の発表（各班の代表者 6～8 名）			
展開 42 分	☐ 各班の代表者が発表する。 ☐ 聞き手は、審査用紙に発表内容のメモをとり、審査をする。 ☐ 班で、審査用紙の発表点数を集計する。	☐ 司会は学級委員が行う。 ☐ 前に司会席を作る。 ☐ 黒板に発表者と「やってみよう」のタイトル、Map 番号を事前に書かせておく。 ☐ 発表時間は、1 人 5 分とし、1 分前にはベルを鳴らす。 ☐ 1 人発表するごとに 1 分間の審査時間を設ける。 ☐ 3 人目の発表者までは仮の点数とし、相対性が見えたところで、それまでの発表者を再審査させる。 ☐ 計算機を持参させ、時間短縮をする。	【人】【思】 ワーク シート 発表

		○集計結果をパソコンで集計し、表彰状を作成する。 ○完成した賞状を学級委員に渡す。	
まとめ 表彰、発表の講評（生徒）			
まとめ 5分	☐ 発表点数が1位と2位の生徒を学級委員が表彰する。 ☐ 発表の講評をクラス代表生徒が行い、他の生徒は話を聞く。 ☐ 審査用紙とL.U.M.P.シートを提出する。		

VI 成果と課題

1 調査結果

本研究による「日常生活と関連付けた学習活動」に取り組む前後で、生徒の意識の変容を調査した。【調査対象：中学校の生徒（集計数 事前 552 人、事後 538 人）】

質問	質問項目	事前アンケート（％）				事後アンケート（％）				肯定的回答の増加（※）
		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
1	理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活かすことができないか考えるときがありますか。	22.6	46.7	24.1	6.5	21.4	49.1	24.2	5.4	+2.1
2	理科の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役立つと思いますか。	34.6	45.5	16.7	3.3	32.7	48.9	16.4	2.0	+2.5
3	理科の授業は、充実していると思いますか。	64.9	29.5	4.2	1.4	65.0	30.0	4.5	0.6	+2.0

※ 肯定的回答の増加の集計は「とてもあてはまる」を2ポイント、「まあまああてはまる」を1ポイント、「あまりあてはまらない」を－1ポイント、「全くあてはまらない」を－2ポイントとして変動を集計

また、L.U.M.P.シートを使用した学習について調査した。【調査対象：中学校の生徒（集計数 536 人）】

質問	質問項目				
1	何も調べずに、学習内容と日常や社会との関連（つながりや役立ち）を見つけることができましたか。	はい		いいえ	
		32.3%		67.7%	
2	学習内容と日常や社会との関連（つながりや役立ち）を調べて見つけたとき、何を使って調べましたか。 ※回答者は質問1で「いいえ」と答えた生徒 ※複数回答可とした。	インターネット	本	人に聞いた	新聞・ラジオ・テレビ（ニュース） その他
		62.1%	9.9%	25.4%	13.6% 1.3%
3	Map（日常・社会の見取り図）はどの場面で使いましたか。 ※選択肢1、2は複数回答可とした。	日常、社会との関連（つながりや役立ち）の発見		やってみようを 考えるとき	使わなかった
		76.3%		35.3%	9.1%

2 本研究の成果

本研究において、「日常生活と関連付けた学習活動」を行い、それを繰り返し、科学を学ぶ有用性を実感させることで、生徒の深い学びにつながったと考えられる。具体的な成果として以下の4点が挙げられる。

(1) 学習した内容と日常生活との関連付けを考える機会の増加

本研究では、「学習した内容と日常生活との関連付け」の指導方法をL.U.M.P.シートを用い、工夫した。その結果、実態調査「【質問1】理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活かすことができないか考えるときがありますか。」に対して肯定的に回答した生徒が2.1ポイントと、増加が見られた。L.U.M.P.シートを使う

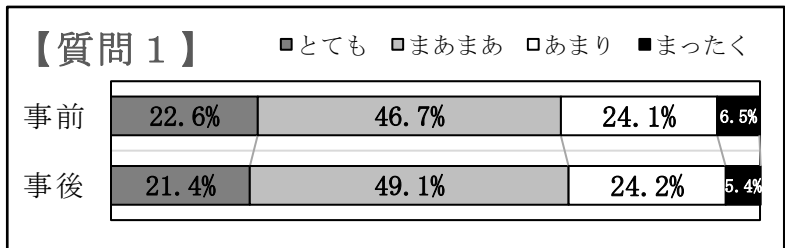
ことにより、普段、理科の学習が苦手であった生徒の中に、

L.U.M.P.シートに記入するため

のアドバイスを得ようと、積極的に取り組むためのヒントを教師に積極的に質問する生徒やL.U.M.P.シートの記入枠に収まらず、付箋を貼って積極的に

「学習した内容と日常生活との関連付け」を調べる生徒など、変容が見られた。

このことから、研究前と比べて生徒は、学習した内容と日常生活との関連付けを考える機会が増加したことを実感し、充実感をもって理科の学習に取り組んでいると考えることができる。



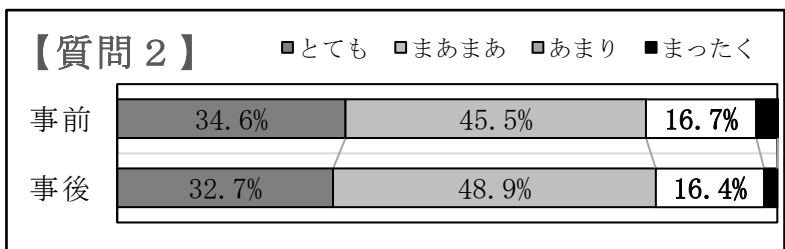
【質問1】理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活かすことができないか考えるときがありますか。(図11)

(2) 科学を学ぶ有用性の実感

本研究では、L.U.M.P.シートを用いて、「学習した内容と日常生活との関連付け」を行うことで科学を学ぶ有用性を実感させようとした。

実態調査「【質問2】理科の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役立つと思いますか。」に対して肯定的な回答が本研究後、2.5ポイント増加

した。本研究以前にも高い値を示していたものが、さらに増加している。つまり、研究前と比べて生徒は、科学を学ぶ有用性を実感していると考えられる。



【質問2】理科の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つと思いますか。(図12)

(3) 身近な自然事象への関心の深まり

L.U.M.P.シートを作成する活動を通して、生徒は自然現象等についても関心を深めることができたと考える。本研究前は、台風等の気象現象や身近な家電製品等に関心をもつ生徒は少なかったが、今社会が抱える課題や問題を解決する方法を、実際に自分自身が考えることが、身近な自然事象を調べる契機になり、かつ理科への興味・関心を向上させる一助になっ

た。検証授業（単元：化学変化とその利用）でも、他の生徒の発表を聞いて、「だから夏場には水を撒くんだ」等と発言する生徒が複数人いた。基礎知識（身近な自然事象の原理）の構築がなければ今社会が抱える課題や問題を解決する方法を考えることは困難である。この発展課題を解決する活動が、基礎をふり返る契機になったと考えられる。

(4) 思考力・表現力の向上

本研究当初、「やってみよう」（新たに日常生活を便利にし、今社会が抱える課題や問題を解決する方法などのアイデアを考える課題）では、「これが欲しい」、「これがあったらよい」等の願望のみを記載する生徒が多かったが、繰り返し取り組むことにより、整理・構築した既習事項を活用し、「どうやったらこういうものが作れるか」、「どういう方法を用いれば、この問題を解決できるのか」等、願望を実現するための具体的かつ論理的方法を考え出す生徒が増加した。このことから、本研究の活動を通じて、生徒の思考力・表現力を向上させられたと考えられる。

また、L.U.M.P. 発表会では、自分の考えた内容を他の生徒に分かりやすく説明する活動を実践した。特に本研究では、発展的な内容が多く、他の生徒の発表を聞いた生徒は言語情報だけでは発表内容の全てを理解することが困難な場面が多々見られた。生徒も L.U.M.P. 発表会に複数回取り組むことで、「どのような発表をすれば他の生徒に内容が伝わりやすいのか」考え、比喩技法を用いて発表したり、写真や図等を用いて発表したりする場面も見受けられた。L.U.M.P. 発表会を通して生徒の発表する力をはじめとする表現力も向上したと考えられる。

3 本研究の課題

(1) 評価計画について

本研究では、評価を考える上で、「日常・社会での発見したこと」は「学びに向かう力、人間性等」で、「やってみよう」は「思考」が伴う活動のため、「思考力・判断力・表現力」で評価した。今後は新学習指導要領の評価計画等を参考に、より詳細なルーブリックを作成する必要があると考えられる。

(2) ヒントの提示方法

本研究では、L.U.M.P. シートを完成させることが困難な生徒に対して、ヒントとして単元ごとに日常・社会のできごとのキーワード（以下、「ヒントワード」）集を作成した。しかし、L.U.M.P. シート完成が困難な生徒ほど、ヒントワードの必要性を感じず、教師自身の生徒への声掛けがなければ、ヒントワードの活用頻度が低くなってしまった。生徒自身が自分自身の現状を自己分析し、必要に応じて自主的にヒントワードを求める授業展開等を検討する余地があった。

(3) L.U.M.P. 発表会の形式について

検証授業では、「日常・社会での発見したこと」と「やってみよう」の両方の発表に取り組んだが、1 単位時間の中で両方の発表を充足させた形で終わらせることが難しく、両方の発表を行ったことが結果的に「やってみよう」の内容を班で深め合う時間が短くなり、完成度の低い発表活動になってしまう時があった。単元の内容にもよるが、「日常・社会での発見したこと」と「やってみよう」の発表を2 単位時間に分ける授業計画や、生徒の思考力がより問われる「やってみよう」のみを扱う等の授業計画を綿密に立案したりする必要があると考えられる。

(4) L.U.M.P. シートを用いる小単元や大単元の設定

L.U.M.P. シートを用いる学習は、授業外で取り組む宿題であるため、小単元ごとで行うと頻度が増え過ぎ、生徒への負担があった。また、単元によっては、「学習した内容と日常生活との関連付け」が難しいことも分かった。このため、L.U.M.P. シートを用いる小単元や大単元の設定を十分に検討する必要があると考える。

(5) 学習内容と日常や社会との関連（つながりや役立ち）を調べる手段

L.U.M.P. シートを用いる学習についての調査「【質問 2】学習内容と日常や社会との関連（つながりや役立ち）を調べて見つけたとき、何を使って調べましたか。」の回答で、最も多かった回答はインターネットであった。インターネットは身近で生徒にとって最も簡単な手段であるが、図書館や研究機関、企業と連携を図ることで、科学を学ぶ有用性を実感する選択肢をより多く作っていけると思われる。

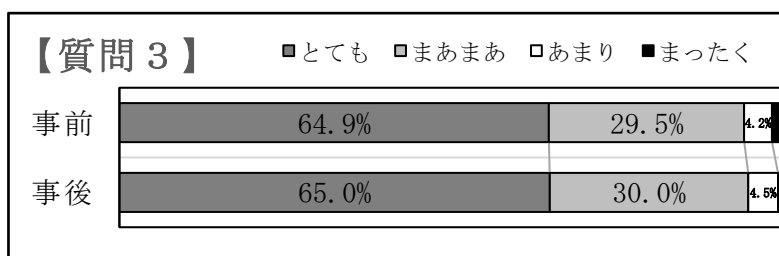
4 本研究の今後の展望

本研究を通して、実態調査「【質問 3】理科の授業は、充実していると思いますか。」に対して肯定的な回答をした生徒が 2.0 ポイント増加し、本研究以前にも高い値を示していたものが、さらに増加している。

「科学を学ぶ有用性を実感させる学習活動」を通して、授業に

興味と充実感をもち、科学的な関心・意欲が向上したと考えられる。

今後、本研究を継続していくことで、さらなる教育活動への還元が期待できる。



【質問 3】理科の授業は、充実していると思いますか。（図 13）

中学校保健体育研究開発委員会

目 次

I	研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・	4
III	指導事例・・・・・・・・・・・・・・・・	12
IV	研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・	16

＜中学校保健体育研究開発委員会＞

研究主題

生徒の学習改善を図る保健体育科の評価の設定

I 研究の目的

1 主題設定の理由

近年、情報化やグローバル化の進展が加速度を増し、社会の変化を予測することが困難な時代となっている。生徒一人一人が、そのような社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を伸ばしていく力が求められている。また、その力を付けるためには、時代の変化に応じた教育を、生徒の実態に即した方法で展開する必要がある。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成 28 年 12 月 12 日 中央教育審議会）において、「生徒の学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要である」と示されている。

しかし、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善について（通知）」の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成 31 年 1 月 31 日 中央教育審議会）では、教育課程の改善や授業改善の一連の過程に学習評価を適切に位置付けた学校運営の取組がなされる一方で、学校や教師の状況によっては、

- 評価の結果が生徒の具体的な学習改善につながっていない
- 教師によって評価の方針が異なり、指導改善につなげにくい
- どのような方針によって評価を行うのかが事前に示されず、教師が生徒に身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージをもたせていないこと 等

の課題が指摘されている。

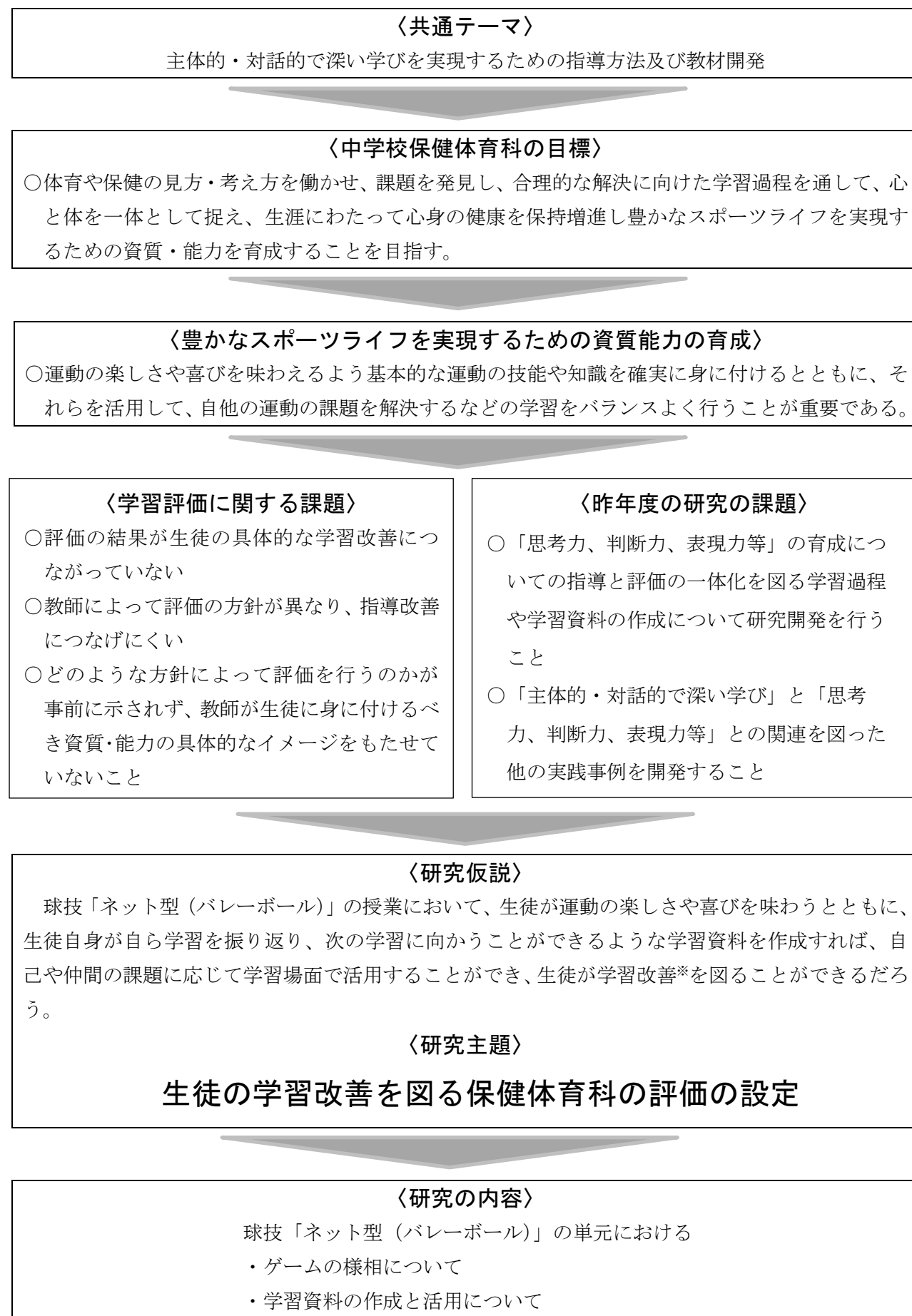
保健体育科においては、生徒が生涯にわたって運動やスポーツに親しむとともに、スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができる力を確実に身に付けるために、運動の特性を味わい、実感を伴った理解を促すことができるよう、自己評価等を行うことが重要である。

そこで本研究では、保健体育科の授業において、生徒の発達段階に応じた運動に取り組む中で十分に特性を味わえるようにすること、生徒が自主的に自己評価・相互評価を実施し、学習改善に生かすことができるような学習資料を研究・開発することにより、教師の指導改善を図ることとした。

また、昨年度の開発委員会では、「球技」を取り上げ「思考力、判断力、表現力等の育成」に取り組んだが、指導と評価の一体化が課題として残ったため、今年度も引き続き同じ領域である「ネット型（バレーボール）」の単元に取り組み、研究の継続性を維持することとした。

以上のことから、球技の楽しさに触れられるためにゲームの様相を明らかにするとともに、生徒の学習改善を図るために「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の学習内容を学習資料に示すことを手だての柱とし、今年度の研究開発委員会の研究主題を「生徒の学習改善を図る保健体育科の評価の設定」とし、主体的、対話的で深い学びを実現するための指導方法及び教材開発を行った。

2 研究構想図



※本研究における「生徒の学習改善」…生徒が授業の目標を修正したり、新たな目標を設定したりすること。

Ⅱ 研究内容

1 ゲームの様相について

本研究では、球技「ネット型（バレーボール）」の特性である「個人やチームの能力に応じた作戦を立て、集団対集団で勝敗を競い合うこと」の楽しさを味わわせるために、ラリーが続けられるようなゲームの様相を考えることにした。具体的には、プレイ上の制限を①キャッチ→キャッチ→はじく、②キャッチ→はじく→はじく、③はじく→キャッチ→はじく、④はじく→はじく→はじくの四つの段階に分けてスモールステップで実践する形式を設定した。

ゲームの様相については、ルールを変えるタイミングがとても大切である。例えば、ラリーが続きすぎるときに次の段階に進む、ラリーが続かないときには1段階下げるなど、生徒の実態に応じてゲームの内容を工夫するようにする。

以下に各段階の攻守やねらいについて示すことにした。

「①キャッチ→キャッチ→はじく」の段階

第1・2学年では、ラリーを続けることを重視する。また、プレイ上の制限については、ボールのキャッチを「あり」としたことで、レシーブやトスなどのボール操作が容易になることをねらいとした。このことで、味方が操作しやすい位置にボールをつなぎやすくなり、相手の空いた場所をめぐる攻防を展開するラリーの継続ができるようにする。

「②キャッチ→はじく→はじく」の段階

この段階では新たなボール操作「オーバーハンドパス」の技能を学ぶ。バレーボールの基本的な技術の一つであり、特に「味方が操作しやすい位置にボールをつなぐための技術」である。ボールをはじく時にオーバーハンドパスを使い、スパイクにつなげるようにする（ルールとしては、3回目でも可能である）。スパイクが打ちやすい高さ・距離・タイミングでボールを上げることをねらいとし、ゲームで発揮できるようにする。

③はじく→キャッチ→はじくの段階

第3学年では、新たなボール操作「アンダーハンドパス」の技能を学ぶ。これまで1回目はキャッチだったが、ここで初めて「はじく」動きにすることでレシーブが必要となる。攻撃につなげるための次のプレイをしやすい高さや位置にボールを上げることをねらいとし、ゲームで発揮できるようにする。また、守備の「ブロック」の技能も加わる。チームの作戦に応じてネット付近でボールの侵入を防いだり、打ち返したりすることをねらいとし、一人もしくは二人同時に相手からのスパイクに合わせてブロックをする。

④はじく→はじく→はじくの段階

この段階では、ボール操作の全てが「はじく」段階となる。これまで習得してきたオーバーハンドパスやアンダーハンドパス、ブロックなどを使い、よりスポーツに近いゲームを展開していく。その中でも攻撃側では三段攻撃で行うのはもちろんのこと、相手のブロックに対して「クイック」や「フェイント」による攻撃を工夫し、自己のチームや相手チームの特徴を踏まえながら一連の流れで攻撃を組み立てるなど、相手側コートの中をめぐりながらの攻防を展開できるようにする。

このように、ゲームの様相を4段階に分け、第1・2学年で学んだことに加え、第3学年ではその単元の特性や魅力を一層味わい、自主的な学習を促すための知識を効果的に理解できるように工夫することが大切である。「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の内容をバランスよく学習できるようにし、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行っていく。3年間のゲームの様相について次に示すこととした。

< 3年間の球技「ネット型（バレーボール）」のゲームの様相について >

※プレイ上の制限については、ポイントとなるフォントをゴシック体で示してある。

学 年	重視 すべき点	時数	プレイ上 の制限	ボール操作		ねらい
第 1 ・ 2 学 年	・ラリーを 続けること ・ボールや 用具の操 作と定位 位置に戻 るなどの動 きによっ て空いた 場所をめ ぐる攻防 を展開す ること	1 ～ 3	キャッチ →キャッチ →はじく	攻 撃	構え、 サービス、 スパイク、 フェイント	・ 3回でボールを返す ・ ラリーを続ける ・ 味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・ 相手側のコートの空いた場所にボールを返す ・ サービスではボールの中心付近で捉える ・ テイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込む ・ フェイントによる攻撃を行う
				守 備	構え	・ ボールを受ける前の身体の構え方 ・ 相手の打球に備えた準備姿勢をとること ・ プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻ること
		4 ～ 12	キャッチ →はじく →はじく	攻 撃	構え、 サービス、 スパイク、 フェイント、 トス	・ 3回でボールを返す ・ ラリーを続ける ・ 相手側のコートの空いた場所にボールを返す ・ 味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・ ボールを打った後、ボールや相手に正対すること ・ サービスではボールの中心付近で捉える ・ テイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込む ・ フェイントによる攻撃を行う
				守 備	構え、 オーバーハ ンドパス	・ ボールを受ける前の身体の構え方 ・ 相手の打球に備えた準備姿勢をとること ・ プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻ること ・ 味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・ ボールを受けた後、ボールや相手に正対すること

第3学年	・仲間と連携した「拾う、つなぐ、打つ」などの一連の流れで攻撃を組み立てる ・相手側のコートの空いた場所をめぐる攻防を展開すること	1 ～ 4	はじく →キャッチ →はじく	攻 撃	構え、 サービス、 スパイク、 フェイント、 トス、 クイック	・3回でボールを返す ・味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・攻撃につなげるための次のプレイをしやすい高さや位置にボールを上げること（トス） ・ボールを相手側のコートの空いた場所やねらった場所に打ち返すこと ・三段攻撃による攻撃を行う ・クイックやフェイントによる攻撃を行う
				守 備	構え、 アンダーハンドパス、 レシーブ、 ブロック	・味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・ラリーの中で、味方の動きに合わせてコート上の空いている場所をカバーすること ・ネット付近でボールの侵入を防いだり、打ち返したりすること（ブロック）
		5 ～ 10	はじく →はじく →はじく	攻 撃	構え、 サービス、 スパイク、 トス、 クイック、 フェイント	・3回でボールを返す ・味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・攻撃につなげるための次のプレイをしやすい高さや位置にボールを上げること（トス） ・ボールを相手側のコートの空いた場所やねらった場所に打ち返すこと ・三段攻撃による攻撃を行う。 ・クイックやフェイントによる攻撃を行う。 ・ポジションの役割に応じて、拾ったりつないだり打ち返したりすること
				守 備	構え、 オーバーハンドパス、 アンダーハンドパス、 レシーブ、 ブロック	・ボールを受ける前の身体の構え方 ・相手の打球に備えた準備姿勢をとること ・味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ ・ボールを受けた後、ボールや相手に正対すること ・ネット付近でボールの侵入を防いだり、打ち返したりすること（ブロック） ・プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻ること ・ポジションの役割に応じて、拾ったりつないだり打ち返したりすること ・連携プレイのための基本的なフォーメーションに応じた位置に動くこと

2 学習資料について

(1) 学習資料の作成と活用

生徒に明確な学習内容を示すだけでなく、「生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために学習資料は重要であり、保健体育における学習評価の設定や方法、授業での振り返りを充実させるなどの必要がある。

その上で、教師は評価のための評価に終始することなく、生徒のよさや進捗状況等を積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、生徒自身が目標や課題をもって学習を進められるような評価を行うことが大切である。

また、生徒がめあてをもって授業に取り組み、振り返りの活動を行うなど、生徒の学習を充実させることは、教師の指導改善を図ることにつながると捉えた。

具体的には、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の学習内容について、具体的な視点を示した学習資料を作成することにした。

以上のことを踏まえ、本研究では、学習資料を作成することにより、

- 生徒に対して、具体的な学習内容や観点を示すことができる
- 生徒が振り返り等で自己評価や相互評価にも生かすことができる
- 生徒が目標をもつことができる
- 生徒が目標を修正したり新たな目標をもったりするなど学習改善を図ることができるようになる

などの学習効果が表れると考えた。

学習資料の視点は、単元の評価規準を反映した。これは、学習指導要領解説保健体育編の例示が評価規準の内容を想定しているため、例示を活用するとともに、生徒に分かりやすい言葉に置き換えて示し、生徒自身が学習内容や評価規準を把握できるようにした。

○思考力、判断力、表現力等の例示

「学習指導要領解説保健体育編 球技[第1学年及び第2学年]」

- ・ 提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選ぶこと。



「学習資料」

- ・ 副教材に示されている練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選び、その理由を記入しましょう。

このことにより、生徒が教師と同じ視点を共有して学習に取り組むだけでなく、生徒が学習の見通しをもつことができ、主体的な学習に導くことができると考えた。また、生徒同士が同じ視点で学習に取り組むことにもなるため、教え合いなどの対話的な学びを促すことができると捉えた。

そして、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年1月21日中央教育審議会）において、「保健体育科の運動に関する領域では、公正や協力などを、育成する『態度』として学習指導要領に位置付けられているため、内容に対応した学習評価をすること」と示されているため、学習指導要領解説保健体育編の「学びに向かう力、人間性等」の例示に対応した学習内容を設定することにし、「主体的に取り組む態度」については、学習内容に対応した評価規準を示すことにした。

なお、単元の評価規準の作成に当たっては、第１・２学年の学習の２年間を見通して、評価規準を精選している。

(2) 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善

「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を行うに当たり、学習評価は重要な役割を担っている。「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」の鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になる。

「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、物事を捉える視点や考え方であり、各教科等を学ぶ上で本質的な意義の中核をなすものである。

体育分野における「見方・考え方」は、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と示されている。

したがって、単元を終えて、体育分野における「見方・考え方」が生徒の具体的な姿として表れているかを確認することにより、「主体的・対話的で深い学び」が実現されているかを判断することとした。

(3) 学習資料の例

学習資料の例を以下に示し、吹き出しは特徴を表している。

知 識	
1 球技（バレーボール）の <u>特性</u> を記入しましょう。	
2 オリンピック・パラリンピックの <u>主要な競技</u> を記入しましょう。	
【オリンピック競技種目】	【パラリンピック競技種目】
3 球技（バレーボール）の各種目において用いられる技術には <u>名称</u> があり、それらを <u>身に付けるためのポイント</u> を記入しましょう。	
【技術名】	【身に付けるためのポイント】 _____
4 対戦相手との競争において、技能の程度に応じた <u>作戦</u> や <u>戦術</u> を記入しましょう。	
【作戦】 _____	
【戦術】 _____	
5 球技（バレーボール）によって高まる <u>体力要素</u> を記入しましょう。	

主体的に取り組む態度				
記述式だけでなく、 選択式を設定				
1	一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めることができたか。	A	B	C
2	練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助することができたか。	A	B	C
〈記述の評価について〉				
A 常にできた B できた C あと一歩でできた				

思考力、判断力、表現力等

1 学習してきた動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えた内容を記入しましょう。

【仲間の課題や出来映え】

評価項目ごとに記入欄を設定

【つまずきを解消するための新たなアイディア】

分かりやすい言葉に置き換えて提示

2 副教材に示されている練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選び、その理由を記入しましょう。

【選んだ練習方法】

【選んだ理由】

【練習方法の新たなアイディア】

3 学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えた内容を記入しましょう。

【他の学習場面】

【仲間に伝えた内容】

4 練習やゲームの場面で、最善を尽くす、フェアなプレイなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝える内容を記入しましょう。

【他者に伝える内容】

【理由】

5 仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方で見付けたことを記入しましょう。

【見付けた内容】

【新たなアイディア】

6 仲間と協力する場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方で見付けたことを記入しましょう。

【見付けた内容】

【新たなアイディア】

7 体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝える内容を記入しましょう。

【仲間に伝える内容】

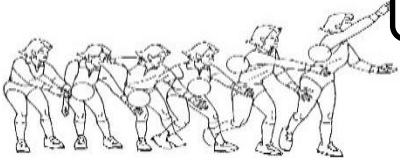
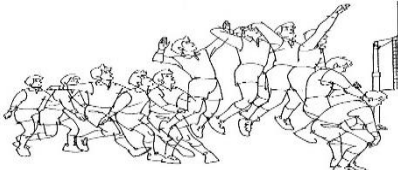
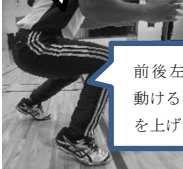
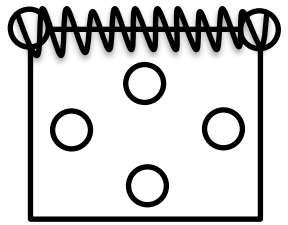
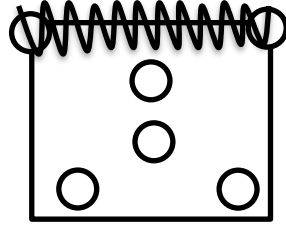
〈記述の評価について〉

- A 課題に対して解決策を具体的に記入されており、新たなアイディアを生み出そうとしている。
- B 課題に対して解決策を具体的に記入している。
- C 記入している。

技 能

仲間に確認をしてもらい、☐ に ABC を入れてもらおう！！

A：よくできた B：できた C：あと一歩

	技能	確認事項
	技能の種類ごとに分類	
1	アンダーハンドサービス	ボールの中心付近で捉えること。  ☐
アンダーハンドサービスの動作ポイント		生徒同士の確認欄
		
2	- オーバーハンドパス - スパイク など	- セッターが操作しやすい位置にボールをつなぐこと。 - アタッカーが操作しやすい位置にボールをつなぐこと。 - 相手側のコートの空いた場所（コートの四つ角）にボールを返すこと。 - テイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込むこと。
スパイクの動作ポイント		動きのポイントとなる画像とコメントの提示
		
3	姿勢など	相手の打球に備えた準備姿勢をとること。  ボールに正対し膝を曲げて前掲姿勢をとる。  両腕をそろえて肘を曲げ、前方に伸ばす。  前後左右に素早く動けるよう、かかとを上げる。
		プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻ること。  V字フォーメーション  逆V字フォーメーション
		ボールを打ったり受けたりした後、ボールや相手に正対すること。（スパイク以外の時は、常にボールをへそに向けている。）

Ⅲ 指導事例

1 単元名 第2学年 球技 ネット型「バレーボール」

2 単元の目標

- (1) ○ 勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開することができるようにする。
○ ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができるようにする。(知識及び技能)
- (2) ○ 攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。(思考力、判断力、表現力等)
- (3) ○ 一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすることができるようにする。
○ 仲間の学習を援助しようとすることができるようにする。(学びに向かう力、人間性等)

3 単元の評価規準

ア 知識・技能		イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。	⑥サービスでは、ボールの中心付近で捉えることができる。	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。	①一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めている。
②学校で行う球技には近代になって開発され、今日では、オリンピック・パラリンピック競技大会においても主要な競技として行われていることについて言ったり書き出したりしている。	⑦味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができる。	②提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいく。	②練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。
③球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。	⑧相手側のコートの空いた場所にボールを返すことができる。	③学習した安全上の留意点を、他の学習面に当てはめ、仲間に伝えている。	
④対戦相手との競争において、技能の程度に応じた作戦や戦術を選ぶことが有効であることについて、学習した具体例を挙げている。	⑨テイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込むことができる。	④練習やゲームの場所で、最善を尽くす、フェアなプレイなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えている。	
⑤球技は、それぞれの型や運動種目によって主として高まる体力要素が異なることについて、学習した具体例を挙げている。	⑩相手の打球に備えた準備姿勢をとることができる。	⑤仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。	
	⑪プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻るることができる。	⑥仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けている。	
	⑫ボールを打ったり、受けた後、ボールや相手に正対することができる。	⑦体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。	

4 指導と評価の計画（12 時間扱い）

時		1	2	3	4	5	6
ねらい		知識	技能	技能	技能	思考力、判断力、表現力等 学びに向かう力、人間性等	技能
		○ワークブックを活用し学習の進め方等を知り、見通しをもつ	○ラリーを続けることを重視し、ボールを操作する ○相手の空間に攻撃するゲームを行う	○スパイク・サービスを身に付けるためのポイントを理解し実践する	○仲間と共に協力してオーバーハンドパスを身に付けるためのポイントを理解し実践する	○仲間と共に協力してオーバーハンドパスを身に付けるための練習を実践する	○定位置に戻り攻撃に備えるなど、ボールを持たない時の動きを身に付ける
				・スパイク ・サービス	・オーバーハンドパス ・スパイク ・サービス	・オーバーハンドパス	・準備姿勢、動き ・定位置
			・3回キャッチ	・2回キャッチ	・2回キャッチ	・1回キャッチ	・1回キャッチ
学習の流れ	0	1 オリエンテーション ・単元の目標と特性 ・学習計画 ・役割分担 ・DVD 視聴 (バレーボール) (キャッチバレーボール) 知①: 特性について学習した具体例を挙げている 知②: 古代から近代今日のオリンピックバレーボールへの成り立ちを理解している 知③: 技能の名称や行い方について学習した具体例を挙げている 知⑤: 高まる体力要素を挙げている					
	10	2 本時の振り返り 3 次時の確認					
	20	1 ウォーミングアップ ・ストレッチ ・基本的な動き ・用具、コート準備 ・ボールを受ける ・ボールを投げる					
	30	2 キャッチバレー ・ラリーゲーム説明 ・ラリーゲーム (3回キャッチ)					
	40	3 チーム練習 技⑦: 味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ 技⑧: 相手側のコートの空いた場所にボールを返す 技⑩: 相手の打球に備えた準備姿勢をとっている 技⑪: プレイ開始時に各ポジションの定位置に戻る 技⑫: ボールや相手に正対する					
50		4 キャッチバレー ・ラリーゲーム (3回キャッチ)					
評価の重点	知識	①②③⑤ 学習資料					
	技能		⑧⑩⑫ 観察	⑦⑪ 観察	⑥⑨ 観察		⑩⑪⑫ 観察
	思・判・表					③ 学習資料	
	主体的態度					② 観察	

時		7(本時)	8	9	10	11	12
ねらい		思考力、判断力、表現力等	思考力、判断力、表現力等 学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等	知識 思考力、判断力、表現力等	思考力、判断力、表現力等	
		○個人技能を身に付けるためのポイントを理解し、仲間と協力して練習に取り組む	○個人技能を身に付けるためのポイントを理解し、仲間と協力して練習に取り組む	○リズムの良い攻撃に向けての課題を捉え改善する	○リズムの良い攻撃に向けての課題を捉え改善する	○リーグ戦を行う	
		・個人技能 ・準備姿勢、動き ・定位置	・個人技能 ・準備姿勢、動き ・定位置	・3段攻撃 (制限の工夫)	・3段攻撃 (制限の工夫)		
		・1回キャッチ	・1回キャッチ	・1回1秒キャッチ	・1回1秒キャッチ	・ルールの工夫	
学習の流れ	0	・用具準備 ・挨拶 ・健康、安全チェック ・本時の学習の見通し					
	10	1 ウォーミングアップ ・ストレッチ ・基本的な動き 2 ゲーム① (1回目キャッチ) (2回目はじく) (3回目はじく) 思①:動きのポイントやつまずきの事例を参考に仲間の課題や出来映えを伝える ・観察チームによる助言・記録	1 ウォーミングアップ ・ストレッチ ・基本的な動き 2 ゲーム① (1回目キャッチ) (2回目はじく) (3回目はじく) 思②:提供された練習方法から自己やチームの課題に応じた練習方法を選ぶ	1 ウォーミングアップ ・ストレッチ ・基本的な動き 2 ボール操作の確認	1 ウォーミングアップ ・ストレッチ ・基本的な動き 2 ボール操作の確認	1 ウォーミングアップ ・ストレッチ ・基本的な動き 2 チームの課題を解決する練習	
	20	3 グループ練習	3 グループ練習 自チームによる技能確認 学①:違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとする	3 グループ練習 思④:練習やゲームの場面で最善を尽くすフェアプレーなどの良い点を見付け伝える	4 作戦会議 思⑤:仲間と協力する場面で分担した役割に応じた活動の仕方を見付ける 知④:作戦や戦術を選び試合の行い方について学習した具体例を挙げている	4 リズムやテンポに関するチームの課題を解決する練習 (第11時) 思⑥:仲間と話し合う場で提示された参加の仕方に当てはめチームへの関わりを見付ける 思⑦:体力や技能の程度性別等の違いを踏まえて仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け仲間に伝える	
	30	4 ゲーム② (1回目キャッチ) (2回目はじく) (3回目はじく)	4 ゲーム② (1回目キャッチ) (2回目はじく) (3回目はじく)	4 ゲーム① (1回目キャッチ) (2回目はじく) (3回目はじく)	5 ゲーム② (1回目キャッチ) (2回目はじく) (3回目はじく)	5 ゲーム② (制限の工夫) (リズムやテンポを意識する)	
	40	・整理運動 ・片付け ・本時の振り返り ・次時の連絡 ・挨拶					
	50						
評価の重点	知識				④ 学習資料		※実態に応じて 評価規準を設定
	技能						
	思・判・表	① 学習資料・観察	② 学習資料・観察	④ 学習資料・観察	⑤ 学習資料	⑥⑦ 学習資料	
	主体的態度		① 学習資料				

5 本時（全 12 時間中の 7 時間目）

(1) 本時の目標（※◎は目標の重点）

ア ○相手の打球に備えた準備姿勢をとり、各ポジションの定位置に戻ったりボールや相手に正対したりすることで自分のコートに空いた場所を作らないようにすることができる。

（知識及び技能）

イ ◎提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。

（思考力・判断力・表現力等）

ウ ○練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。

（学びに向かう力、人間性等）

(2) 本時の展開

	○学習内容 ・学習活動	・指導上の留意点、配慮事項	評価規準（評価方法）
導入	○ 準備運動を行う。 ○ 本時の流れを理解する。	・主運動につながる動きが意識できるようにする。 ・本時のねらいと内容を確認する。	
展開	ゲームに生かす基礎練習 ○チームの作戦を確認し、前時の振り返りを生かして、サービス、スパイク、オーバーハンドパスなどのボール操作の練習に取り組む。 ゲーム&観察① ○4対4のゲームを行うチームと観察をするチームに分かれてゲームを行う。 ・空いた空間を作らないように定位置に戻り次の攻撃に備える動きなどを身に付ける。 ○観察したチームは、観察した生徒の動きについて、出来映えやアドバイスを伝える。 ○ゲームを行うチームと観察をするチームを交代して、ゲームを行う グループ練習 ○チームの作戦を確認し、個人やチームの課題解決に向けた練習に取り組む。 ・観察してくれた仲間に聞いた課題をチームで共有し、副読本の例を参考に課題解決のための練習を行う。 ゲーム&観察② ○ゲーム&観察①と同じ流れで授業を行う。 ・グループ練習を生かしゲームに取り組む。 学習資料の記入 ・学習資料の「思考力、判断力、表現力等①」を記入する。	・前時の振り返りを生かし、副読本を活用して、自己の課題に合った練習を選択するとともに、技能の確認をしながら練習に取り組むようにする。 ・観察するチームに対して、観察した生徒が相手の打球に備えた準備姿勢をとり、各ポジションの定位置に戻ったりボールや相手に正対したりできていたかの実態を伝えた後にアドバイスを伝えるように助言する。 ・チームの作戦を確認し、ゲーム&観察①で友達から助言を受けたことについて、これまでの学習で提供された練習方法から選んで練習に取り組むことができるように助言する。 ・ゲーム①と同じ流れでゲーム&観察を行う時間を設定する。 ・観察した仲間に対して出来映えやアドバイス、新たなアイデアが伝えられたかを振り返るように助言する。	イ-① 【思考・判断・表現】 (観察) イ-① 【思考・判断・表現】 (観察) イ-① 【思考・判断・表現】 (学習資料)
まとめ	○ 片付けや整理運動を行う。 ○ 健康観察や挨拶を行う。	・本時のまとめと次時の確認を行う。	

IV 研究のまとめ

○ 研究の成果と今度の課題

本研究では、「球技「ネット型（バレーボール）」の授業において、生徒が運動の楽しさや喜びを味わうとともに、生徒自身が自ら学習を振り返り、次の学習に向かうことができるような学習資料を作成すれば、自己や仲間の課題に応じて学習場面で活用することができ、生徒が学習改善を図ることができるだろう。」との研究仮説に基づき研究を進めた。その結果、以下のような成果と課題が明らかになった。

1 成果

ア ゲームの様相について

- ・ ボールを「キャッチ」する場面を取り入れたことで、味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができるようになり、球技「ネット型（バレーボール）」の特性である相手の空いた場所をめぐる攻防につながられた。
- ・ プレイ上の制限を四つの段階に分けて設定することで、技能の習得状況や運動経験など生徒の実態に応じた授業展開を行うことができた。このことにより、自分自身やチームの課題発見が容易になるとともに、作戦を立てやすくなり、チームで目標を共有することができた。

イ 学習資料の作成と活用について

- ・ 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の学習内容を具体的に示した学習資料を作成することは、教師と生徒が同じ視点を共有することができ、学習内容を確認することができるようになるだけでなく、生徒が学習の見通しをもって取り組むことができた。
- ・ 単元の評価規準を生徒の学習資料に反映し、生徒に分かりやすく示すことで、生徒が学習内容や評価規準を把握できるようになり、生徒が自己評価を次時以降の学習に生かすことできた。
- ・ 学習資料に技能のポイントとなる箇所を図、写真やコメントを付けるとともに、チェック欄を設けたことにより、生徒同士が互いに技能を確認し合うことができるようになることで教え合いが活発になり、対話的な学びを促すことができた。
- ・ 「1 ゲーム目ではアタックのタイミングがうまくいかなかったが、友達と話し合い、2 ゲーム目には、なるべく低いボールをトスすることで多くの得点を取るプレイにつながった。」など、生徒が学習資料に書くことにより、習得した知識や技能の活用の仕方や課題解決に向けて話し合った内容や考えたことをチームの作戦や戦術につなげることができた。

2 課題

- ・ 生徒の学習改善を図るための学習資料の作成について、第3学年の単元や球技以外の領域について開発研究を行うこと。
- ・ 「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善」と「学習評価」との関連を図った実践例を示すこと。

中学校外国語研究開発委員会

目 次

I	研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・	3
III	成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・	15

＜中学校外国語研究開発委員会＞

研究主題

互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる生徒の育成 ～目的や場面、状況等を重視した言語活動を通して～

I 研究の目的

中学校学習指導要領解説外国語編（平成 29 年 7 月）では、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実が図られた。生徒が学ぶ過程の中で、知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識・技能を確かなものとし、学習内容の理解を深めるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら外国語を身に付けていく指導が求められている。

同時に、これまでの指導に対し、以下のような課題が指摘されている。

- 文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、特に「話すこと」「書くこと」などの言語活動（実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動）が適切に行われていない。
- 読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていない。
- 生徒の英語力の面では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することに課題がある。
さらに、本委員会の協議において、委員の所属校等での以下のような課題が挙げられた。
- 生徒は、新出文法を提示するための目標文のみでは、実際に英語を使用する場面が十分にイメージできていない。
- 生徒が楽しいと感じる話しやすいテーマを与えても、途中からやり取りが日本語になってしまうなど、意欲的に言語活動に取り組んでいるが、既習事項を活用して自分の言葉で伝えていくことに課題がある。

生徒の英語力については、「英語教育実施状況調査」（文部科学省 平成 30 年）によると、東京都における CEFR A1 レベル相当以上を達成している中学生の割合は 53.1%と、国の目標値である 50%は超えているが、約半数近くの生徒が CEFR A1 レベル相当を達成していない。

また、複数の領域を統合した言語活動については、「平成 29 年度英語教育改善のための英語力調査結果（中学 3 年生・高校 3 年生）の概要」（文部科学省 平成 30 年 4 月）によると「統合的な言語活動を行っている学校の方が、『話すこと』『書くこと』の得点が高いだけでなく、『聞くこと』『読むこと』の得点も高い。」という結果が出ている。さらに、「平成 31 年東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査報告書」（東京都教育委員会 令和元年 6 月）において、複数の領域を統合した学習をより多く取り入れ、学習した表現方法の定着を図る指導の充実を求めている。

これまで、文法・語彙等の知識を身に付けるための指導は盛んに行われてきており、実践

例は豊富である。しかし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現させる指導となると実践例は少ない。

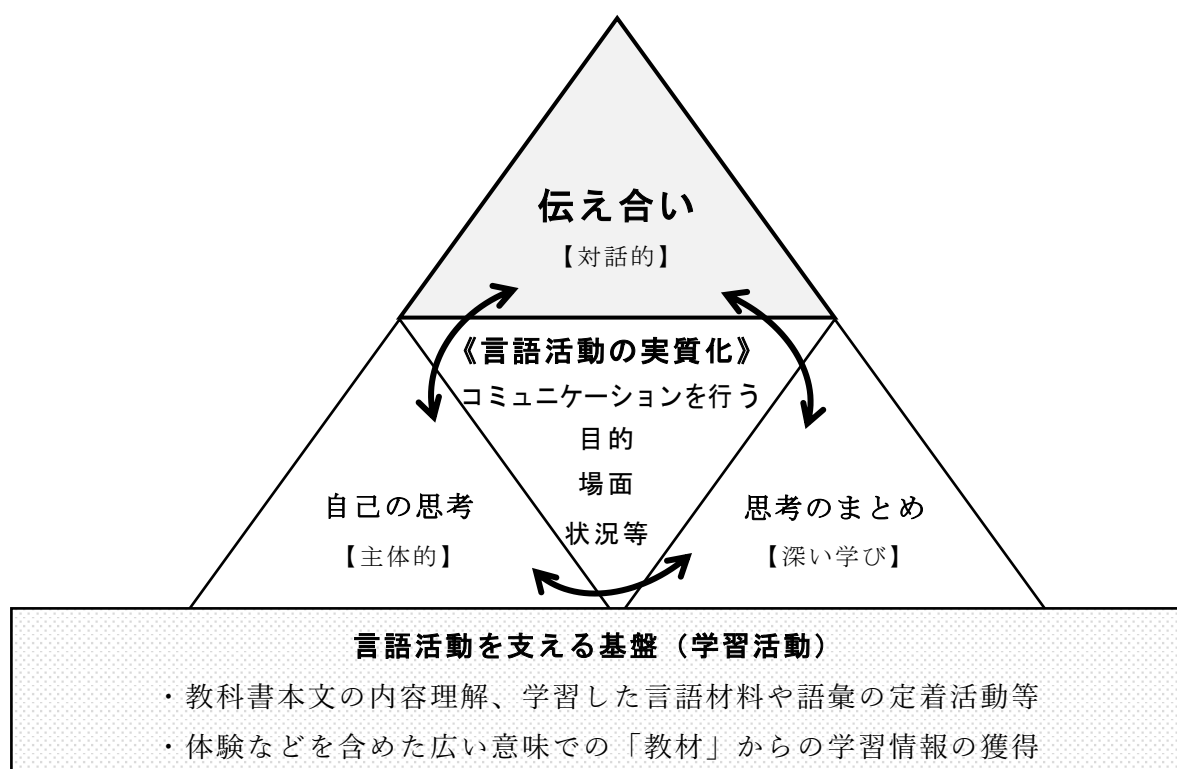
そこで、図1「言語活動の実質化のための枠組み」に示したように、本研究では教科書本文の内容理解や学習した言語材料・語彙の定着活動（文法・語彙等の知識を身に付けるための指導）、体験などを含めた広い意味での「教材」からの学習情報の獲得を「言語活動を支える基盤」として整理した。そして、この「言語活動を支える基盤」を踏まえ、教科書本文で「聞いたり」「読んだり」して学んだ内容や、学校の生活、住んでいる地域での生徒の体験等、生徒が外国語の使用場面を想起できる「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定し、生徒に繰り返し思考・判断・表現させることで互いの考えや気持ちを伝え合う（「話したり」「書いたり」する）ことのできる生徒を育成していくこととした。

以上のことから、本研究の主題を「互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる生徒の育成～目的や場面、状況等を重視した言語活動を通して～」と設定した。

II 研究の方法

1 研究の視点

本研究では、生徒の実態に応じ、生徒が外国語の使用場面を想起できる「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定することを通じて互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる生徒の育成を目指す。東京都教職員研修センター紀要第11号「言語活動の充実に関する研究」（東京都教職員研修センター 平成23年）における先行研究、研究開発委員会の全教科等を通じた共通テーマである「主体的・対話的で深い学びを実現するための指導方法および教材開発」を踏まえ枠組みを以下のように整理した。



（図1：言語活動の実質化のための枠組み）

中学校学習指導要領解説外国語編（平成 29 年 7 月）によると、中学校外国語において、「言語活動の実質化」とは、生徒が一層幅広いコミュニケーションを図ることができるようにするため、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視するとともに、具体的な課題等を設定するなどして学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を充実させることと定義されている。本研究では、中学校外国語における「言語活動の実質化」を踏まえ、生徒が一層幅広いコミュニケーションを図ることができるように研究を行った。

2 研究の仮説

生徒の実態に応じ、生徒が外国語の使用場面を想起できる「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定すれば、互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる生徒が育成できるだろう。

3 研究の手順

(1) 基礎研究

中学校学習指導要領解説外国語編（平成 29 年 7 月）に示されている内容や「平成 29 年度英語教育改善のための英語力調査 事業報告」（文部科学省 平成 30 年 4 月）、「平成 31 年東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査報告書」（東京都教育委員会 令和元年 6 月）等を参考に委員の所属校等の課題に照らし、研究の方向性を定めるとともに、東京都教職員研修センター紀要第 11 号「言語活動の充実に関する研究」（東京都教職員研修センター 平成 23 年）を参考に「言語活動の実質化のための枠組み」として整理した。

(2) 授業の実践

基礎研究の結果を踏まえ、4 回の検証授業を行った。

授業 1	第 2 学年	地域の素材（東京都）「花火」(<i>Welcome to Tokyo basic Topic 4 fireworks</i>)を活用した事例
授業 2	第 3 学年	教科書で扱った内容を活用し、外国文化の理解を深めた事例
授業 3	第 1 学年	地域の素材「新撰組」を活用した事例
授業 4	第 2 学年	教科書で扱った内容と他教科等の学び（職場体験）を活用した事例

その際に、次ページ（「検証授業の流れ」）のように「図 1：言語活動の実質化のための枠組み」を授業へ落とし込み、共通した視点で、授業を実施した。

(3) 研究の成果と課題の整理

研究の成果と課題を整理し、本指導資料としてまとめ、指導資料説明会において、普及・啓発を行った。

(4) 検証授業の流れ

※＜ ＞内は、「図1：言語活動の実質化のための枠組み」との関連

1 教科書等を活用した指導を行うとともに、既習事項を活用させる帯活動等を行い、土台となる英語力を付けさせる。＜「言語活動を支える基盤」＞

2 単元で扱っているターゲットとする語彙や表現等、生徒の体験等（学校の教育活動や地域の素材など）＜「言語活動を支える基盤」＞を踏まえ、生徒が互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合いたくなる題材を見付け、課題として設定する。＜「言語活動の実質化」＞に向けた＜「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」＞を設定＞

3 教師が題材に関する生徒とのやり取りを行いながら題材を導入し＜「伝え合い」＞、自己の発信内容を考えさせる。＜「自己の思考」＞

4 発信内容構築や、発信するための表現を考えるための話し合い＜「伝え合い」＞を通して自己の発信内容を深めさせる。＜「自己の思考」＞

5 互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を行う。
＜「伝え合い」＞＜「自己の思考」＞＜「思考のまとめ」＞

6 生徒が表現できなかったものにフィードバックを与える。＜「思考のまとめ」＞

7 授業を振り返る。＜「思考のまとめ」＞＜「自己の思考」＞

4 研究構想図

中学校学習指導要領解説外国語編（平成 29 年 7 月）において求められている内容

- 「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にした指導
- 生徒が学ぶ過程の中で、知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識・技能を確かなものとし、学習内容の理解を深めるなど、資質・能力を相互に関係し合いながら外国語を身に付けていく指導

《現状と課題》

新学習指導要領解説外国語編に挙げられる課題

- 文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、言語活動が適切に行われていない。
- 複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていない。
- 習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することに課題がある。

委員の所属校等における生徒の実態

- 生徒は新出文法を提示するための目標文のみでは実際に英語を使用する場面が十分にイメージできていない。
- 生徒が楽しいと感じる話しやすいテーマを与えても、途中からやり取りが日本語になってしまうなど、意欲的に言語活動に取り組んでいるが、既習事項を活用して自分の言葉で伝えていくことに課題がある。

調査から見られる東京都の生徒の実態

「英語教育実施状況調査」（文部科学省 平成 30 年）によると、東京都における CEFR A1 レベル相当以上を達成している中学生の割合は 53.1%と国の目標値である 50%は超えているが、半数近くの生徒が CEFR A1 レベル相当を達成していない。

《研究主題》

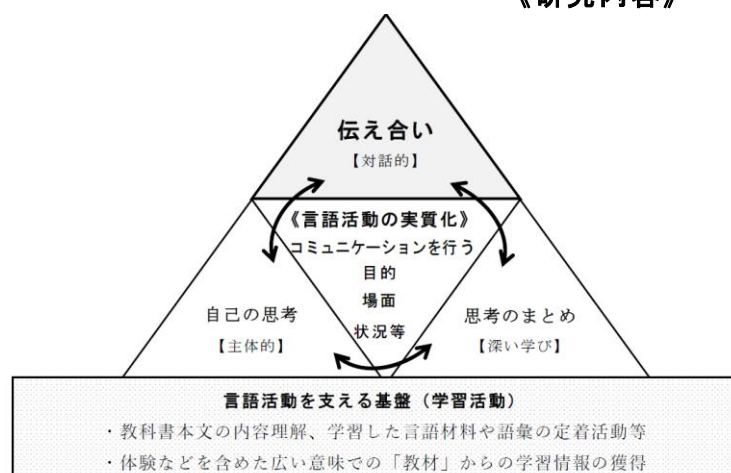
互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる生徒の育成

～目的や場面、状況等を重視した言語活動を通して～

《研究仮説》

生徒の実態に応じ、生徒が外国語の使用場面を想起できる「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定すれば、互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる生徒が育成できるだろう。

《研究内容》



（図 1：言語活動の実質化のための枠組み）

生徒の実態（「言語活動を支える基盤」）に応じた、生徒が外国語の使用場面を想起できる「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定することにより、生徒が互いの考えや気持ちを伝え合うことのできる指導を工夫する。

5 検証授業①

(1) 使用教材

ア 教科書・単元名

Topic 4 Fireworks *Welcome to Tokyo Basic* (東京都教育委員会)

イ 題材観

Welcome to Tokyo Basic は留学生のロビンが日本のホストファミリーと過ごしながら、日本や東京の良さを知っていくストーリーで構成されている。付属の DVD 資料を用いて、日本の伝統文化や東京の様々な場所を留学生の視点を通し英語で知ることができるため、日本・東京を再発見できる教材である。*Welcome to Tokyo Basic* で学んだ伝統文化（本時では花火）を、自分たちが住む地域で開催される花火大会に関連付けて、同じ地域に住む外国人の方へ広く花火大会を紹介する（「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」の設定）ポスター作りを行った。（「言語活動の実質化」）

(2) 単元の指導目標・計画

ア 単元指導目標

- (ア) 日本の伝統文化（花火）について理解する。
- (イ) 隅田川の花火とその花火を作る会社の記事について、主体的かつグループで協力しながら読むことができる。
- (ウ) 相手に提案する表現（Shall I～? / Shall we～? / Would you～?）を理解し、使うことができる。
- (エ) 地域に住む外国人に向けて、花火大会を紹介するポスターを作ることができる。

イ 単元指導計画

第 1 時 Topic 4 Fireworks 相手に提案する時の言い方

第 2 時 Topic 4 Fireworks TOKYO INFORMATION 「歴史ある花火会社」の内容理解
(検証授業実施)

第 3 時 花火大会 ポスター作成（下書き）

第 4 時 花火大会 ポスター作成（清書）

※ *Welcome to Tokyo Basic* 全 12 トピックを、教科書の配列等に合わせ 3 年間の指導計画の中に位置付けている。

Topic 1 Table Manners (第 3 学年 6 月)	Topic 2 Bentos (第 1 学年 10 月)	Topic 3 The Bus (第 2 学年 4 月)
Topic 4 Fireworks (第 2 学年 7 月)	Topic 5 Judo (第 1 学年 11 月)	Topic 6 Traditional Theaters (第 3 学年 7 月)
Topic 7 Cleaning Up (第 2 学年 11 月)	Topic 8 Mt. Takao (第 1 学年 2 月)	Topic 9 Volunteer Fire Corps (第 2 学年 3 月)
Topic 10 Robots (第 2 学年 12 月)	Topic 11 Eco Cars (第 3 学年 12 月)	Topic 12 Electronics (第 3 学年 5 月)

(3) 指導上の工夫

コミュニケーションが必然となる読み方を実践した。TOKYO INFORMATION の「歴

史ある花火会社」の記事を三つに分割し、3人の生徒がそれぞれの分担箇所を読み、情報を集めてくることで、教材とした花火会社の記事全体の理解が図れる読ませ方（ジグソー法）を利用した（手順の詳細は(4)本時のねらい イ本時の指導計画 (ウ)展開 を参照）。生徒が各自の分担箇所に責任をもって読むことで、「自分のために読む」ことに加え「相手のために読む」意識も芽生えるようになった。また、日本を再発見する記事を読むことで、花火の美しさとはかなさ、日本の良き伝統文化を知り、それを外国の人に伝えようとする活動（ポスター作成）へつなげた。作成したポスターは生徒同士で鑑賞し相互評価を行わせた。高い評価を得たポスターは、市内の「国際交流協会」に掲示したり同協会のホームページで紹介したりしてもらった。多くの外国人にポスターを見てもらい花火大会の魅力を伝えることができた。

(4) 本時のねらい・指導計画

ア 本時のねらい

- (ア) 隅田川の花火の歴史と花火を作る会社について概要を捉えることができる。
- (イ) 読むことに主体的に関わり、かつ仲間と協力して読むことで、題材を深く理解する。

イ 本時の指導計画

- (ア) 帯活動 英語の歌、BINGO、音読テストに向けての練習
- (イ) 導入 前時の復習（相手に提案する表現（Shall I～? / Shall we～?等）
- (ウ) 展開 伝統的な東京の花火工場についての記事の概要を捉える。

- ※読み方の手順
- ① 記事を3分割にし、教室の3か所に貼り出しておく。
 - ② 3人グループになり、生徒は自分の担当箇所を読みに行く。
 - ③ グループに戻り、担当箇所を書いてあったことを共有する。
 - ④ 教師から問題1を受け取りグループで解く（3人の情報が集まらないと解けない問題になっている）。
 - ⑤ 問題1が解けたら教師から問題2を受け取る。問題8までである。

- (エ) まとめ 問題の答え合わせ、DVD視聴

ウ 評価の観点

- (ア) 花火の記事について、主体的に読むことができた。
- (イ) 花火の魅力や情報を伝えることができた。

(5) 成果と課題

ア 成果

単元を通して、地域に住む外国人へ目を向けようとする意識が高まった。特に今年度は学区内の東京スタジアムでラグビーワールドカップが行われたことで、学校の周辺や最寄り駅にも外国人を見かけることも多く、目的意識をもって課題に取り組むことができた。また、グループに伝えるために、主体的に読むことで、読むことが楽しいと感じる生徒が増えてきた。

イ 課題

ジグソー法は、コミュニケーションの必然性が生まれる一方で、自分の情報を伝えようとするあまり、日本語でのやり取りになってしまう可能性が高い。英語でのやり取りが自然にできる工夫が必要である。

6 検証授業②

(1) 使用教材

ア 教科書・単元名

Lesson 3 E-mails from Alaska and India *TOTAL ENGLISH 3* (学校図書)

イ 題材観

教科書の登場人物がインドの友人宅を訪れ、インドの人々はカレーを右手の素手で食べる習慣を知り、文化を理解することの重要性に気付かされたというあらすじの単元である。研究主題に基づき、教科書の単元において文化を理解することの大切さを学んだこと（「言語活動を支える基盤」）を生かし、世界にはさまざまな文化や習慣があることを生徒が知ることを目的に、自分の興味ある国の文化や習慣について学級で発表することを「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」として設定し、互いの考えや気持ちを伝え合う活動（「言語活動の実質化」）を行った。

(2) 単元の指導目標・計画

ア 単元指導目標

- (ア) 登場人物の体験した内容を理解する。
- (イ) 日本と異なる世界の文化や習慣について調べた内容をスライドにまとめ、英語で発表する活動を通じて、文化の理解を深めるとともに表現力を高める。
- (ウ) 現在完了（継続・経験）の働きを理解し、表現することができる。

イ 単元指導計画

- 第1時 現在完了（継続）の導入・言語活動
- 第2時 現在完了（経験）の導入・言語活動
- 第3時～第6時 Lesson 3 3A～3D 内容理解・音読
- 第7時 「世界の文化」発表資料準備－1（検証授業実施）
- 第8時 「世界の文化」発表資料準備－2
- 第9時 「世界の文化」プレゼンテーション

(3) 指導上の工夫

言語面のみならず、発表の態度や発表内容についての指導の充実を図るため、聞き手によりよく理解してもらうにはどうしたらよいか考えられるように、こうした点を発表活動の評価の観点として生徒に示し、考えさせる機会を設けた。発表の内容については、誰でも知っている文化・習慣でなく、学級の仲間が知らないようなトピックを選択するよう助言した。また、帯活動として継続的に行っている2分間チャットでは、ペアで話した後、その内容を他の人に報告する活動を行い、既習事項を繰り返し様々な形で活用させることで「言語活動を支える基盤」を確かなものとするようにした。

(4) 本時のねらい・指導計画

ア 本時のねらい

- (ア) 学級の仲間が知らない外国の文化・習慣を調べる。
- (イ) 自分が調べた外国の文化・習慣について、どのように発表したら聞き手に分かりやすいか学ぶ。

イ 本時の指導計画

- (ア) 帯活動 2 分間チャット（ペアで話した後、その内容を他の人に報告する。）
- (イ) 導入 世界の文化クイズ（教師が話す文化・習慣をもつ国を生徒が当てる。）
- (ウ) 展開 発表資料を作成しながら、よりよく発表内容を理解してもらうにはどうしたらよいか話し合う。
- (エ) まとめ ワークシートを基に振り返り（本時の反省・次時の目標設定）

ウ 発表活動評価の観点

(ア)～(ウ)は「表現の能力」、(エ)は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」に含む。

【世界の様々な文化・習慣について聞き手を意識して発表することができる】

- (ア) 発表の流暢さ 適切な速さで、必要に応じて間を入れながら話す。
- (イ) 発表の内容 世界の文化紹介に即したトピックを選択し、聞き手が知らない内容を、聞き手に質問を投げ掛けながら話す。
- (ウ) 言語の適切さ 聞き手が理解できる英語を使って話す。
- (エ) 発表の態度 聞き手に体を向けて、アイ・コンタクトを取りながら話す。

(5) 成果と課題

ア 成果

互いの考えや気持ちを伝え合うという点では、評価の観点を示したことや教師が世界の文化クイズを行い、モデルとなる内容を示したことなどから、自分が興味をもつ国についてただ伝えるのではなく、学級の仲間が知らないようなトピックを選択したり、よりよく理解してもらうために、聞き手が理解できる単語を選んで使ったりするなど、聞き手を意識して発表を行う姿が見られた。

また、発表後、ワークシートで振り返りを行ったところ、文化・習慣についての生徒の気づきとして、以下のような記述が見られた。

- ・日本ではあり得ないことが、外国では大切だったりするので面白い。
- ・文化となるには面白い発想や歴史的背景があることを知った。
- ・文化を理解することで、自分に合った生活や考えを見付けることもできる。
- ・何事も否定するのではなく、興味をもつことが大切。
- ・自分の知っていることが全て正しいというわけではない。
- ・日本の固定観念にとらわれず、日本が一番正しいと思わない考えも必要だと思う。

単元で目標とした文化に対する理解を深め、外国の文化や習慣について、寛容な姿勢をもつことの重要性を学んだことが分かる。外国の文化・習慣を知ることで日本文化への興味を抱いた生徒がいることも興味深い。

イ 課題

イ 本時の指導計画 (ウ) 展開の「発表資料を作成しながら、よりよく発表内容を理解してもらうにはどうしたらよいか話し合う」において、生徒の活動が日本語のみで進行するものになってしまった。生徒に態度・内容等日本語で話してよいところ、英語で発信するために英語表現について考えるところなどを明らかにし、活動が日本語の思考のみで終わらないように、指導の工夫・改善を図っていくことが必要である。

7 検証授業③

(1) 使用教材

ア 教科書・単元名

Lesson 5 Our New Friends *NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1*

(三省堂)

イ 題材観

教科書の登場人物がインドから転入し、学校の先生や部活動を紹介するというあらすじの単元である。研究主題に基づき、教科書の単元において学んだ第三者を紹介すること(「言語活動を支える基盤」)を生かし、地域の教材「新撰組」をテーマに、地域行事「新撰組まつり」の英語版ポスターを作成する。新撰組の人物をポスターで紹介することを「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」として設定し、どのような英語の表現で外国人観光客をひきつけるポスターが作成できるか考えることを通して、互いの考えを伝え合う活動(「言語活動の実質化」)を行った。

(2) 単元の指導目標・計画

ア 単元指導目標

- (ア) 学級の仲間、身近にいる人物、歴史上の人物など「人物」についての関心を高める。
- (イ) 人や場所についてのたずね方と **him/her** の用法を理解し、活用する。
- (ウ) 「人物」について考え、その考えを自ら話し、相手の話を聞き、まとめる。

イ 単元指導計画

第1時 Lesson 5 Get Part 1-1 who の導入

第2時 Lesson 5 Get Part 1-2 内容理解・音読・言語活動

第3時 Lesson 5 Get Part 2-1 人称代名詞の導入・内容理解・音読

第4時 Lesson 5 Get Part 2-2 新撰組の人物について伝える(検証授業実施)

第5時 Lesson 5 Get Part 3-1 when / where の導入・内容理解・音読

第6時 Lesson 5 Get Part 3-2 内容理解・音読

第7時 Lesson 5 まとめ 「新撰組まつり」ポスター作り

(3) 指導上の工夫

地域・教育委員会の協力の下、市内の新撰組スタンプラリーで実際に使われているイラストをスライドにして使用することなど、視覚教材を多く用いることで、より生徒が興味や関心をもつように工夫した。また、導入の場面や展開の人物についての情報を収集する活動では、既習事項を繰り返し活用させることで「言語活動を支える基盤」を確かなものとするようにした。

(4) 本時のねらい・指導計画

ア 本時のねらい

- (ア) 必要な情報を得て、それを互いに共有する。
- (イ) 興味・関心をもった新撰組の人物を選び、その理由を考え相手に伝えることができる。

イ 本時の指導計画

- (ア) 帯活動 歌

- (イ) 導入 クイズ（校内の場所のスライドを提示し、英語での名称を生徒が答える。）
- (ウ) 展開 1 グループのそれぞれの生徒が、指定された新撰組の人物の情報が書いてある掲示物（英文）がある場所に行き、情報を収集し、席に戻る。（検証授業①同様、ジグソー法を活用）
- (エ) 展開 2 収集してきた情報（英文）をグループの生徒がそれぞれ伝え合い、新撰組の人物についての情報を収集する（情報交換）。
- (オ) 展開 3 教師のオーラル・イントロダクションにより、地域行事「新撰組まつり」があり、そこでは新撰組の人物の仮装行列が行われることを共通理解する。その上で、「もしこの祭りに参加するのならこの 6 人のどの人物になって参加するか」を考え、ペアで意見交換をする。
- (カ) まとめ ワークシートを基に振り返り（本時の反省・次時の目標設定）

ウ 評価の観点

- (ア) 「人物」について興味をもって、聞いたりまとめたりしようとしていた。
- (イ) 「人物」について自ら話したり、相手の話を聞いたりしてより深めようとしていた。
- (ウ) 取り上げられた文章を読み取ることができた。

(5) 成果と課題

ア 成果

授業後、ワークシートで振り返りを行ったところ、生徒の気づきとして、以下のような記述が見られた。

- ・新撰組については小学校でも学習したが、英語を通して考えるのは面白かった。
- ・新撰組まつりには参加したことがないが、次回行ってみたい。
- ・授業内で新撰組まつりのポスターを実際に英語を使って書き、市内に貼られるのは楽しみだ。より多くの外国人観光客が来ればいいと思う。

単元で目標とした英語を通して「人物」についての関心を高め、理解を深めることが達成できたことが分かる。地域の素材「新撰組」を扱ったことでより親近感を抱き、学習に向かえた生徒が多くいたことも興味深い。

また、単元のまとめとして実際に市内に掲示してもらう英語版のポスターを作成することで、生徒の学習意欲が向上した。この授業を通して、英語を用いて作成した成果物が教室内、学校内にとどまらず、実際に地域で外国の方に向けた発信になったことの意味合いは大きい。地域の施設や教育委員会と連携し、つながりができた点も大きな成果である。

イ 課題

互いの情報交換をする際に、伝え合う活動ではなく、情報を書き写す活動になってしまった。また、「新撰組まつり」に関わる人物を 6 名挙げたが、その人物について伝え合うには時間と情報が足りなかった。人物を 3 名に絞り、その 3 名に焦点を当て、生徒がどのような英語で伝え合うか教師があらかじめ予想した上でその人物に対して伝え合うことができるようにするなど、指導の工夫・改善が必要である。

8 検証授業④

(1) 使用教材

ア 教科書・単元名

Lesson 6 My Dream *NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 2* (三省堂)

イ 題材観

本単元の題材は「職場体験プログラム」と「将来の夢」である。単元において自分の将来の夢や社会の将来像について考えたこと、職場体験学習での実際の経験や総合的な学習の時間でのキャリア教育など、他教科等での学習内容（「言語活動を支える基盤」）を積極的に活用し、AIやロボットによる労働の自動化や **Society 5.0** について自分の考えを伝え合うことを「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」として設定し、指導の効果を高めるようにした。

(2) 単元の指導目標・計画

ア 単元指導目標

- (ア) 「不定詞(名詞・副詞・形容詞用法)」を用いた文の構造を理解する。
- (イ) 「不定詞(名詞・副詞・形容詞用法)」を含む文を言ったり書いたりすることができる。
- (ウ) 自分や社会の将来像について、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うことができる。

イ 単元指導計画（10 時間扱い）

第 1 時～第 7 時 Lesson 6 の内容理解・音読練習・新出文法事項を用いた言語活動

第 8 時 本文や他教科での学びに関連させた言語活動（検証授業実施）

第 9 時 Lesson 6 のまとめ（新出文法事項や語彙の確認と復習／Story Retelling）

第 10 時 Oral Presentation (Story Retelling + “My Dream”)

(3) 指導上の工夫

本時における教師の題材（AI やロボットによる労働の自動化や **Society 5.0** について）の導入では、図や絵、写真、ビデオなどを活用して題材についての興味や関心を喚起するとともに、生徒が既に知っていることを思い出させ、思考の活性化を行った。その際、生徒が学習している内容と実際の社会との接点を見いだせるように、オーセンティックな素材を活用するとともに既習事項をできるだけ多く使用し、繰り返しや言い換えを多用して生徒の理解を促進した。また、言語活動で用いるワークシートは、新知識や詳細情報の整理・分析等がスムーズに行えるように工夫した。

(4) 本時のねらい・指導計画

ア 本時のねらい

- (ア) 自分や社会の将来像について考え、理解を深める。
- (イ) 互いの考えや気持ちを英語で伝え合うことができる。

イ 本時の指導計画

- (ア) 帯活動 英語の歌、Last Sentence Dictation（教師の読む既習の教科書本文の最後に読まれた文を書きとる活動）
- (イ) 復習 前時までの内容について絵を使って生徒とやり取り
- (ウ) 導入 図や絵、写真、ビデオなどを活用して題材についての教師のプレゼンテーシ

ョン

- ・今後予想される社会の変化について、スライドを使いながら説明していく。
- ・特に AI やロボットによる労働の自動化や Society 5.0 について触れながら、興味や関心を喚起する。

(エ) 展開 ワークシートを用いて内容について深める活動

- ・ AI やロボット等による代替可能性が高い職業と低い職業とをリストを見ながら予想して分類する。
- ・ AI やロボットと人間、それぞれの強みを考える。
- ・ AI やロボットによる自動化が難しい職業の特徴や共通点を踏まえ、将来のために、自分たちにとって今後必要なスキルとやるべきことを考える。

(オ) まとめ 表現活動

- ・考えたことについて他の生徒と英語で意見を交換する。
- ・話したことをワークシートにまとめる。

ウ 評価の観点

- (ア) つなぎ言葉や知っている語句を活用して対話を継続させようとしている。
- (イ) 自分や社会の将来像について、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うことができる。

(5) 成果と課題

ア 成果

中学生の知的好奇心を刺激する題材で「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定して言語活動を行うことが学習へのモチベーションを上げることに繋がった。内容の学習と言語の学習が統合されることで、生徒は英語「を」学んでいるのではなく、英語「で」学んでいる感覚をもつことができていたからだと考える。生徒は与えられた課題に対して自分の考えをもち、既習事項を活用して伝え合い、その伝え合いを通して再び自己の考えを深めることができていた。

今回は教科書のレッスン内容に関連して発展させた「AI やロボット」、「Society 5.0」がテーマであったが、写真や映像などの視聴覚教材の活用や既習事項を踏まえた英語使用であれば、内容が多少高度になっても生徒の理解可能なインプットを与えられることが分かった。今後、教科書の題材に応じて「環境」や「エネルギー」等のさまざまなトピックの授業化が、指導の工夫により可能であることの示唆が得られた。

イ 課題

生徒のアウトプットに関しては、適切な段階を踏んで緻密に考えて用意する必要があると感じた。特に「予想される生徒の発話」をできる限り推測し、既習事項の中からどれだけ豊富な例示ができるかが課題である。

指導において常に頭を悩ませるのが、中学生にとって「表現したいこと」と「表現できること」のギャップが大きいことである。このギャップを既習事項でどれだけ埋めることができるのかを常に念頭に置いて、中学生の知的好奇心を刺激する題材発掘や教材開発をしていくことが今後求められていくと考える。

Ⅲ 成果と課題

本研究において、生徒の実態に応じた「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定し、言語活動の実質化を目指して検証授業を行った成果と課題は以下の通りである。

1 成果

(1) 「言語活動を支える基盤」を大切にした授業展開

教科書本文の内容理解、学習した言語材料や語彙の定着活動等や生徒の地域・学校での体験等を、「言語活動を支える基盤」として役立てたことは、生徒が発信する内容をもつ、発信する手段をもつという意味で効果的だった。

教科書本文で「聞いたり」「読んだり」して学んだ内容や、学校の生活、住んでいる地域での生徒の体験等は生徒が共通して話せる内容であり、生徒は話す話題に困らず、意欲的に伝え合うことができていた。

また、教科書本文の内容理解、学習した言語材料や語彙の定着活動等を繰り返し行ったことも効果的だった。学習しているレッスンに出てくる語彙や表現等に限定した定着活動とは異なり、本研究で目指した「言語活動の実質化」は生徒の思いや考えを場面ベースで自分の言葉で発信することを求めた。毎回の授業の中で、言語活動の中で生徒が既習事項を引き出せることを目指し、例えば検証授業2で行った2分間チャット(ペアで話した後、その内容を他の人に報告する。)や検証授業4で行った **Last Sentence Dictation** (教師の読む既習の教科書本文の最後に読まれた文を書きとる活動) など、日頃から既習事項や教科書本文の内容に繰り返し触れさせていく活動を取り入れておくことが大切であることがわかった。検証授業では、その単元で習っている言語材料だけでなく、こうして積み重ねてきた内容も活用して、自分の思いを自分の言葉で発信しようとする生徒が多く見られた。

(2) 生徒の学習への興味・関心、英語で発信することへの意欲

教師が実社会とのつながりある「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」を設定することを通して、疑似コミュニケーションではなく、生徒が伝える相手を意識しながら、生徒が内容を考え、発信するという自然なコミュニケーションにすることができた。

各検証授業の中で、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等」に応じて、教師が生徒の理解度や興味・関心に合わせてテーマに関するオーラル・イントロダクションを行ったが、これは、教師自身が生徒に英語でコミュニケーションを行わせるという「目的」のために、中学生に向けた授業という「場面、状況」の中で、試行錯誤しながら、生徒の理解度に合わせ、視覚的な教材やジェスチャーなども交え、英語で伝えていくことであった。教師自身が楽しみながらオーラル・イントロダクションを行い、英語使用者としてのモデルを示していくことは、生徒の興味・関心を引き出すことにつながった。

2 課題

(1) 目標の明確化

外国語科として授業を通し、身に付けさせたい力に沿って、授業計画を立てることが大切である。「ポスター作り」や「キャリア教育の推進」がめあてとなってしまうように、内容と言語のバランスをとっていくことが大切である。

(2) 日本語の使用

与える課題が生徒にとって、興味深い、意見を交換したくなるようなテーマになるほど生徒はたくさん自分の思いを話したくなる。そのため、より簡単に思いの伝えられる日本語を使いがちである。内容を重視した授業展開の中で、生徒は英語による教師のテーマに関するインプットを通して思考を深め、自分の意見を述べようとしていた点は評価できる。しかし、中学生が英語で自分の意見を自由に述べるにはより教師の意図的な働きかけや効果的なフィードバックが必要であった。生徒が自分で表現を選び、発信することは尊重しつつ、教師が生徒が発信したくなりそうな内容を予想し、既習表現を用いてどのように表現できるか教師が考えておき、日本語使用が見られた際には提示を行ったり、習熟の程度が遅い生徒への支援として、中身は考えさせるが型を提示したりするなど、英語によるコミュニケーションとなるよう手助けを行っていくことが必要である。

(3) 教材研究にかける時間とカリキュラム・マネジメント

本研究では地域の素材や国際理解教育、キャリア教育を外国語授業へ教科等横断的な視点でそれらを取り込むという方向性で取り組んだが、教材研究に非常に時間を要した。また前述のように、生徒が発信したい内容が生徒の言語習得に追いついていないために日本語を使用するという課題もあった。そこで、外国語授業へ教科等横断的な視点でそれらを取り込むのと逆に、外国語の授業の中で学んだ内容を活用して総合的な学習の時間や道徳授業など他の教育活動を充実させていく視点もあるのではないかという意見が検証授業後の協議の中では挙げられた。

教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保など(例えば、ポスターを地域で実際に掲示してもらうために学校外の団体と連携するなど)実施に必要な体制や開発した資料を、一度で終わらせず継続していくことが大切である。生徒の学習を最大化できるようにカリキュラム・マネジメントしていくことが、学校の教育活動全体の質の向上を図る上で必要であると考ええる。

中学校特別の教科 道徳研究開発委員会

目 次

I	研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	研究仮説・・・・・・・・・・・・・・・・	2
III	研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・	2
IV	研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・	2
V	基礎研究・・・・・・・・・・・・・・・・	3
VI	開発研究・・・・・・・・・・・・・・・・	5
VII	実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・	9
VIII	研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・	15

〈中学校「特別の教科 道徳」研究開発委員会〉

研究主題

ねらいを明確にし、生徒の道徳性を着実に育む
授業づくりに資する指導資料の開発

研究の概要

「特別の教科 道徳」（以下、「道徳科」）の授業を構想する際には、取り上げる内容項目について「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」のうちの何に重点を置いて指導するかを明確にし、それに応じた発問や学習活動の工夫を取り入れ、生徒の道徳性を着実に育む授業とすることが肝要である。

本研究では、そのような授業を構想し実践するための補助的な指導資料として「授業構想チャートシート」及び「授業構想シート」を開発し、その効果を検証した。

I 研究の目的

ねらいを明確にし、生徒一人一人の道徳性を着実に育む授業づくりに資する指導資料を研究・開発する。

II 研究仮説

授業を構想する際の補助となる指導資料を開発・活用することにより、ねらいが明確で効果的な指導の工夫を取り入れた授業づくりが可能になり、教師が生徒一人一人の道徳性を着実に育む授業を実践することができるだろう。

III 研究の方法

1 基礎研究

- ・ 都教育委員会の調査結果の分析
- ・ 道徳科の指導における課題の整理

2 開発研究

- ・ 授業構想の際の補助となる指導資料の開発
- ・ 開発した指導資料を活用した授業の実践と検証

IV 研究の構想

研究の背景

- 中学校における道徳科の全面实施（平成 31 年 4 月）
- 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）第 3 章 特別の教科 道徳 第 1 目標
第 1 章総則の第 1 の 2 の (2) に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方について考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

目指す生徒の姿

道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践につなげていくことができる生徒

研究主題 ねらいを明確にし、生徒の道徳性を着実に育む授業づくりに
資する指導資料の開発

研究仮説

授業を構想する際の補助となる指導資料を開発・活用することにより、ねらいが明確で効果的な指導の工夫を取り入れた授業づくりが可能になり、教師が生徒一人一人の道徳性を着実に育む授業を実践することができるだろう。

研究内容

基礎研究

- ・ 都教育委員会の調査結果の分析
- ・ 道徳科の指導における課題の整理



開発研究

- 授業構想の際の補助となる指導資料の開発



実践と検証

- 開発した指導資料を活用した授業を実践
- 授業実践を振り返り、研究開発した指導資料について検証

V 基礎研究

平成 31 年 4 月から、中学校において道徳科が全面実施となった。「道徳の時間」の教科化は、これまで指摘されてきた以下のような課題の解消を大きな目的としている。

- ・ 歴史的な経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること
- ・ 他教科等に比べて軽んじられていること
- ・ 読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があること

道徳教育は、生徒の人格の基盤となる道徳性を養う重要な役割を担うものであり、道徳科の指導の改善・充実を図っていくことは喫緊の課題であると言える。

都教育委員会が都内全公立中学校を対象に実施した「平成 30 年度道徳教育推進状況調査」では、以下のような調査結果が出ている。（本調査結果には、市民科を実施している品川区の学校は含まれていない。）

【質問 A】 貴校では、平成 30 年度において、道徳教育に関する校内研修を実施しましたか。

1 回実施	44.3%
2 回実施	36.4%
3 回実施	15.1%
4 回以上実施	4.2%
実施していない	1.5%

【質問 B】 貴校が、平成 30 年度において、重点を置いた道徳教育に関する研修の内容は何ですか。（該当するものを全て選択）（14 項目のうちの上位 5 項目）

「特別の教科 道徳」の指導内容や指導方法の工夫に関する理解	74.4%
生徒の変容の把握（評価方法等）	57.4%
「道徳の時間」の指導	55.1%
「特別の教科 道徳」の先行実施の具体的な計画の作成や実施の振り返り	29.8%
道徳資料（教材）の開発と整備	18.2%

【質問C】 貴校では、平成31年度の「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて、特にどのようなことを課題と考えていますか。（三つ選択）（9項目のうちの上位5項目）

「特別の教科 道徳」の評価の方法	89.7%
「特別の教科 道徳」の指導に当たっての教員の指導力の向上	70.3%
「特別の教科 道徳」の指導方法についての教員の理解	58.2%
道徳の教科化の背景や意義、ねらいについての教員の理解	29.8%
「特別の教科 道徳」に関する情報の保護者への周知	17.5%

【質問A】から、調査対象の中学校（小中一貫校の7～9年次と中等教育学校の前期課程を含む。以下同じ。）の98.5%が、平成30年度中に道徳教育に関する校内研修を実施していることが分かる。そして【質問B】から分かるように、そのうちの74.4%が、道徳科の指導内容や指導方法の工夫について教員の理解を深めることに重点を置いた内容となっている。道徳科の全面実施を次年度に控えた中学校の多くにおいて、道徳科についての理解を深め、指導の充実を図っていこうとする姿勢がうかがえる。しかしその一方で、道徳教育に関する校内研修を実施した中学校のうち、年間1回の実施と回答した学校が44.3%を占めている。その結果、【質問C】に見られるように、校内研修を実施したにもかかわらず、依然として道徳科の指導に当たっての教員の指導力の向上や道徳科の指導方法についての教員の理解に課題が残ると感じている学校が多い。また、【質問C】で最も回答率の高かった道徳科の評価の方法についても、指導の成果として見取ることのできる評価という視点から見れば、指導に関する理解と表裏のものと言える。

そのような状況の中、今年度から中学校でも道徳科の全面実施を迎えたが、「どのように授業を組み立てればよいか分からない」、「何を考えさせたり何について話し合わせたりすればよいのが難しい」といった声も、依然として聞かれる。道徳科において求められている「考える道徳」、「議論する道徳」を実現し、生徒の道徳性を着実に育む指導の在り方について、全ての教員が理解し、実践していくことが、大きな課題である。

もちろん、優れた実践を行っている教員もおり、また、指導教諭のように授業実践を公開し、他の教員の授業力向上に努めている例もある。しかし、それらの実践を全ての教員に普及していくことは困難である。

そこで、本研究では、道徳科の授業を構想する際の補助となるような資料を開発することで、授業の在り方等についての教員の理解を深めるとともに、生徒一人一人の道徳性を着実に育む授業を実現させることを研究主題とした。

開発する補助的な資料の基本的な考え方は以下のとおりである。

- ・ 一連の流れに沿って1単位時間の授業を構想できるものにする。
- ・ 授業を構想する過程で道徳科の指導の在り方について理解を深められるものにする。
- ・ 教員の経験年数等にかかわらず誰でも活用できるものにする。
- ・ この展開でなければならないというものではなく、あくまでも授業を構想することに困難を感じている教員を「補助」とするという位置付けのものとする。

これらの基本的な考え方に基づき、後に示す「授業構想チャートシート」及び「授業構想シート」を開発するとともに、その効果について検証を行った。

VI 開発研究

中学校学習指導要領「特別の教科 道徳」では、道徳科の目標を次のように示している。

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことが道徳科の目標であり、道徳性を構成する諸様相である「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」を養うことが目指されている。そして、それを実現するために求められる学習活動として「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める」ことが示されている。

これを受け、本委員会では補助的な資料の開発に当たり、生徒の道徳性を着実に育む授業に必要な要素として、「授業のねらいが明確であること」、「ねらいに応じた効果的な学習活動が設定されていること」の二つが大きなものとなると考えた。そこで、この二つを開発資料の柱とすることとした。

1 授業のねらいを明確にするために

授業のねらいを明確するためのポイントとして、本委員会では道徳性の諸様相、すなわち「道徳的判断力」、「道徳的心情」、「道徳の実践意欲と態度」に着目した。道徳的諸様相については、中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（平成29年6月）（以下、「解説」と表記）に、「これらの諸様相は、それぞれが独立した特性ではなく、相互に深く関連しながら全体を構成している」とあり、「これらの諸様相について調和を保ちながら、計画的、発展的に指導することが重要」としている。それぞれに独立したものではないものの、この諸様相のどれに重点を置いて指導をするかを明らかにすることで、授業のねらいがより明確になると考えられる。そこで、

- ・ 取り上げる内容項目に関する「判断力」、「心情」、「実践意欲と態度」の視点から見た生徒の実態を明らかにし、生徒に身に付けてほしい資質や能力を明確にする。
- ・ 生徒の実態と関連して、授業で取り上げる内容項目の特質を、「判断力」、「心情」、「実践意欲と態度」の視点から捉え、重点を置いて指導すべき諸様相を明確にする。
- ・ 授業で扱う教材について、「判断力」、「心情」、「実践意欲と態度」のそれぞれを育む際にどのような活用ができるか（着目する場面や発問など）を分析する。

の3点に基づいて、授業のねらいを設定するという一連の流れを開発資料に反映させることとした。

2 ねらいに応じた効果的な学習活動を設定するために

ねらいにおいて、「判断力」、「心情」、「実践意欲と態度」のうちのいずれかに重点を置いて指導することが設定されたことを受け、それに応じた効果的な学習活動を設定することが次の段階となる。

例えば、内容項目として「思いやり」を取り上げるとき、思いやりに関わる判断力（様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力）を育もう

とするか、思いやりに関わる実践意欲と態度（道徳的価値を実現しようとする意志の働きと具体的な道徳的行為への身構え）を育もうとするかでは、生徒に考えさせたり話し合わせたりする内容が異なる。逆に言えば、ねらいが明確になることで、授業の核となる学習活動も明確にすることができ、まさにねらいに応じた効果的な学習活動の工夫を取り入れた授業を構想することにつなげることができるはずである。

このことを受け、開発資料では、

- ① ねらいで設定し重点を置いて指導する「判断力」、「心情」、「実践意欲と態度」のいずれかについて、その特質を踏まえて中心的な発問や学習活動を設定する。
- ② ①で設定した中心的な発問や学習活動を核として、1単位時間の授業全体の枠組みを「導入」、「展開」、「終末」の流れとして考える。
- ③ ②で考えた1単位時間の授業の流れの中に、「指導の工夫」と「評価の工夫」の二つの視点から、どのような工夫を取り入れることが効果的かを考える。

という3段階で、具体的な1単位時間の授業を構想するという一連の流れを開発資料に反映させることとした。

3 授業の実践に向けて

上記1と2を「授業構想チャートシート」として1枚のシートに簡潔にまとめ、授業を構想する際に手軽に参照できるようにした。また、「授業構想チャートシート」の流れに沿いながら、各項目や授業の展開を記入できる略案形式の「授業構想シート」を別に作成した。

授業者は、「授業構想チャートシート」を参考に「授業構想シート」を作成し、授業のねらいや中心となる発問・学習活動、具体的な指導や評価の工夫を確認する。その後、作成した「授業構想シート」に基づいて授業を行う。研究仮説に示したように、これらの開発資料を活用することで、道徳科の指導に課題や困難を抱えている教員であっても、ねらいが明確で効果的な指導の工夫を取り入れた授業を行うことができ、生徒一人一人の道徳性を着実に育む授業の実現につなげることができると思う。

本研究では、開発した「授業構想チャートシート」及び「授業構想シート」について、以下の方法で、その効果を検証した。

(1) 研究開発委員による検証授業の実施

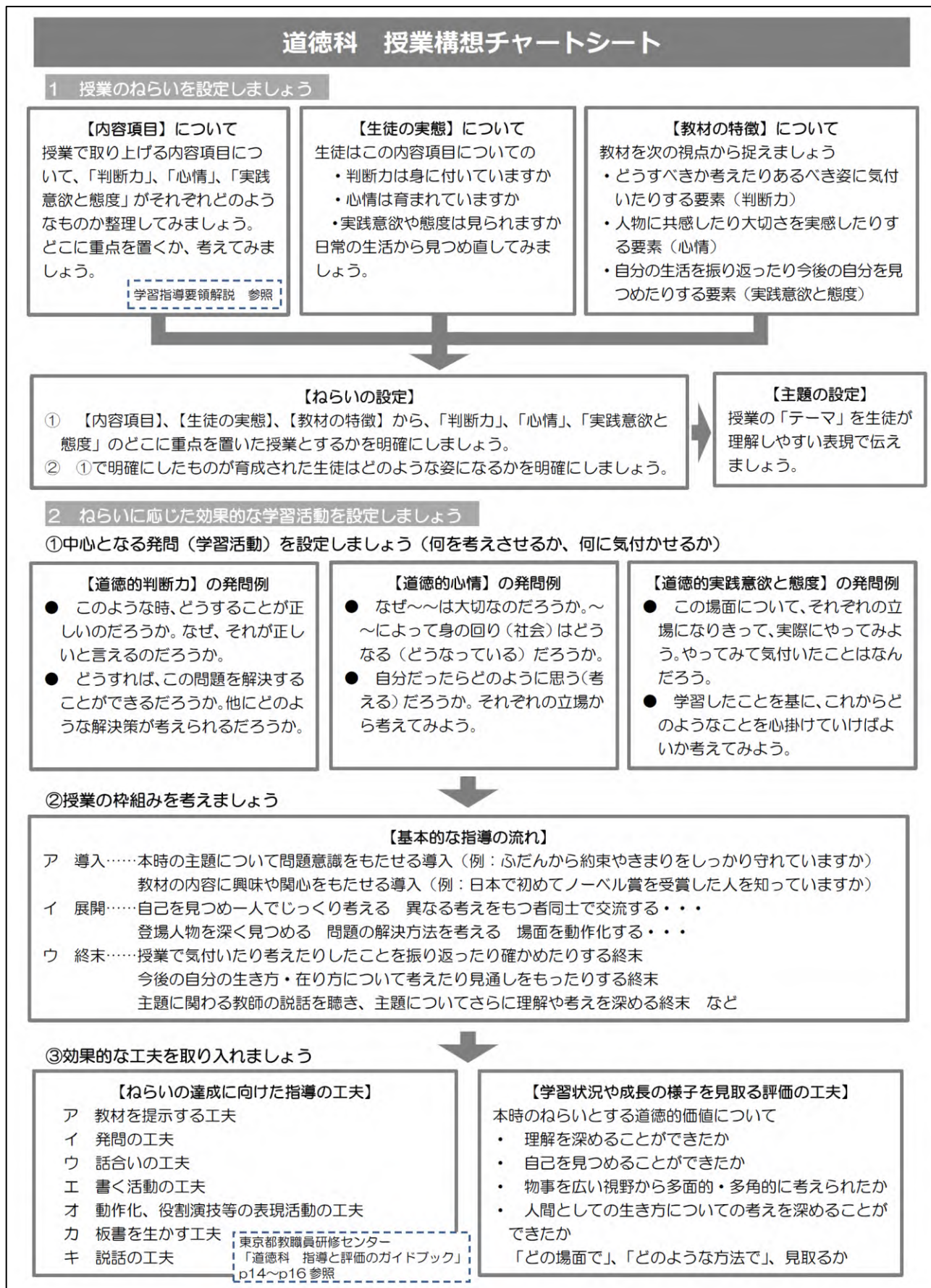
本委員会の委員が、「授業構想チャートシート」と「授業構想シート」を活用して授業を構想し、授業の成果と課題について検証した。また、授業の成果と課題に基づいて「授業構想チャートシート」と「授業構想シート」の改善を図った。

(2) 研究開発委員の所属校の他の教員による検証授業の実施

本委員会委員の所属校において、委員以外の教員に「授業構想チャートシート」と「授業構想シート」を活用した授業の実施を依頼し、開発資料の効果について検証した。検証は、①実施した授業の成果はどうであったか、②開発資料を活用して授業を構想する過程でどのような効果があったか、の2点から行い、開発資料の有効性について把握することとした。

【開発資料1】授業構想チャートシート

授業を構想する際の流れやポイントを示したシート。これを基に授業を構想する。



【開発資料 2】授業構想シート

「授業構想チャートシート」を基に実際に授業を構想する際に活用するシート

道徳科 授業構想シート

1 授業のねらいを設定しましょう

【内容項目】

【内容項目】について

【生徒の実態】について

【教材の特徴】について

【本時のねらい】

→

【本時の主題】

2 ねらいに応じた効果的な学習活動を設定しましょう

	学習活動（○）・教師の発問（◆）	指導上の留意点（・）・評価（★）
導入		
展開		
終末		

VII 実践事例

実践事例 1 第 1 学年 内容項目：よりよく生きる喜び

道徳科 授業構想シート

1 授業のねらいを設定しましょう

内容項目 D よりよく生きる喜び

【内容項目について】

自らの弱さや醜さにばかり目を向けるのではなく、それら乗り越える強さや良心が自分の内に存在することを自覚し、よりよい生き方を実践していける生徒であってほしいことから、ここでは特に「実践意欲と態度」を養うことに重点を置きたい。

【生徒の実態について】

他人と比較したり、されたりすることが多くなる中で、自分に自信がもてず安易に周囲に同調してしまう様子が見られる。また、正しいことだと分かっているにもかかわらず、自分から主張したり意見したりできない傾向も認められる。

【教材の特徴について】

「銀色のシャープペンシル」(文部省道徳教育推進資料「読み物資料とその利用3」)
「ぼく」は、拾って使っていたシャープペンシルが友人のものだったと知るが、正直に言い出せない。「ぼく」が葛藤し決断する姿を通じて、人として正しく生きようとする態度について、自分事として考えることができる教材である。

【本時のねらい】

「ぼく」の葛藤を自分事として捉えることで、人間は誰もが弱さや醜さをもっていることを理解するとともに、自分の内なる両親に従い、よりよく生きていこうとする道徳的な実践意欲と態度を養う。

【主題名】

良心に従ってよりよく生きる

2 ねらいに応じた効果的な学習活動を設定しましょう

	学習活動 (○)・教師の発問 (◆)	指導上の留意点 (・)・評価 (★)
導入	○本時の主題について考える。 ◆「よりよく生きる」とはどういうことだろう。	・本時の主題、テーマを提示し、ねらいとする道徳的価値への導入を行う。 <u>工夫1</u>
展開	○教材を読み、考える。 ◆印象に残った場面はどこだろう。 ◆なぜ、ぼくは、自分で買ったと言ってしまったのだろう。 ◆「ずるいぞ」という心の声に対する「ぼく」の言葉を考えよう。 A 心の声「ずるいぞ」 B ぼく「 」 A 心の声「 」(さらに一言) B ぼく「 」(もう一言) なぜそのように言ったのか、理由も説明する。 ・ペアになり、交互に場면을疑似体験させる。「ぼく」の葛藤を自分事として捉えさせた後、ねらいとする道徳的価値について4人グループで話し合う。 <u>工夫2</u> ★疑似体験を通して、主題について自分事として深く考えることができたか自分自身と重ね合わせて考えることができたか。(活動の様子、発言) ・自分の考えを整理させてからワークシートに記入させ、意図的指名で発表させる。<u>工夫3</u> ★他の意見を聞いて、自分の考えを広げたり深めたりすることができたか。(発言、ワークシート) ◆あなたが考える「よりよい生き方」とはどのような生き方か。そのような生き方をするために大切なことはなんだろう。	・教材を配布し、範読する。 ・範読後、印象に残った場面について、理由を含め、ペアで交流する。 ・ペアになり、交互に場면을疑似体験させる。「ぼく」の葛藤を自分事として捉えさせた後、ねらいとする道徳的価値について4人グループで話し合う。 <u>工夫2</u> ★疑似体験を通して、主題について自分事として深く考えることができたか自分自身と重ね合わせて考えることができたか。(活動の様子、発言) ・自分の考えを整理させてからワークシートに記入させ、意図的指名で発表させる。 <u>工夫3</u> ★他の意見を聞いて、自分の考えを広げたり深めたりすることができたか。(発言、ワークシート)
終末	○ 本時で気付いたことや学んだことを振り返る。	・自分自身の気づきや学びを整理させ、ワークシートに簡潔に記入させる。

【主題設定の理由】

本実践では内容項目「よりよく生きる喜び」を取り上げた。正しいことと分かっている、自分から主張したり意見したりできない生徒が多いという実態から、自らの弱さを克服する強さや良心に目を向けさせ、よりよい生き方に向かおうとする姿勢をもたせることをねらいとし、実践意欲と態度を養うことに重点を置いて主題を設定した。

【ねらいに迫るための工夫】

工夫1 (イ 発問の工夫)

導入時に主題を提示することで、授業で何を考えればよいかを明確にするとともに、ねらいからそれない授業展開となるよう工夫した。また、展開の後半で自分にとってのよりよい生き方を考えさせることで、自分事として深く考えさせることができるよう工夫した。

工夫2 (オ 動作化、役割演技等の表現活動の工夫)

「ぼく」が葛藤する場面について、「ずるいぞ」という声に対する「ぼく」の心の声を考え、実際に表現する疑似体験的な活動を取り入れた。この活動を通して、自分自身の弱さや醜さを克服してよりよく生きることのよさを実感させることができると考えた。

工夫3 (エ 書く活動の工夫)

生徒一人一人がより深く自分を見つめられるよう、ワークシートに記入した内容については発表や交流をしないことをあらかじめ伝えた。生徒がワークシートを記入している間に机間指導をし、全体で共有したい内容を書いている生徒を教師が把握し、授業のまとめで教師が紹介するようにした。

【成果】

(1) 授業構想チャートシート・授業構想シートの活用成果

- ・ 内容項目、生徒の実態、教材の特徴から総合的に主題を考えたことで、ねらいが明確で実態に即したものになり、効果的な学習活動を設定することができた。

(2) ねらいに迫るための工夫の成果

- ・ 導入時に主題を確認したことで、全ての生徒が本時で考えることについて同様に準備（レディネス）を整えることができた。また、授業中に一貫して主題を意識しながら活動に取り組むことができていた。
- ・ 疑似体験的な活動を取り入れたことで、弱い自分に打ち勝ち、よりよい生き方を選択することのよさについて、多くの生徒が実感を伴って理解をすることができていた。
- ・ 発表や交流を前提としなかったことで、生徒一人一人のワークシートの記述内容が、より深いものとなった。また、全体で共有したい内容について教師が匿名で紹介することによって、さらに学びを深めることができた。

(3) 生徒の変容

- ・ ワークシートでは、「自分の過ちを受け止めたり自分で正したりしながら生きていくことで、結果的に気持ちが晴れることが分かった。自分もそういう生き方をしていきたい。」「弱い自分に気付くことも大切だが、もっと大切なのは、その弱い自分を見捨てずにちゃんと引っ張っていつてあげることだと思う。それができる自分も、きっと自分の中にいるはずだ。」など、実践意欲と態度の醸成につながる記述が見られた。

道徳科 授業構想シート

1 授業のねらいを設定しましょう

内容項目 B 友情、信頼

【内容項目について】

悩みや葛藤も経験しつつ、共に乗り越えることで、尊敬と信頼に支えられた友情を築いてほしい。そこで、友情の尊さを理解して心から信頼できる人間関係を築くためには、自分がどのように行動していくべきかを「判断する力」を養うことに重点を置きたい。

【生徒の実態について】

「理想の人間関係」について、頭では分かっているが、一緒にいることや、常に連絡を取り合うことを友情と捉えている生徒が少なくない。また、相手を束縛してしまうことや、納得がいかないと悪口や陰口を言ったりすることなどもあり、人間関係のトラブルが生じていることもある。

【教材の特徴について】

「本当の友達って」（教育出版「とび出そう未来へ 中学道徳2」）

「昭夫」は友達の「達也」とスマホで連絡を取り合う中で、束縛を感じながらも流されてしまう。考えた末に「達也」に本心を伝えようとする「昭夫」に自我関与させていくことを通して、人間関係のあるべき姿について理解を深め、その実現に必要な判断力について考えることのできる教材である。

【本時のねらい】

本当の友情とはどのようなものかを考えることで、悩みや葛藤も経験し、共に乗り越えながら人間関係を深めていくことが大切だと改めて感じ、そのためにどう行動すべきかを判断する力を高める。

【主題】

本当の友達関係を築く

2 ねらいに応じた効果的な学習活動を設定しましょう

	学習活動（○）・教師の発問（◆）	指導上の留意点（・）・評価（★）
導入	○「本当の友達」についてのアンケート結果を聞く。	・ 事前に実施したアンケートの結果をまとめ、提示して、ねらいとする道徳的価値への導入を行う。
展開	○教材を読み、考える。 ◆「なぜだか勉強する気になれなかった。」とあるが、それはなぜだろう。 ◆「僕は勇気をふりしぼって言った。」とあるがこの時、「昭夫」はどのようなことを考えていたのだろう。	・ 教師が教材を範読する。 ・ 「昭夫」の思ったことや行動を板書で示し、内容を整理する。 ・ 「昭夫」が葛藤している場面に着目させ、発表させる。 ・ 「昭夫」が決断し行動した場面に着目させ、ねらいに迫らせる。 ・ 4人グループで話し合いを行わせる。 ・ 学級全体で意見を共有する。 ・ きれいごと、概念だけの意見で終わらないように補助的な発問を行う。【工夫1】 ★友達の意見を聞いて、自分の考えを広げることができたか。（活動の様子、発言）
	◆本当の友達関係を築くために、これから自分はどのような自分でありたいか。	
		・ 自分の考えをワークシートに記入させる。【工夫2】 ★本当の友達関係を築くための自己の在り方について、深く考えることができたか。（ワークシート）
終末	○教員の説話を聞き、学習を振り返る。	・ 自身の体験を基に、友情の尊さについて説話をし、授業のまとめとする。

【主題設定の理由】

本実践では、内容項目「友情、信頼」を取り上げた。前年度（1年時）に行った同じ内容項目の授業では、生徒は、友達とのあるべき人間関係について理想論を述べているだけであった。そこで、友達との関わり方について悩み、決断する中学生の姿を描いた教材を用いて、より深く自分事として捉えさせながら、人間関係を深める上で必要な判断力を養うことに重点を置いて主題を設定した。

【ねらいに迫るための工夫点】

工夫1（イ 発問の工夫）

グループの話し合いをうわべだけの意見の出し合いで終わらせないように、学級全体で意見を共有する際に補助的な発問を取り入れるように工夫した。例えば、「本当の友達なら分かってくれるはずだと考えていた」といった意見に対して、『友達』と『本当の友達』はどう違うのか」と発問をしたり、「友達を信頼して本当のことを伝えようと考えていた」という意見に対して「信頼するために必要なことはなんだろう」と発問したりして、考えを深められるようにした。

工夫2（エ 書く活動の工夫）

テーマが人間関係に関わることであり、また、生徒一人一人により深く自分を見つめてほしいとの意図から、ワークシートに記入した内容については発表や交流をしないことをあらかじめ伝えた。生徒がワークシートを記入している間に机間指導を行い、全体で共有したい内容を書いている生徒を教師が把握し、授業のまとめで教師が紹介するようにした。

【成果】

(1) 授業構想チャートシート・授業構想シートの活用成果

- ・ 内容項目、生徒の実態、教材の特徴の3点について、道徳的判断力の視点から捉えたことで、教師の意図に沿ったねらいを明確に設定することができた。
- ・ ねらいを明確に設定できたことで、発問が精選できた。また、授業の展開をより効果的に構想することができた。

(2) ねらいに迫るための工夫の成果

- ・ グループで話し合った内容を全体で共有する際に、補助的な発問を行ったことで、学級全体で会話をするように積極的な意見交流が行われた。
- ・ ワークシートでは、「友達から自分の行動の間違いを指摘されても、自分のことを思ってくれているのだから、しっかりと受け止められる自分でいたいと思った。」、「互いに信頼できる関係をつくるのは難しいと感じた。まず自分が相手から信頼されるように生活していくことが大切だと思った。」など、自己を見つめ、今後の在り方を考えている記述が見られた。

(3) 生徒の変容

- ・ 授業後に実施した校外学習では、班行動で、きまりを守るよう互いに注意し合ったり、移動中に疲れてしまった生徒を気遣ったりしている様子が見られた。また、道徳科で「相互理解、寛容」を取り上げた際、本実践で考えた内容を振り返り、その視点から互いに理解し合うことについて考えている生徒が多く見られた。

道徳科 授業構想シート

1 授業のねらいを設定しましょう

内容項目 C 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

【内容項目について】

郷土を大切に思い、地域の人々と共に地域社会をよりよいものに発展させていこうとする自覚をもってほしい。そこで、何が郷土の発展なのか、その実現のために自分たちにできることはどのようなことなのかを「判断する力」を養うことに重点を置きたい。

【生徒の実態について】

郷土や地域について深く考える機会が少なく、自己が地域社会の一員であるという自覚も乏しい。また、一面的な価値観から判断しがちであり、物事の多面性を捉えて検討したり、その結果から判断したりすることが苦手である。

【教材の特徴について】

「村長の決断」(光村図書「中学道徳3」)
郷土への愛ゆえに島を開発すべきかどうか悩む村長の姿が描かれている。村長の葛藤に寄り添うことを通して、郷土を大切にすることはどういうことなのか、どうすることが郷土の発展に寄与することなのか判断する力について考えることができる教材である。

【本時のねらい】

社会的側面や経済的側面、自然愛護の視点など、多面的・多角的な視点から郷土のよりよい発展の在り方について深く考えることで、郷土の発展に努める上で求められる道徳的判断力を育む。

【主題】

郷土を大切にする

2 ねらいに応じた効果的な学習活動を設定しましょう

	学習活動(○)・教師の発問(◆)	指導上の留意点(・)・評価(★)
導入	◆あなたの「郷土」はどこか。その「郷土」を大切にしているか。	・自分の「郷土」を意識させ、ねらいとする道徳的価値への導入を行う。 <u>工夫1</u>
展開	○教材を読み、考える。 ◆何に村長は頭を悩ませているか？ ◆島を開発した場合としなかった場合それぞれについて、島や島の人々にどのような影響を与えるか？	・登場人物や物語の構図、舞台などを絵や図で示しながら、教師が教材を範読する。 <u>工夫2</u> ・意見の根拠や理由も明らかにさせながら、島の発展についての村長の葛藤に気付かせる。 ・島の発展について多面的・多角的に捉えさせ、村長の悩みについてさらに深く考えさせる。 <u>工夫1</u>
	◆悩む村長の胸の中には、どのような思いがあるのだろう。	・村長の郷土を愛する気持ちと、それゆえの葛藤について、深く考えさせる。 <u>工夫1</u> ★他者の意見を聴いて、自分の考えを広げたり深めたりすることができたか。(発言、ワークシート)
終末	◆どうすることが「自分の郷土を大切にする」ことになるのだろう。	・自分の郷土について再度考えさせる。 <u>工夫1</u> ★自分事として深く考えることができていたか。(ワークシート)

【主題設定の理由】

本実践では内容項目「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」を取り上げた。多くの生徒がこれまで、「自分にとっての郷土」や「郷土を大切にすること」について深く考えたことがない実態を踏まえ、郷土を愛し大切にすることはどのようなことか、様々な側面から考えさせながら内容項目に係る判断力を養うことに重点を置いて主題を設定した。

【ねらいに迫るための工夫】

工夫1 (イ 発問の工夫)

- (1) 導入と終末で、生徒に自身の郷土について考えさせる発問を行うことで、授業を通じての変容を生徒自身が自覚できるよう工夫した。
- (2) 島を開発した場合と開発しなかった場合それぞれについて考えさせることで、「郷土を大切にすること＝自然を守る」といった安直な思考にとどまらず、ねらいとする道徳的価値について多面的・多角的に考えることができるよう工夫した。

[様々な視点の例]

- ① 経済的な側面：開発による観光収入で島の経済が潤う。島民の流出も減る。
 - ② 文化的な側面：島民の減少・高齢化等で島の伝統文化が廃れる。
 - ③ 社会的な側面：開発により島民の生活様式や価値観が大きく変化する。 など
- (3) 中心的な発問において、村長が郷土を愛する気持ちをもっているがゆえに悩んでいることに気付かせることで、郷土愛について考えを深められるよう工夫した。

工夫2 (ア 教材を提示する工夫)

教材の舞台が生徒にとって身近なものではない（外国の小さな島）ため、あらかじめ登場する人物や舞台、設定などについて図や絵で説明してから、教材を読み聞かせた。また、範読後に内容のあらすじを簡略化した図で板書し、常に振り返ることができるよう工夫した。

【成果】

- (1) 授業構想チャートシート・授業構想シートの活用成果
 - ・ 生徒の実態と教材の特徴を丁寧に確認したことで、「自分にとっての郷土」や「郷土を大切にすること」について、生徒が今後、より深くかつ現実的に考えていく基盤づくりを意図する授業を構想することができた。
- (2) ねらいに迫るための工夫の成果
 - ・ 郷土を大切にすることについて、多面的・多角的に考えることができるよう発問を工夫したことで、「郷土＝生まれ育った場所」といった理解から、文化や歴史、伝統、人々の生活や思いなど、様々な要素の統合されたものとしての郷土へと理解を深められた。
 - ・ 教材提示の工夫により、発問を精選して、生徒が考える時間を十分に確保できた。
- (3) 生徒の変容
 - ・ 終末では、「まず郷土がどのようなところなのかをしっかりと知り、様々なよさを感じ取り、誇りをもつことが、郷土を大切にすることだと思う。」「自分を育ててくれた郷土の人、場所、物事に感謝の気持ちをもって生活することだと思う。」「しっかりと自分たちが受け継ぐこと、そして次の世代に手渡すことだと思う。」など、郷土を大切にすることについて、それぞれの価値観から判断しようとしている発言が多数あった。

Ⅷ 研究のまとめ

1 開発資料の活用成果

前掲の実践と並行し、各委員の所属校において他の教員に本研究開発の内容を説明し、「授業構想チャートシート」及び「授業構想シート」を活用した授業実践に取り組んでもらった。以下は、その感想である。

- ・ 「内容項目」、「生徒の実態」、「教材の特徴」の3点を関連付けて捉えることができる点が良い。主題設定までの流れが明確に示されているので、主題からそれてしまったりねらいが曖昧になってしまったりすることのない授業を構想できる。また、授業者同士が短時間で本時の授業の構想を共有できる点も有益だと感じた。(30代・教諭)
- ・ 授業を構想する際の思考や作業の流れが構造化されていて、とても分かりやすい。ふだん使用している学習指導案よりも、1単位時間の授業の流れ・展開のイメージをもちやすい。授業の中で生徒に考えさせたいポイントを明確にして授業を行うことの大切さが理解できた。(30代・主任教諭)
- ・ 授業で取り上げる内容項目について、改めて学習指導要領解説を確認し、授業者が理解を深めた上で授業に臨むことができた。また、内容項目と教材の関わりを捉えやすく、着目させる箇所や発問を考えるのに役立った。道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度のいずれかに重点を置く指導を意識したことで、授業で取り組むべきことを明確にすることができた。(20代・教諭)
- ・ 内容項目や教材によっては扱いづらいと感じるものもあるが、このように授業を構想する手順を明確に示してもらえると、効果的な授業を組み立てることが可能になると感じた。取り上げる内容項目の視点から生徒の実態を捉えて授業を構想することや、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度のどこに重点を置くかによって教材の扱い方が変わることなど、多くのことを学ぶことができた。(20代・教諭)
- ・ 校内研修で「授業構想チャートシート」に基づいて全教員で同じ教材について授業を構想して協議をすれば、道徳科の授業づくりや効果的な指導の在り方について教員の理解を深めることができると思う。特に、道徳科の授業づくりに苦勞をしている若手教員などにとっては、授業の組み立て方を基礎から学べるよい資料だと感じた。(50代・主任教諭)
- ・ 教員の経験年数等にかかわらず、「授業構想チャートシート」を活用すれば、短時間で効果的な学習指導案を作成することができる。学年の教員で分担して毎授業の「授業構想シート」を作成し、ファイリングしていけば、次年度の教員が授業を行っていく際の基礎資料として有効に活用できると思う。(30代・教諭)

委員が所属する3校で、18名の教員に開発資料を活用して授業を行ってもらった。上記のように、どの教員からも肯定的な感想が示され、本開発資料の成果を検証することができた。「校内研修で活用する」という考え方や「蓄積して次年度以降の基礎資料とする」という意見は、研究・開発の過程で想定していなかったものであり、本開発資料を教員一人一人だけでなく組織的にも活用することで、学校全体で道徳科の指導をさらに充実させることができ

る可能性が示唆された。

2 開発資料を活用した今後の展望

本研究では、「どのように道德科の授業を組み立てればよいか分からない」、「道德科の授業で何を考えさせたり何について話し合わせたりすればよいのか」が難しい」といった教員の声に応じて、「考える道德」、「議論する道德」を実現し、生徒の道德性を着実に育む指導の在り方について、全ての教員が理解し、実践していけるようになるための具体的な手だてを開発してきた。そしてその過程で、道德科の授業を構想する際の補助となる資料として「授業構想チャートシート」及び「授業構想シート」を開発した。

今後、道德科の指導をより一層充実させるために本開発資料を活用する取組として、以下を提案する。

(1) 区市町村教育委員会の研修での活用

区市町村教育委員会が主催する各学校の道德教育推進教師を対象とする研修において、本開発資料を活用する。所属校の他の教員に、本開発資料を活用して指導・助言を行い、学校全体の道德科の指導力の向上を図れるよう、具体的な手だて等について協議する。研修に参加した道德教育推進教師が、研修に基づく取組を各所属校で実施することにより、域内の全ての学校の指導力の向上を図ることができる。

(2) 校内研修での活用

前述の教員の感想にもあったように、校内研修において本開発資料を活用する。「授業構想チャートシート」に基づいて構想した授業を研究授業として実施し、全教員が参観する。その後、研究授業の構想の考え方や工夫等について「授業構想チャートシート」を参照しながら協議し、効果的な授業づくりの在り方について理解を深める。研修後に各教員が「授業構想チャートシート」に基づいて授業を構想・実施し、その成果と課題を学年間等で共有する。研修をその場限りのものとせず、教員の指導力の向上につながる取組として継続させていくことができる。

(3) 校内の道德科の指導の基礎資料としての活用

校内で全教員が「授業構想チャートシート」を共有し、その流れに沿って年間の授業づくりに取り組む。この取組によって、教員間の指導力の差を縮めることが可能となる。また、教員同士で道德科の授業の在り方や指導の工夫、その成果等について、同じ視点から話し合うことができるようになる。校内研修を設定せずとも、道德科の指導の在り方や効果的な指導の工夫等について、教員の理解を深めていくことができる。

上記のような取組により、全ての教員がねらいが明確で適切な指導の工夫を取り入れた授業づくりができるようになり、その結果として、生徒一人一人の道德性が着実に育まれていくことが、本研究の目標とするところである。

なお、「授業構想チャートシート」及び「授業構想シート」では、道德科の評価の具体的な方法等について示すことができなかった。今年度から記述による道德科の評価に取り組む中学校においては、評価の考え方や方法等への関心が高い。評価に関わる内容を開発資料に加え、さらに充実したものとしていくことが、今後の課題である。

平成 31 年度（2019 年度） 研究開発委員会（中学校）名簿

中学校国語研究開発委員会

委員長	北区立田端中学校	校長	石川 俊一郎
委員	板橋区立赤塚第二中学校	主任教諭	森田 直実
委員	葛飾区立新小岩中学校	主幹教諭	福住 貴夫
委員	東村山市立第四中学校	主任教諭	大河内 麻衣
[担当] 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 鈴木 太郎			

中学校社会研究開発委員会

委員長	世田谷区立駒留中学校	校長	高山 知機
委員	墨田区立吾嬬立花中学校	主任教諭	新井 剛広
委員	世田谷区立砧中学校	教諭	平田 正幸
委員	練馬区立大泉中学校	主任教諭	石本 貞衡
委員	武蔵村山市立第五中学校	主幹教諭	佐野 貴宏
[担当] 東京都教職員研修センター研修部教育経営課 統括指導主事 隅田 登志意			

中学校数学研究開発委員会

委員長	武蔵野市立第四中学校	校長	竹山 正弘
委員	新宿区立新宿西戸山中学校	主任教諭	鈴木 浩二
委員	台東区立上野中学校	主幹教諭	横澤 康友
委員	杉並区立天沼中学校	主幹教諭	藤原 哲也
委員	東久留米市立西中学校	主幹教諭	高田 智行
委員	西東京市立田無第二中学校	主幹教諭	村松 健
[担当] 東京都教職員研修センター研修部授業力向上課 指導主事 浅山 佳一			

中学校理科研究開発委員会

委員長	町田市立町田第一中学校	統括校長	花田 英樹
委員	江戸川区立篠崎中学校	主任教諭	渡邊 純
委員	江戸川区立西葛西中学校	主任教諭	酒井 優
委員	調布市立調布中学校	主幹教諭	中尾 知之
[担当] 東京都教職員研修センター研修部教育経営課 指導主事 鎌田 智義			

中学校保健体育研究開発委員会

委員長	練馬区立大泉西中学校	校長	中山 兼一
委員	中野区立第四中学校	主幹教諭	佐藤 祐介
委員	杉並区立中瀬中学校	主任教諭	小柳津 章文
委員	練馬区立開進第三中学校	主任教諭	佐藤 宏司
委員	福生市立福生第三中学校	主幹教諭	黒柳 真吾
[担当] 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 美越 英宣			

中学校外国語研究開発委員会

委員長	武蔵野市立第五中学校	校長	刀根 武史
委員	目黒区立目黒中央中学校	主任教諭	相沢 隆二
委員	葛飾区立四ツ木中学校	主任教諭	前田 宏美
委員	武蔵野市立第一中学校	主任教諭	坪田 裕希
委員	調布市立第五中学校	指導教諭	加藤 真由子
委員	日野市立七生中学校	主任教諭	永井 剛
[担当] 東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事 窪田 香			

中学校特別の教科 道徳研究開発委員会

委員長	調布市立第六中学校	校長	臼倉 美智
委員	品川区立品川学園	主任教諭	戸上 琢也
委員	江戸川区立小岩第四中学校	主任教諭	平野 太一
委員	青梅市立第一中学校	主任教諭	辻山 登紀子
委員	東久留米市立西中学校	主幹教諭	小柳津 智子
[担当] 東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事 吉川 泰弘			

平成 31 年度（2019 年度）
研究開発委員会指導資料集〔中学校〕

令和 2 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849